

学 位 論 文

1920、30年代の日本出版文化における
対中国イメージと中国認識

指導教員 遊佐 徹

許 丹青

岡山大学
大学院社会文化科学研究科 博士後期課程

修了年月日：2021年3月25日

目次

第1章	日本の中国認識に関する先行研究と本論の問題意識	1
1.1	近現代日本の言論空間と中国観	2
1.2	先行研究の整理と本論のテーマ設定	4
1.3	本論の構成	8
第1部	1920、30年代の日本出版文化における対中国イメージと中国認識	12
第2章	雑誌『中央公論』と中国	13
2.1	五四運動期の後	14
2.2	1920年代半ば	17
2.3	山東出兵までに	20
2.4	焦点となる満蒙問題	22
第3章	改造社と中国	29
3.1	バートランド・ラッセルの紹介を通して見た対中国認識	30
3.2	座談会「対支国策討議」に示された中国認識	37
3.3	特集号「現代支那号」に書かれた「現代中国」	40
3.4	『支那事変—北支之巻』から見る山本実彦の戦争認識と中国認識	43
第4章	岩波書店と中国	54
4.1	古典の普及と中国に対する尊重	55
4.2	「岩波新書」の刊行	60
4.3	雑誌と時局	65
4.4	岩波茂雄による五箇条の御誓文と彼の中国認識	68
第2部	1920、30年代日本における対中国認識の共通点—日本における新しい中国への注目	76
第5章	「ヤング・チャイナ」に注目して	79
5.1	胡適と東西文明の論争	80
5.2	革命青年戴季陶	83
5.3	中国への期待と中国認識のずれ—むすびにかえて	86

第6章	「新中国」について	88
6.1	資本主義か社会主義か	89
6.2	対中国政策	91
6.3	対中国認識における雑誌メディアの役割—むすびにかえて	92
第7章	まとめと展望	95
7.1	各章のまとめ—中央公論社、改造社、岩波書店における中国の扱われ方の特徴	95
7.2	1920、30年代日本における対中国認識の特徴	97
資料:	『中央公論』、『改造』に掲載された中国関係の文章一覧表及び岩波書店中国研究刊行一覧表	100
参考文献		114
謝辞		123

第1章

日本の中国認識に関する先行研究と本論の問題意識

はじめに

「大共同社会とは、不断に拡大し続け、また複雑に分枝する協働的活動の諸結果がことばの完全な意味において熟知され、その結果組織された明確な「公衆」が出現するような社会である。最も高度な、最も困難な種類の探究と、精巧で、微妙で、生气に満ち、かつ敏感なコミュニケーションの芸術とが、伝達と普及のための物理的な機構を手に入れて、それに生命を吹きこまなければならない。」

ジョン・デューイ『公衆とその諸問題 : 現代政治の基礎』¹

20世紀初頭に哲学者であるジョン・デューイ (John Dewey) は『公衆とその諸問題 (The Public and Its Problems)』(1927年)で民主的な諸制度が持続的に展開するための要件として、民主主義を支える「公衆」の出現と「大共同社会」を実現することを挙げている。そして「大共同社会」を実現する条件を「マス・コミュニケーション」を媒介にした共同意識、つまり世論の形成と結論付けた。ここで問題となるのは、マス・コミュニケーションの媒介である大衆媒体、つまりマスメディアの虚偽性と真実性である。言い換えると、他者のイメージはメディアを通して得た情報によって形成される以上、その情報は十分なのか、正確なのか、メディアはどんな方針、姿勢で報道に当たっているのか、という諸点への関心とその批判的検討が必要なのである。そうした視座のもと国際社会

が大きく変容しつつあった1920、30年代の日本の出版文化を中心としたメディアを対象に、日本の対中国イメージと中国認識の形成の過程と実像の解明を目指すのが本論の目的である。

1.1 近現代日本の言論空間と中国観

日本の中国認識に歴史上最も大きなインパクトを与えた出来事が明治維新以降の日本の近代化であったことは誰しもが認める事実であろう。

明治維新以降、近代国家として新たな目標を欧米に見出し、急速に近代化を推し進める過程で、中国（および近隣のアジア諸国）との間に政治的、文化的、文明論的に新しい距離感が意識されて従来の中国観に大きな修正が加え続けられていくとともに、日清戦争、日露戦争に代表されるたび重なる実力行使によって確認された優位性が決定打となって中国（および近隣のアジア諸国）に対する蔑視の意識が蔓延し、中国の後進性の強調を基本とする言説が主流になっていき、やがて中国を指導、支配、侵略の対象とみなすことになる——近現代の日中関係を日本の中国観の変遷という観点に立ってごく大括りにまとめると一般にはこうした説明が可能であろう。しかし改めて近代日本の中国観の形成に大きな役割を果たしたメディアにレベルに立ち返ってそれを具体的に検証するならば随分異なった状況も見えてくることになる。

近年明治期の教科書・雑誌・地方新聞・講談・演劇を資料に明治期の中国観形成の実像を丹念に探った金山泰志の研究によれば明治期日本における一般民衆の中国観の実態は「古典世界の中国への肯定観」と「同時代の中国への否定観」という中国観の二面性の存在」があることであり、さらに「国家主導的側面の強い小学校教育では、中国への否定的言説に対し警鐘が鳴らされていた」のに対して、「メディアで否定的評価を伴った中国が盛んに語られていた」ことから、「メディアというものは国家に統制され、従属しているだけの存在でない」と日本の中国観におけるメディアの役割を提示している。² この研究からだけでも近代以降の日本の中国観の形成と広まりの実像を探るためにはそれを担う役割を果たしたメディアの存在に着目し、またそれを具体的に解析することの必要性が見えてくることになるだろう。そもそも近代とは世界規模で新メディアが生まれ、新たな言論空間を形成した時代でもある（近代国民国家こそメディアの産物なのであった

——B・アンダーソン『想像の共同体』)。私達はいま一度メディアの存在とその働きに立ち返って近代以降の日本の中国観の形成とその影響の実際を明らかにする必要があるのではないだろうか。有山輝雄氏がいうようにメディアは「ある時代・ある社会特有の空間意識・時間意識を作り出す」³ 力を持つ。メディアの力、機能に着目することで明治維新以降における日本、日本人の対中国イメージ、中国認識の実像をより明瞭に描き出すことが期待できるのである。

本論では以上のような観点に立って研究の対象とする時代を 1920、30 年代に設定することにした。それは以下のような理由と関心に基づく。

まず、一つ目の理由を述べる。明治期において「読者層の大部分は中産層によって占められていた」⁴ のに対して、大正期以降の読者層は「労働者・農民・女性等、より大衆へと」⁵ 拡大した。さらに、労働者の読書により階級意識の覚醒が見られ、より一層労働運動の発展に拍車がかかった。労働運動、社会運動の活発化とともに、政党政治と普通選挙の実現は大正デモクラシーを育む温床となった。同時に「労働者をはじめとする大衆読者層の登場」は他方、「知識人読者」の意識を生み出した。⁶ これらの知識人たちはまさに政治・社会問題に対して自らの見識を有する者であり、出版というメディアを通じて、政治社会問題に対する施策を講じ、論調を左右する役割を果たした。アレン・S. ホワイティンは『中国人の日本観』において、「イメージ」を「国民、国家、民族のあらかじめ規定されたステレオタイプで、歴史、経験、自己イメージの選択的解釈から生まれるものをいう。具体的〔操作的〕には、イメージは相手側が一般的にいいか悪いか、強いか弱いか、味方か敵かを定めるものである」と定め、「認識」を「相手側の声明、行動、出来事などをあらかじめ存在するイメージによって、枠をはめられ規定された、選択的な識別のこと」と定めている。⁷ それを参考にして、本論は日本出版文化における対中国の肯定的・否定的というイメージを検討するのみならず、各出版社が「選択的な識別」によって行った出版事業から提示した対中国認識を検討することを目的とする。

また、1920 年代以降は日中関係が新たな時代を迎えていた時代であった。五四運動以降中国においては民主主義と科学主義が導入され、社会主義運動、労働運動が盛んになった。それに 1920 年代の初期において旧来の文化と西洋のものが激突する状況下で、東西文明をめぐって、中国の文化・思想の新旧についての論争が展開されることになった。一

方、日本においては米騒動とそれ以降の労働運動の発展、加えて民主主義の風潮の高揚により、社会主義流行の現象も現れた。⁸ また、富国強兵の近代日本において生活の西洋化が進んだ中で中国の古典に目を向けた「支那趣味」の流行が生まれた。このように政治的、経済的、文化的の面で日本と中国は対照的であった。このような日本と中国が対照的に政治的、経済的、文化的の面で新たな時代を迎えていた状況はこの研究を進める上でのもう一方の柱となる。

そして、1920、30年代はまさに日本の中国政策が世界情勢への対応というファクターを含みながら大きく変化しやがて全面对決へ向っていく時期であった。1921年からのワシントン会議では、ワシントン海軍軍縮条約、四カ国条約、九カ国条約が調印され、1920年代初期日本の対中国政策はワシントン体制にそった対英米協調を根幹に、山東省をはじめとする利権を放棄し、既得の満蒙権益に関しては現状維持を基本政策にした。1920年代後期に入り、北伐が進展するにつれて、英米をはじめとする列強が中国のナショナリズム的な要求に譲歩しつつあった。日本においては満州問題に関して張作霖を支持し、満蒙権益の擁護、拡大を目指すのか（田中外交）、対英米協調を重視し、中国への不干渉政策をとるのか（幣原外交）が中国政策の焦点となっていた。このような状況を背景に政治政策を討論する場を提供するメディアが対中国不干渉政策を支持したのか、満蒙権益の擁護、拡大を目指して強硬政策を支持したのかなどその方針と姿勢を検討することを三つ目の目的とする。

以上三つの理由から本論は1920、30年代の言論空間において、中国がどのような形で論じられたのかについてその実際を明らかにすることとメディアが読者に「中国」を伝える時に果たした役割について考察していくことを課題とする。以下では日本の対中国イメージと中国認識に関する研究を回顧し、本論の問題意識と問題の設定を論じることしたい。

1.2 先行研究の整理と本論のテーマ設定

本論の研究対象は1920、30年代の日本出版文化における対中国イメージと中国認識であり、このテーマにかかわる先行研究は近代日本における対中国認識である。これについては、先行研究はすでに相当規模で蓄積されていて、様々な角度から論じられている。

まず、1920、30年代の日本における対中国認識に関する先行研究をまとめてみると、野村浩一『近代日本の中国認識』⁹、岡本幸治『近代日本のアジア観』¹⁰、子安宣邦『日本人は中国をどう語ってきたか』¹¹などの関連研究があげられる。¹² また、専著以外に論文も相当の数がある。¹³

近代日本における対中国認識に関する先行研究をまとめてみると、次の特徴を指摘することができる。すなわち従来の日本人の中国認識に関する研究は、吉野作造、内藤湖南、尾崎秀実、橘樸など特定の個人に焦点が当てられるのが主流であるという点である。無論、これらの知識人の対中国認識の解明は、彼らの著作や雑誌、新聞に掲載されていた記事の分析によって可能になったのであるが、出版（書籍、雑誌）や新聞、各メディアは一方で各自の性格を持っており、その編集方針や論調を分析することを通じて個人の思想や知識を超えたところに成立していた対中国認識を解明することができるのである。それに、各メディアは著者・読者を結ぶ架け橋であり、各メディアは時代の渦の中で積極的に読者を誘導し、自由主義・国際主義を守ろうとしていたのか、それとも消極的に時代の渦の中に呑み込まれてしまったのか、メディアの視点から対中国認識を検討することによりメディアの責任を問い直すことができると考えられる。

では、メディアの視点から対中国認識を検討する先行研究を見てみよう。後藤孝夫『辛亥革命から満州事変へ—大阪朝日新聞と近代中国』が「内には立憲主義、外へ帝国主義」という二つの顔をもって展開した大正デモクラシーの生成・発展・衰退の過程を、辛亥革命（一九一一年）から満州事変（一九三一年）まで、ちょうど二十年間にわたる大阪朝日新聞の日中関係論を通して検証¹⁴し、新聞メディアの視点から1920、30年代日本の他者認識を問い直している。古屋哲夫は『近代日本のアジア認識』で『東京日日新聞』、『神戸又新日報』、『教育時論』など新聞・雑誌を利用し、近代日本のアジア認識を総体として捉え直している。¹⁵ 前掲の金山泰志の『明治期日本における民衆の中国観』も教科書や教育雑誌に注目し、明治期において一般民衆の中国イメージを検討している。¹⁶ ほかに銭鵬の「日清戦争直後における対中国観及び日本人のセルフイメージ—『太陽』第一巻を通して」¹⁷、楊沛の「雑誌『旅』に見られる近代日本人の中国観について」¹⁸などの論文も、メディアを検討対象とし、雑誌に掲載された対中国政策、対中国認識を抽出している。

前節で述べたように、1920、30年代の前半は辛亥革命や五四運動の成果を受けて中国

認識に変化が生じた時期、後半は日中戦争につながる重要な時代であり、以上の先行研究を踏まえても、1920、30年代の日本出版文化における対中国認識についてはまだ検討の余地があると考えられる。また、一次情報を提供する新聞メディアと異なって、出版メディア（書籍・雑誌）、特に知識人読者向けの書籍と総合雑誌は、日本政府の対外政策から影響を受けると同時に、政治社会問題に対する施策を講じ、論調を左右する役割を果たしたと考えられる。したがって、本論は当時の出版メディアを代表し、影響力を持っていた主要3メディア—中央公論社、改造社、岩波書店それぞれが提示した対中国イメージ、中国観について分析する第1部と、それらを総合して眺めるときに浮かび上がる日本の20、30年代出版メディアの可能性と限界について改めて俯瞰的に眺め、時代を象徴するトピックを取り上げて検討を進める第2部という構成をとる。

また、出版というメディアの対中国イメージと中国認識を考える際に、各メディアの言論ポリシーの存在を見極め、その発揮の状況、努力を検討することが重要であると同時に、出版というメディアも生産と流通に支えられた産業である以上、日本社会の政治・経済・文化の変化がそれに与えた影響と、どのように読者の興味を引く編集や誌面作りが行われたのかについても考えなければならない。出版社・社会・読者の三位一体の構造により、各出版社は各自の性格が浮彫にされる。したがって、研究に当っては、どのような理由で、どの出版メディアを研究対象にするのかを規定しておく必要がある。岡野他家夫は『日本出版文化史』で「明治時代前期—著者中心の啓蒙時代・明治時代中期—出版企業確立、大書肆勃興時代・明治後期から大正前期—出版事業確立時代・大正末期から昭和初年—予約物全盛から円本、文庫本の時代・昭和時代中期・昭和時期後期—終戦後の出版動向」¹⁹と六つの時代に分けて、日本出版文化の歴史を語っている。さらに、その中では「明治時代中期雑誌全盛時代」²⁰に生まれ、異例の長寿を誇る『中央公論』、「明治後期から大正前期雑誌の出版は大量生産時代へ移行した時代」²¹に生まれた『改造』、「全集、全書、辞書、大物出版など」が続々現れる時代²²に生まれた岩波書店の三つのメディアに特別な位置づけを与えている。これは中央公論社、改造社、岩波書店と中国との関係を検討することにより、大正から昭和初期におよぶ時間軸を意識した形で、対中国認識の変化を見出すことが可能であることを示唆している。また、この3メディアは大きな影響力を持っていた。1920年に長崎高等商業学校生徒を対象にして、雑誌読書調査を行った。

調査結果によると、高等教育を受けている生徒、つまり学生・知識人に多く愛読される雑誌の第一位は『中央公論』であり（調査人数 451 人の中で 157 人が『中央公論』を選んだ）、第二位は『改造』（調査人数 451 人の中で 84 人が『改造』を選んだ）であった。²³ それに「教養主義」を全面に押し出しいわゆる「岩波文化」をもって幅広い階層に古典と現代に対する良質な知識の普及に努めた岩波書店を加えることで当時の出版文化が学生・知識層に対して持った影響力は十分分析可能となると考えられる。

かつて竹内好は『近代日本と中国』²⁴ で出版人としての内山完造と田中慶太郎の対中国認識を取り上げている。その影響もあって、今まで出版を媒介とした日中文化交流史に関する研究は「内山完造」に集中していた。もちろん、出版の視点における日中文化交流の研究を目指すうえではまず内山完造に関する研究に注目しなければならない。特に小沢正元の『内山完造伝』²⁵ は重要な文献の一つで、いくつかの中国語訳本がある。小沢は内山完造の生涯を紹介し、内山の中国に対する親和的な思いを記述している。内山完造は中国文化を広く世に紹介するいくつかの本を刊行し、また魯迅をはじめ中国文化人との深い交流で知られ、戦後は日中友好の架け橋として全国を講演して歩いた。²⁶ しかし、出版を媒介として中国文化を紹介しようとしたのは内山だけではない。岩波書店の創業者である岩波茂雄も個人的に近代中国、現代中国に深い関係を持っているのである。彼は二度中国へ旅行したことがあった。一度目は 1927 年に、暮から正月の半ばにかけて、三木清と共に北京旅行、二度目は 1935 年 5 月から 12 月にかけての、欧米視察旅行への経由地としての訪問である。ヨーロッパへ向かう途中、岩波は上海をはじめアジア各所を訪れている。この行程で彼が感じたのは、植民地化されるアジアの苦境だった。本稿で岩波茂雄の出版活動を取り上げることにしたのは岩波が 20 年代終盤以降、世に「岩波文化」と称される良質の「教養」を提供し続けたことのみを理由とするのではなく、出版人岩波茂雄の履歴と活動自体が 20、30 年代の日本と中国の関係を考えるうえで重要な意味を持つと考えられるからである。同時に、改造社の社長を務めていた山本実彦は火野葦平、尾崎士郎のような文学者に中国に行くことを進め、彼らが中国体験を基にして書いた小説を出版したばかりではなく、自らも中国に行き、関連記事を残した。書籍の流通を担い、出版社を率いた個人という視点から彼らの対中国認識を把握するのが本論の第二のテーマである。

加えて本論では第三のテーマを設定した。吉田則昭は『雑誌メディアの文化史—変貌する戦後パラダイム』で「新聞が報道を旨とし、市民社会に広く一次情報を提供するのを使命とするのに対し、雑誌は特定のテーマに興味を有する限定された層を対象に、より深く理解できるよう編集加工された情報を提供している」²⁷と、雑誌の知的要素と民衆意識を反映することできる特徴を指摘している。すなわち、速報性を重視する新聞メディアと異なって、雑誌メディアは事実・情況の分析、特に専門家の見解、そして当事者や第三者の存在・見解を重視し、特定のトピックを取り上げて深い考察を進めることを特徴としているのである。総合雑誌から出発した中央公論社と改造社は雑誌を通じてどのような対中国認識を読者に届けようとしていたのかを解明するのが本論の第三のテーマである。

以上のような先行研究の指摘を踏まえ、本論では中央公論社、改造社、岩波書店を中心に、1920、30年代の日本出版文化における対中国イメージと中国認識を検討する。中央公論社、改造社、岩波書店に関する先行研究の整理は、各章でそれぞれの課題に関連してまとめる。

1.3 本論の構成

以上、見出されたテーマを追求するために本論では具体的に次のような点に焦点を当てて検討を進めていくことにする。

- 1、大正期の民主主義の形成に大きな影響力を持った『中央公論』の五四運動以降民主化を求める中国に対する評価を明らかにする。
- 2、1919年の創刊以来社会主義運動、労働運動に大きな影響を与え、同時に中国を独自の視点をもって見つめ続けてきた『改造』が五四運動以降社会主義運動、労働運動が盛んになった中国をどのように評価したのかを明らかにする。
- 3、岩波茂雄のリベラル・ナショナリズムの思想は彼の中国に関する出版活動を展開する過程でどのように反映されたのかを明らかにする。
- 4、雑誌メディア、特に知識人読者向けの総合雑誌は時代の渦の中で純粋に民主主義、自由主義、国際主義を守ろうとしていたのか、あるいは自国の国益を優先させたのかを明らかにし、対中国認識の分析を通じて出版メディアの可能性と限界を改めて

考える。

本論は以下の2部構成をとる。第1部は第2章から第4章まで、中央公論社、改造社、岩波書店を中心に1920、30年代日本における対中国認識を見る。第2部は第5章と第6章で、1920、30年代日本における対中国認識の共通点、つまり日本における新しい中国への注目の様相とその分析を試みる。

第2章では雑誌『中央公論』の対中国イメージと中国認識を取り上げる。「評論の公平」²⁸を出版方針として強調し、「デモクラシーの思想をもって一世を率いた」²⁹『中央公論』はどのような中国認識を持っていたのか、そしてそれはどのように変化していったのか。デモクラシーの高まりは、『中央公論』の中国認識においてどのような形であらわれたのか。さらには、1920年代から1930年代まで『中央公論』の中国認識は一貫していたのか。『中央公論』における1920年代から1930年代までの中国に関する記事を通して、『中央公論』の中国認識の形成過程と変遷の相貌を考察していく。

第3章では改造社の対中国イメージと中国認識を取り上げる。まず雑誌『改造』における1920年代から1930年代までの記事を通して、その中で「中国」についてどのように語られたのか、どのようなまなざしで中国及び中国人を見たのかを明らかにする。それに山本実彦が残した彼自身の中国体験を基にして書いた関連記事から彼の対中国認識を分析し、それがどのように改造社の出版事業と繋がっているのかを明らかにする。

第4章では岩波書店の対中国イメージと中国認識を取り上げる。岩波茂雄が残した遺文や他者により書かれた評伝を読み解き、時代背景を踏まえながら、彼と中国の出会いや経歴を振り返り、日中文化交流の重要な一側面としてその事実を解明し、それによって、彼と中国との関係の軌跡や特色を探ってみることとする。さらに、岩波の出版人として行った事業と中国との関係の再評価を行い、彼の中国認識の変化とそれが示す複雑性を提示することを目的とする。

第2部は第1部の結果を踏まえ、1920、30年代日本における対中国認識の共通点、つまり日本における新しい中国への注目という点を抽出し、検討を行う。まず「ヤング・チャイナ」の概念を明確にし、「ヤング・チャイナ」の紹介を通して、どのように中国の見ていたのかを明らかにする。そして「新支那」を語った際に中国のような側面を見ていたの

かを明らかにし、国民革命時期に両誌に中国の新しい様相に言及された論文を中心に、論者の中国論を取り上げるうえで、対中国政策に焦点をあてて、中国に対する評価と政策転換の方向性の諸類型を明らかにする。

なお、史料の引用に際しては、基本的に旧字体は適宜常用漢字体に改め、カナは原文のままとし、圏点・ルビ等は省略することとする。省略する箇所は（中略）で示す。「支那」、「満州」という中国に関する呼称については、原文を引用する際に歴史用語として捉え、そのまま使用する。紀年法は主に西暦で表示する。

註

- 1 ジョン・デューイ著、阿部齊訳『公衆とその諸問題：現代政治の基礎』（筑摩書房 2014年10月） 227頁。
- 2 金山泰志『明治期日本における民衆の中国観』（芙蓉書房 2014年2月）。
- 3 飯塚浩一、有山輝雄、竹山昭子「メディア史研究の方法をめぐって」（『マス・コミュニケーション研究』 57(0) 2000年1月）。
- 4 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』（日本エディタースクール出版部 1997年7月） 21頁。
- 5 前掲注4 同書 21頁。
- 6 前掲注4 同書 27頁参照。
- 7 アレン・S. ホワイトニング著、岡部達味訳『中国人の日本観』（岩波書店 1993年12月） 25頁。
- 8 歴史学研究会、日本史研究会『講座日本史 第7巻 日本帝国主義の崩壊』（東京大学出版会 1975年3月） 114頁参照。
- 9 野村浩一『近代日本の中国認識』（研文出版 1981年4月）。大隈重信、内村鑑三、北一輝、宮崎滔天、尾崎秀実、橋樑など近代日中関係史において活躍した知識人を取り上げ、近代日中関係の危機的な状況を打開しようとした人々の中国認識を分析している。
- 10 岡本幸治編『近代日本のアジア観』（ミネルヴァ書房 1998年5月）。徳富蘇峰、近衛篤磨、宮崎滔天、幣原喜重郎、北一輝、大川周明など主張してきた対外政策から日本人の対中国認識を探究している。
- 11 子安宣邦『日本人は中国をどう語ってきたか』（青土社 2012年12月）。北一輝の『支那革命外史』、内藤湖南の『支那論』、尾崎秀実の「東亞協同体」論、橋樑の『支那社会研究』などを取り上げ、日本の戦前・戦中・戦後という時期の日本人の中国論者によって、中国がどのように論じられてきたかを検討している。
- 12 そのほか、竹内実『日本人にとっての中国像』（岩波書店 1992年8月）、伊東昭雄『アジアと近代日本』（社会評論社 1990年2月）、安藤彦太郎『日本人の中国観』（勁草書房 1971年1月）、小林道彦、中西寛『歴史の桎梏を越えて—二十世紀日中関係への新視点』（千倉書房 2010年9月）松本三之介『近代日本の中国認識：徳川期儒学から東亞協同体論まで』（以文社 2011年8月）、岡本隆司『近代日本の中国観—石橋湛山・内藤湖南から谷川道雄まで』（講談社 2018年7月）など関連研究も確認することができる。
- 13 山根幸夫「日本人の中国観—内藤湖南と吉野作造の場合」（『東京女子大学論集』 19(1) 1968年9月）、小林文男「矢内原忠雄の中国観—「中国再認識」への志向と日中戦争批判の論理」（『アジア経済』 13(2) 1972年2月）、渋谷香織「横光利一の中国観—「上海」を中心にした一考察」（『東京女子大学紀要論集』 38(2) 1988年3月）、田中浩「長谷川如是閑の中国認識—辛亥革命から満州事変まで」（『経済学論纂』 34 1994年2月）、袁克勤「吉田茂の中国認識と政策」（『北海道教育大学紀要第1部B 社会科学編』 46(1) 1995年8月）、陸艶「1930年代中国社会の風景：内山完造の中国観から」（『龍谷大学仏教文化研究所報』 21 1997年10月）、山本義彦「準戦時・戦時体制下（日中戦争期）の清沢洌—あるリベラリストの中国認識（1）」（『近きに在りて』 34 1998年11月）山本義彦「準戦時・戦時体制下（日中戦争期）の清沢洌—あるリベラリストの中国認識（その2）」（『近きに在りて』 35 1999年6月）、西谷紀子「長野朗の1920年代における中国認識」（『大東法政論集』 11 2003年3月）、呉懐中「1920年代後半における大川周明の中国認識—満蒙問題対策との関連の視角から」（『中国研究月報』 58(1) 2004年1月）、武継平「『支那趣味』から『大東亜共栄』構想へ—佐藤春夫の中国観」（『立命館言語文化研究』 19(1) 2007年09月）、呂慧君「『大陸新報』から見る内山完造の中国観（1）」（『比較文化研究』 101 2012年3月）、張鈴「戦時下のリベラリストの東洋言説：谷川徹三の1930年代末期の〈東洋と西洋〉論をめぐって」（『名古屋大学人文科学研究』 42 2014年3月）、岡本隆司「近代日本がみつめた中国（2）石橋湛山の中国観」（『本』 39(10) 2014年10月）、黄翠娥「佐藤春夫の中国観について：戦時中を中心に」（『日本語日本文学』 42 2014年11月）など関連論文を確認することができる。
- 14 後藤孝夫『辛亥革命から満州事変へ—大阪朝日新聞と近代中国』（みすず書房 1987年9月） 1頁。
- 15 古屋哲夫『近代日本のアジア認識』（京都大学人文科学研究所 1994年3月）。

- ¹⁶ 金山泰志『明治期日本における民衆の中国観』（芙蓉書房 2014年2月）。
- ¹⁷ 鈴木貞美編『雑誌『太陽』と国民文化の形成』（思文閣出版 2001年7月）に収録される。
- ¹⁸ 楊沛「雑誌『旅』に見られる近代日本人の中国観について」（『立教大学ランゲージセンター紀要』（34） 2015年10月）。
- ¹⁹ 岡野他家夫『日本出版文化史』（春歩堂 1962年10月）目次を参照する。
- ²⁰ 前掲注19 同書 目次を参照する。
- ²¹ 前掲注19 同書 目次を参照する。
- ²² 前掲注19 同書 目次を参照する。
- ²³ 前掲注4 同書 29頁参照。
- ²⁴ 竹内好、橋川文三編『近代日本と中国 下』（朝日新聞社 1974年1月）。
- ²⁵ 小沢正元『内山完造伝』（番町書房 1972年1月）。
- ²⁶ 小沢正元の『内山完造伝』のほか、内山完造に関する本もいくつかがある。例えば、小泉譲『魯迅と内山完造』（講談社 1979年6月）、山本遺太郎『岡山の文学アルバム』（日本文教出版 1983年2月）、吉田曠二『魯迅の友・内山完造の肖像：上海内山書店の老板』（新教出版社 1994年9月）、『岡山県歴史人物事典』（山陽新聞社 1994年10月）などある。内山の他、文求堂の主人である田中慶太郎も書籍を媒介として郭沫若、魯迅、郁達夫、傅抱石ら中国人と交遊がある。1987年11月25日、田中慶太郎の三男田中壮吉は『「文求堂」主人田中慶太郎：日中友好的先駆者』（極東物産出版 1987年11月）を出版した。その中には魯迅、郭沫若、郁達夫、傅抱石らと田中慶太郎の通信30通が収録されている。1908年から1911年の間、田中慶太郎は中国北京で住宅を購入し、中国語を学び、中国の善本を探訪した。文求堂は有名な中国書籍の書店となり、日中文化交流のために、多様な活動をした。
- ²⁷ 吉田則昭、岡田章子編『雑誌メディアの文化史—変貌する戦後パラダイム』（森話社 2012年9月） 12頁。
- ²⁸ 1904年11月の『中央公論』に載せた社告。栗田確也『出版人の遺文 中央公論社嶋中雄作』（栗田書店 1968年6月）16頁。
- ²⁹ 前掲注28 同書 22頁。

第 1 部

1920、30 年代の日本出版文化における対 中国イメージと中国認識

第2章

雑誌『中央公論』と中国

はじめに

雑誌『中央公論』は、日本の雑誌の中で長い歴史を誇る総合雑誌として知られており、1887年8月「反省会」¹の機関誌として『中央公論』の前身である『反省会雑誌』にその歴史はさかのぼる。1892年5月に、『反省会雑誌』は、誌名からその「会」の一字を削って『反省雑誌』とし、1899年1月に再度の改題が行われて、『中央公論』となったのである。『中央公論』は「文壇の登龍門と呼ばれ、檜舞台となった」²一方で、論壇へ自らの思想を展開する舞台ともなった。大正時代に入り、第一次世界大戦後に、社会問題、労働問題が一般的に関心の的となると、『中央公論』にも社会主義的な論調が見られるようになった。吉野作造はそのような時代に『中央公論』に登場したのである。1914年の1月号に吉野作造の「学術上より観たる日米問題」が載せられた。それ以来吉野は『中央公論』にほとんど毎号寄稿をつづけることになり、第一次世界大戦が始まるとともに、世界的風潮となった民主主義の提唱と普及に力をそそぐことになった。³そしてほとんど毎号に中国に関する評論も寄稿することになる。吉野作造のほか、大正期の『中央公論』にしばしば執筆した評論家には、長谷川如是閑、堀江帰一、永井柳太郎らがあり、彼らは同時に中国通であり、彼ら書いた中国に関する評論もしばしば掲載された。昭和期の執筆者では、大正期にひきつづいて、吉野、堀江等の活動が注目される。また、1937年2月には、『中央公論』に矢内原忠雄の「支那問題の所在」と題する論文が発表されている。後にこの論文は「中国再認識」主張の一翼を形成していた「中国統一化論争」に新たな段階を切りひらくものとなったと位置づけられることになる。⁴

それについては、根岸智代氏は1935年から1936年にかけて『中央公論』において展開された中国言説を考察し、「中国が政治的経済的に統一される過程にあるとする現状認識は、1935年以來の日本の論壇における文脈に再定置することができる」と論じ、「中国統一化論争」へと発展する以前に、すでに『中央公論』誌において、「民族国家」としての中国統一に関する議論が行われていた」と指摘している。⁵

1920年代初期の中国においては、軍閥割拠の混乱、二十一箇条要求以來の排日、五四運動を経験する過程でナショナリズムの高揚が現出していた。その一方で、1920年代半ばには、日中関係は相対的安定の時期を迎えていた。この1920年代の中国観、及びその時間的な変遷を考察することは明治期におけるそれとは異なり、日本が政治、軍事、外交の面で世界のキープレイヤーの一員となり、また思想面でも民主主義や社会主義思想を咀嚼しつつあるなかで、中国の存在と中国の問題を考えることになったという点で重要なテーマであるとともに、さらには続く両国が厳しい対立関係に陥っていく30年代の中国観を検討するうえでもその前史としての重要性を持っている。

では、1920年代の雑誌『中央公論』はどのような中国認識を持ち、それはどのように変化していったのか。民主主義の高まりは、『中央公論』の中国認識においてどのような形であらわれたのだろうか。そして、1920年代から1930年代まで『中央公論』の中国認識は一貫していたのだろうか。本章では、主に『中央公論』における1920年代の中国に関する記事を検討することを通して、それらの問題に追っていく。

2.1 五四運動期の後

五四運動のスローガンとなった「外では国権を争取し（山東省の旧ドイツ権益が日本に渡されることへの反対）、内では国の盗賊を滅ぼそう（北京政府への反対）」のなかで提起された問題は五四運動の後にも解決されることなく、中国の国内には北京政府への反対と排日運動がまだ続いていた。このような状況のもとで、『中央公論』の誌面では中国の排日思想に対する議論が影をひそめ、安定した日中関係に基づいて、中国問題を扱うような状況が生まれていたのだろうか。それを明らかにするためには『中央公論』の中国に対する言論を論述する際に、『中央公論』の性格及び1920年代初期における日本国内の変動をも考慮に入れておかなければならないだろう。そのことを考慮に入れつつ、五四運動

期の後に『中央公論』が具体的に中国をどのように論じたについて見ていくことにする。

五四運動の直後、同時に数多くの日本メディアは中国に持続的な関心を寄せた。五四運動の勃発の原因について、日本への誤解説、⁶ 煽動説、⁷ 親日派内部の軋轢説、⁸ 中国外交失敗への憤慨説、⁹ 日本への怨望説、¹⁰ などさまざまな説がある。

これらに対して、『中央公論』は異なる態度を示した。1919年6月号に『中央公論』は巻頭言「北京学生団の行動を漫罵する勿れ」¹¹を載せ、「運動の成功をも切に祈る所あらしめよ」と中国の学生運動を支持する立場を表明した。そして、学生運動の目的については、

「之が為に吾人は多年我が愛する日本を官僚軍閥の手より解放せんと努力して来た。北京に於ける学生団の運動は亦此点に於て全然吾人と其志向目標を同じうするものではないか。」

と巻頭言で述べた。

この巻頭言は中国の学生運動を日本の民主主義運動と関連づけている。言い換えると、この巻頭言から、中国の学生運動と政府の官僚主義・軍閥主義に反対する運動とは切り離せないという『中央公論』の態度が読み取れる。この態度から『中央公論』の中国において官僚主義・軍閥主義と戦う民主運動を支持する姿勢が読み取れるのみならず、自国の官僚主義・軍閥主義に反対する立場も読み取れる。そして、このような官僚主義・軍閥主義への批判的な態度は引き続き日本政府の対中政策を論評した論説にも見られる。

1919年7月号の『中央公論』に「狂乱せる支那膺懲論」と題する巻頭言が掲載された。その巻頭言には当時の「支那膺懲論」は「無謀な企て」だと批判し、「支那人の暴行に対する自衛の策は決して等閑に附してはならぬ」と冷静に行動すべきだと呼びかけていた。そしてこの「支那人の暴行に対する自衛の策」の起源について、

「曰く斯くして兎に角戦争気分を民間に深め、動もすれば起らんとする軍備縮少

論の鋒光を挫かんとするに在り。曰く排米熱を民間に高め、之を転じて親米的＝彼等の斯く看做す所の＝民本主義者の社会的圧迫に利用せんとするに在り。又曰く排日運動の膺懲論をば巧に転用して、支那政府の自ら為す所の武斷的取締を援助すべしとの国民的輿論を作り、原内閣の方針をマンマと切り崩して、再び寺内時代の援段政策に帰らんとするに在りと。」

と述べ、官僚主義・軍閥主義に疑問を投じた。原内閣は成立当初は寺内内閣と違って、対華不干涉方針をとっていた。五四運動が勃発して、外務省は比較的に理解の行き届いた認識を持ち、傍観の対策をとっていたが、次第に変化をみせ、1919年9月に対華不干涉方針を変更し、徐世昌¹² 政権を支持し、中国の民主主義運動を批判しはじめた。¹³7月に書いた巻頭言に「原内閣の方針をマンマと切り崩して、再び寺内時代の援段政策に帰らんとする」を書いたことを考えると、この巻頭言には先見の明があったことになる。1910年代から1920年代へ変遷し、社会不安の時代のなか、対中政策を冷静に判断する立場と、日本における民主主義の未来への懸念を示すことを重視した『中央公論』の態度がここから分かる。

五四運動を機に、中国は不平等条約に対する不満をはじめて国際社会に示すようになった。中国の民族主義運動はいっそう高まり、その情熱は不平等条約の改正というかたちで具体化された。1921年に中華民国北京政府はドイツと「中独平和回復協定」を結んで、中国は近代以来はじめての平等条約を締結した。¹⁴そして1923年3月に中華民国北京政府は外相内田康哉にあて「二十一カ条」の廃棄を通告した。「二十一カ条」の廃棄をめぐる問題について1923年4月号の『中央公論』の巻頭言「日支条約改訂問題」は次のような立場を述べた。

「(一) 所謂日支条約並に其他の従来を取極に依て日本の支那に於て占むる所の地位は、何と謂っても正当の範囲を超えて居る。古い国際思想から云へば相当の根拠もあつたらう。従て一概に無条件に之を棄てよと云はるれば之に抗辯すべき理由もあるが、相当の方法を以て迫り来る改訂の要求には、今日の新形勢の下に於ては虚

心怛懷之に应ずべき筋合である。(二)既に有てる者が其の有てる所に過分の執着を示すを常とするが如く、奪はれたるものはまた回収に急なるの余り動もすれば其の要求を不当の極度に主張したがるも人情だ。此時に方り我々日本人としては、出来る丈冷静に事物の真相に透徹し、向ふから要求せらるゝまでもなく、我から進んで最も正しい解決案を示すべきではないか。(三)此点に於て支那側の具体案は必しも吾人の首肯し得るものではない。併しさうかと云って彼の要求に全然耳傾けざるは余りに利己的である。我々は彼の過度を責むるの他方に於て、自らの不当を反省せざるの過に陥ってはならない。」

この巻頭言からは、『中央公論』の「二十一カ条」の廃棄をめぐる問題に対する認識の特徴を三点指摘することができる。第一に、従来結んだ不平等条約により得た国家利益について「正当の範囲を超えて居る」と指摘し、權益拡張という帝国主義的な政策に反対を示した。第二に、再び日本の読者に冷静に事物についての真相を究明し、的確に判断できるようにと呼びかけた。第三に、「彼の要求に全然耳を傾けざるは余りに利己的である」と指摘し、相手国に一定の理解を示した。

大正中期から、「デモクラシー・吉野作造・中央公論」三位一体¹⁵というかたちで「デモクラシー」の思想をもって一世を風靡した『中央公論』は、1919・1920年ごろ日本社会や論壇が改造論・労働問題を盛んに議論していた時期においても民主主義の主張を展開し続けていた。¹⁶そしてこのような思想は『中央公論』の対中認識にも示されていた。五四運動期の後に載せられた社説からみると、『中央公論』は中国の学生運動を民主主義運動として扱い、中国の民族としての自覚を持ちつつあることに同情・支持を示し、中国と冷静・公正に接すべきという態度を示し続けていた。そしてこのような態度はその後も続いたのである。

2.2 1920年代半ば

前述したように、1920年代のはじめから中国において青年学生を中心とする思想革命、反軍閥・帝国主義運動が勃興し、民族の自覚が強まっていた。そこに、世界的社会思潮の

影響で中国においても社会主義運動が勃興し、国民党の運動と共鳴する状況が生まれたのである。このような中で、1925年には上海で市民による大規模な反帝国主義運動である五・三〇運動¹⁷が起こった。

このような状況に対して、この時期の『中央公論』には中国の国権回復運動に関する討論が多く見られる。1925年8月号に『中央公論』は巻頭言「支那問題がわが国民に与ふる試練」¹⁸を載せ、それに1925年9月号の特集「支那対外運動の現在及び将来に対する観測」¹⁹が注目される。これは1920年代に入って『中央公論』がはじめて取り組んだ中国に関する特集である。

一連の討論の目玉であったと思われる巻頭言「支那問題がわが国民に与ふる試練」には、「国際的卑屈支那が、早く国際的自由支那に進化する」ことを切実に願うという言葉が見られ、『中央公論』の一貫して中国の国権回復運動に対して支持する立場を取ることが読み取れる。「支那問題がわが国民に与ふる試練」を掲載するのは国際的環境や中国の現実にもっと目を配り、国際平和的構想に基づき、自主国家である中国のことを十分に考慮したうえで対応しなければならないということを強調するためだと考えられる。『中央公論』が具体的にどのような視点から中国の現状を見ることを強調したかについて、1925年9月号の特集「支那対外運動の現在及び将来に対する観測」を追跡してみよう。

第一に、中国思想の変化への注目を呼びかけた。

五四運動により、中国の知識人たちは、思想運動、社会運動、国家運動に力を注ぎ、また、伝統的・古典的な思想・価値観を打破することを図り、文学革命、思想革命、新文化運動に身を投じた。また、西洋の思想を積極的にとり入れ、デューイ、ラッセルなど西洋の知識人を中国に招聘した。さらに、ロシア革命の影響をうけて、中国においては社会主義の思想が広まり、政治革命・社会革命が勃興した。こうした中国で起こった変化に対して、中国の新思想を把握するのは日本のためであるという主張を『中央公論』は繰り返し展開している。

「今回支那国民の対外運動を、先づ思想方面から見れば、要するに、その個人思想国民思想の自由解放が、同じく国際的のそれと結びついた民族自覚、民族自

決の結果である」²⁰

「今後の支那問題の重点となり、支那考察の最高目標として選定すべきものは、支那の思想変調である。こゝに思想変調といふのは、世界的思潮に感化されて、支那殊にその青年の思想が変化して、漸次、国民的結合意識の向上へ進み行くといふ意味である。古るき支那から新しき支那へ、昨日の支那から明日の支那へ移り行く最大の推進力は、是の思想変調である」²¹

ここでの「対外運動」とは五・三〇運動のことである。五・三〇運動を機に、中国の労働運動、社会主義運動が一層盛んになり、民族自覚、民族自決を求める声はいっそう高まった。五・三〇運動を機に、中国思想の変化への注目を呼びかけたのは『中央公論』だけではない。例えば、『改造』1925年7月号の巻頭言は、早速「支那新人の新支那運動」というタイトルで五・三〇運動に触れた。「支那の人々が、特に支那の学生団が事あるごとに国権の回復、不平等条約の撤廃を高唱するのは、情理よりして当然のことで、我々も彼等の意中に同感を禁じ得ぬものがある」²²というのが『改造』の評価であったが、そこには中国の若い世代に同情するとともに、その存在を重視する姿勢が見られる。

第二に、中国の立場に立って中国問題を考えると主張した。例えば、

「支那国民の立場になっても考へ、客観的よりも寧ろ主観的に、同情と理解とを備へて、これを考察せざる限り、その真相を掴むことが出来ぬ」²³

「思ふに日支両国は隣国であり然も同文同種である、国民も大体支那の国権回復に同情を有するは明かである、我外政当局は此種問題については日本こそ当然他国に率先し他国を誘導して、支那国民の希望を実現せしむるに努めねばならぬことを記憶す可きである」²⁴

「支那の新思潮のなかに閃めく国民的意識向上の光りといふものは、彼れ是れ

と一々指摘し得るものではなく、一ツの大勢として認め得らるゝものである。その大勢を認めるのと認めないのとでは、対支態度の上に大きな相違を生ずるわけである。支那の民意を尊重するといふ事も、畢竟、この光りを認める事に外ならぬのである」²⁵

これらの言説からは『中央公論』が1920年代半ばには日中両国の間が相対的安定の時期を迎えると、1920年代のはじめでは冷静さを失ってはならぬと呼びかける論調が主流であったのに代わって、中国の思想の変化への注目を呼びかけるようになったことがわかる。それは『中央公論』が対内的にも対外的にも民主主義を主張していたことに基づく。しかし、「日本こそ当然他国に率先し他国を誘導」²⁶すると述べて、日本をアジアの指導者として、アジアの独立と自由を獲得し、中国を国際的平等の地位に引き揚げんとの主張は上からの目線であるといわざるを得ず、やがて「大東亜共栄」構想へと帰結していくことになる。また、国際的な視野から見ても、上掲引用2段目の著者米田実が同文のなかで示していたように英米の政策に妥協を重ねながら中国の国権回復運動を見るのは、中国の国権に関して曖昧な認識の背景にある隠された意味の現れなのかもしれない。将来における日本の中国での権益保障に支障とならないような配慮にしか見えないのである。

また、この時期の『中央公論』の誌面には中国統一に関する議論は見当たらないが、小村俊三郎の「支那の対外運動とその立体的考察」は、「目下の不平等条約の廃棄運動は、主として孫文氏が、生前の北上以前から主張し、国民党がこれを全国に宣伝した結果、今日の勢をなしたものである」²⁷と、孫文をはじめとする国民党への関心を示しはじめている。

2.3 山東出兵までに

孫文が亡くなった後、蒋介石が孫文の事業を受け継ぎ、広東に国民政府を組織し、1926年から全国統一をめざす北伐を開始し、1927年4月には南京に南京国民政府を樹立することになる。戴季陶²⁸は南京国民政府の重要構成員として、それに先立つ2月に日本を訪問し、孫文の大アジア主義を提唱すると同時に、日本の国民革命に対する理解と協力を

求めた。『中央公論』は戴季陶の講演及び訪日をめぐり関連する社説を載せ、

「第一に、日本の民衆は南方諸君の改革的精神に同情し偏にその成功に祈って居る。

第二に、承認問題に就ては吾人の立場は或は少しく諸君の要求と違ふかも知れない。

第三に、我々は適當の方法を以てする法規慣例其他条約等の改訂には喜んで応ずるものである。²⁹

との立場を示した。北方軍閥政府と国交を絶つという要求は断ったが、「支那は諸君の力に依て既に立派な形を整へ始めて居り、我々はまた断然侵略主義を棄つるに決意したからである」³⁰と国民党に期待を寄せた。『中央公論』はさらに戴季陶の「中国革命運動の歴史的考察」、特集「蒋介石論」中の殷汝耕「徹頭徹尾誠意の人」など、中国人の寄稿を掲載して、中国の北伐運動に関する情報を詳細に論じた。続けて1927年5月号の巻頭言³¹でも、以下のように国民党への支持を示している。

「吾人の見る所を卒直に云はしむるなら、支那の中心勢力は、また中心勢力たるべきものは、巨人孫文先生の遺鉢をつぎ三民主義の綱領を厳守する国民党の外にはないと確信する。」

前節で述べたように、1920年代半ばに『中央公論』はすでに国民党への関心を示しはじめていたが、日本が交渉すべき相手として国民党を重視していたことがここから改めてわかるのである。

1920年代半ばには、対中不干涉を旨とする第一次幣原外交の下で、中国の対日感情は相対的安定の時期を迎えたが、こうした状況を大きく変えたのが田中政友会内閣の山東出兵であった。田中政友会内閣は、1927年5月に中国南北の角逐にことよせて山東出兵を

断行した。山東出兵は居留民保護の名目で山東省への陸軍の出兵を行ったのであったが、周知のように、田中の外交政策の核心が満蒙の中国本土よりの分離にあったので、山東出兵もまた張作霖の北方軍閥を支持し、満蒙権益を擁護することを意図したものであった。山東出兵以来日本国内において満蒙権益擁護を目指すのか、それとも中国への不干涉政策を取るのかについて論争が盛んになってきた。『中央公論』誌上でも対中国認識において満蒙問題が焦点として浮かび上ることになる。

2.4 焦点となる満蒙問題

『中央公論』が1920年代後半に誌上で中国問題について言及した巻頭言は下記の通りであり、それを見ても満蒙問題が焦点となっていたことが明らかである。

「支那時局の正視」(1927年7月号巻頭言)

「政友会内閣の対満蒙政策」(1927年9月号巻頭言)

「張作霖の没落と満蒙問題」(1928年7月号巻頭言)

「支那の政治と日本の政治」(1928年12月号巻頭言)

「対支関係の前途と床次氏の立場」(1929年2月号巻頭言)

「対支外交の好転」(1929年5月号巻頭言)

「露支紛争の合理的解決を望む」(1929年9月号巻頭言)

「支那時局の正視」には「張の没落は既定の運命である」と説き、この観点について「張作霖の没落と満蒙問題」にもうかがわれる。

「我国が隣邦の自主権を尊重して、絶対に干渉がましき態度を避けようとなら、南北双方に向って断じて武装解除を迫るべきでない。併し乍ら満蒙に於ける帝国の特殊地位を楯に取りその範囲内於ける擾乱の波及を許さざらんとせば、先づ奉天軍に武装解除を迫り以て南軍進攻の目的物を掩ひ去らなければならない。而してその跡の始末をどうするかは自ら臆て定るべき中央政府と交渉すればいい。」

1928年国民革命軍の北伐が北京に迫ったため、6月3日に張作霖は列車で北京を退去し、奉天（現瀋陽）に引き揚げようとした。関東軍は武力で満州を中国から独立させようと謀り、出動の口実を得るために張を爆殺した。しかしこの真相は日本国民に秘匿され、政府が真相をつきとめたのも10月になってからであった。³² 実際にこの「張作霖の没落と満蒙問題」が書かれたのは6月1日であり、一見して日本の特殊権益にしがみつ়く姿勢を思わせるものではないことはわかるが、張作霖の死の前に書かれた文章を掲載するのは武力によって特殊地位の維持を図る姿勢に対し警鐘を鳴らす一文であったと見なすことができそうである。しかも「政友会内閣の対満蒙政策」に「我々国民は固より、云々の利権が獲られるからと安心して政府の出兵を忍耐しているのではない」と出兵の非を説いた文章と合わせて考えると、日本政府の武力による無法な挙動に対する批判の姿勢は明らかである。

また、「支那の政治と日本の政治」には「張作霖などを相手に見ん事支那を料理し得」るような対中政策を批判し、「個人の出来心で天下の支配された時代」はもう去ったと指摘し、中国における政治の新境地として「永く官僚の徒に惰眠を貪るを許し為に其専恣横暴に苦しむことも久しかったが、一度天運の廻り来て民衆の覚醒の始まるや、官界の覇者は一ト溜りもなく崩壊し、一足飛びに輿論を以て天下を支配する」ことを挙げ、「支那との関係の益々密なるを加ふる際、此辺の事も少しは考へなくてはなるまい」と新しい日中関係を考えるべきだと呼びかけている。このような民主主義に基づく輿論政治³³の必要性に着目するのは『中央公論』の対中国認識の特徴ともいえよう。³⁴

満蒙問題に関する巻頭言の分析からは、当時の日本国内における特殊権益擁護の主張、姿勢に対する批判に加え中国問題には冷静、客観的に対処すべきであるという『中央公論』の従来からの一貫した立場をうかがうことができる。そこで以下ではさらに『中央公論』が当時掲載した対中国政策に関する特集を分析することを通じて、対中国政策を特殊権益擁護の大勢のなかで、『中央公論』がそれについてあくまで民主主義の理想を掲げ続けたのか、それとも結局国益重視に傾かざるを得なくなったのかについて考察してみたい。

この時期において『中央公論』は対中国政策に関して「幣原外相中心の対支外交批判」

(1927年3月号)³⁵と「田中对中外交批判(1928年9月号)³⁶の二つの特集を組んでいる。両者に共通するのは幣原对中外交への支持と、田中对中外交への批判であるが、注目すべきは、共通する認識があるとは言え、对中国政策論に「自由主義」と「帝国主義」という矛盾が見られることである。ここではそうした矛盾について触れてみたい。

まず「自由主義」論を見てみよう。永井柳太郎³⁷は幣原外交に対して「自由主義を以て一貫し」、「支那国民の自主権を尊重し、公明正大の態度を以て日支共存共栄の大策を樹立せんとしつつある」と称賛するのに対して、³⁸ 田中外交については「満蒙と支那本部とを分離せしめ、満蒙だけが我勢力の下にあれば支那本部は如何様になっても構はぬと云ふが如き对支外交は、無謀且つ無分別と云はねばならぬ、国家の前途を誤る事大なるものである」と満蒙分立政策を批判している。³⁹ そこには彼の満蒙權益に執着せず、中国全体との関係を重んじるという姿勢が見られる。また、山川均⁴⁰は永井と同じく、「南支における立場を不利に導びく危険を冒しても、北満の權益を防御する」ことを田中外交の特質として指摘し、⁴¹ 日本政府の既得權益の擁護を以下のように批判している。

「既得權益の擁護といふことが、直ちに分裂対立した諸勢力とその現状維持を意味するものとなった。支那の国民的統一を妨げた最も有力な外的な勢力は、列国のかやうな伝統的な外交と、これによって築かれた謂ゆる既得權益にほかならぬ、そこで支那の国民運動は、必然に反帝国主義の運動とならざるを得なかった」⁴²

そこには山川の反帝国主義の精神と独立自主の主張と中国国民革命への同情、支持が見られる。

ところが、特集には「自由主義」的な態度を持っている一方、誌上に国益に基づき日本のいわゆる特殊權益を保持する方針を採るべきという「帝国主義」的な議論も見られる。その代表的論者は中村嘉壽⁴³と植原悦二郎⁴⁴である。中村嘉壽は「満蒙の既得権に対してなどは、毫も侵害を許してはならぬ」と主張している。⁴⁵ なお、植原悦二郎は「我国が東三省に於ける其特種「原文ノママ」の権利を放棄すれば、恐らく支那の自力によって満蒙の其主権と領土とを保全し能はざるのみならず、東洋の平和を攪乱する事象を誘発す

るに違ひなからう」と論じ、北伐による中国の漸次統一と中国の力量を否認している。⁴⁶このような観点の背後には日本が東洋を率いるという傲慢な意識が潜んでいたといえる。そして、これはのちの満州事変へ向かう思想的動因の一つともなった。

以上、1920年代後半に誌上に中国問題について言及する巻頭言と対中国政策に関する特集を中心に、日本の言論界を代表し、同時に政治・政策にかかわりがある人の対中国政策論を取り上げて考察してきた。その結果、次のようなことが判明した。巻頭言からみれば1920年代後半に『中央公論』は満蒙問題に注目し、日本のいわゆる満蒙特殊権益が中国民衆の要求と対立することと田中政権をはじめとする政友会の帝国主義的拡張政策を批判していた。⁴⁷第一次大戦後日本政府の中国内政不干涉政策と同調し、対中国認識において中立・公正な立場をとる『中央公論』は実際に張作霖の下野を期待している。その真意は民主主義に基づいた日中関係をつくることにあったのである。ここから『中央公論』の軍閥主義、帝国主義と戦う民主運動に傾倒した姿勢が分かる。

しかし、もう一步踏み込んで、様々な中国論を見ることが可能となる特集を分析してみれば、「自由主義」的な立場をとり、新しい中国の可能性に関心を持っている論調と国益に基づき、満蒙権益に執着する「帝国主義」的な論調が誌上に共生していることも明らかになる。民政党に属する永井柳太郎と民政党と対抗する政友会に属する中村嘉壽と植原悦二郎の文章を掲載するのはおそらく政治への配慮であろう。これはまさに総合雑誌としての限界だといえよう。

おわりに

本章では出版メディアの対中国認識の研究の一環として、日本の雑誌の中で長い歴史を誇る総合雑誌『中央公論』の1920年代の対中国認識とその変遷について分析を試みた。先行研究の「1935年以来「中国統一化論争」へと発展する以前に、すでに『中央公論』誌において、「民族国家」としての中国統一に関する議論が行われていた」⁴⁸を踏まえつつ巻頭言や特集の分析を進めたところ、本論では1920年代において『中央公論』は中国統一に関する議論を明瞭に論じることはなかったが、中国の民主主義運動を支持する態度と中国国民政府の存在をすでに視野に入れていたことを明らかにした。この点から考えて、1920年代から1930年代まで『中央公論』の中国認識には一貫した姿勢が認められる

といえよう。

もちろん、20年代初期には中国の学生運動を民主主義運動として扱い、20年代半ばになると日本が交渉すべき相手として国民党を重視するようになるという時期や状況に応じた関心の対象の変化は見られるが、一方、軍閥主義、帝国主義と戦う民主運動への支持という姿勢は揺らぐことはなかった。すなわち、民主主義の思想をもって一世を風靡した『中央公論』は対内的にも対外的にも民主主義の必要性を主張しつづけた。

時局に対する考えなければならないテーマについて、出版社として考え方をまとめて示した巻頭言を見る限りは、軍閥主義、帝国主義を批判し民主主義を提唱する立場に立っていた『中央公論』が同時に中国の民主主義運動を支持していたことは明白である。その一方、中国の国権回復運動に対し、日本が東洋を率いる西洋に対抗するという主導する姿勢も読み取ることができたのである。また、中国問題に関する特集から日本の満蒙權益に対し、既得權益を擁護する態度も明確に示していた。このような矛盾した態度、当時対中国認識の二面性は『中央公論』だけの問題だったのか、あるいはその他のメディアにも共通する態度だったのか。

本章では、1920年代の『中央公論』の対中国認識とその変遷を指摘したにすぎず、以下では他のメディアを視野に入れて考察する。「穏健な民主主義、社会主義の線にとどまっていた」⁴⁹『中央公論』に対し、「社会の関心を集めてきた労働問題、共産主義思想など尖鋭な左翼的論文を掲載し、またバートランド・ラッセルやアインシュタインのような世界的思想家、学者を招聘するなど、積極的な活動をしている」⁵⁰『改造』は1920、30年代の日本における対中国認識にどのような風穴を開け新しい理解の道を示したのかを考察する。

註

¹ 西本願寺の経営する普通教校の有志学生のあいだに、「禁酒進徳」を標語に結成された団体。

² 嶋中雄作『回顧五十年』（中央公論社 1935年9月）（栗田確也『出版人の遺文 中央公論社嶋中雄作』（栗田書店 1969年2月）） 20頁。

³ 1916年吉野作造は、雑誌『中央公論』に「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」と題する論文を発表し、「民主主義」という言葉を使い、デモクラシーつまり民主主義の必要を説いた。本論では用語を統一するために、「民主主義」の用語を使用する。

⁴ 日中戦争の戦前期の中国認識は主に中国の歴史及び文化を対象としていたが、1926年—1928年の国民革命及び1931年の満州事変を経て、中国問題や現代中国をめぐる新たな言説が登場しつつあって、1936年から1937年にかけて日本の論壇において「中国再認識」が主張されていた。その中に、矢内原忠雄をはじめ、尾崎秀実や中西功らの「中国統一化」をめぐる論争がおこっていた。

「中国統一化論争」の研究として、野沢豊「『中国統一化』論争について」(『中国統一化』論争の研究』 アジア経済研究所 1971年9月)、西村成雄「『中国統一化』論争の一側面—日中戦争前夜の中国と日本」(『歴史学研究』 391号 1972年12月)、西村成雄「日中戦争前夜の中国分析—「再認識論」と「統一化論争」」(『帝国』日本の学知』 岩波書店 2006年5月)がある。また、「支那問題の所在」をめぐる「中国統一化」論争に関する論文として、小林文男「矢内原忠雄の中国観—「中国再認識」への志向と日中戦争の論理」(『アジア経済』 13(2) 1972年2月)、根岸智代「1930年代半ば中国再認識をめぐる日本の論壇—『中央公論』誌を中心にして」(『現代中国研究』 (35・36) 中国現代史研究会 2015年11月)などの諸論がある。

⁵ 根岸智代「1930年代半ば中国再認識をめぐる日本の論壇—『中央公論』誌を中心にして」(『現代中国研究』 (35・36) 中国現代史研究会 2015年11月)

⁶ 「排日気勢重大—近因は山東遠因は借款」(『国民新聞』 5月7日)「其近因を山東問題に対する誤解に発したるもの」(『日本新聞五四報道資料集成』 京都大学人文科学研究所 1983年2月)

⁷ 「背後を見よ」(『国民新聞』 5月9日)「外人の煽動に依り遂に暴挙で出でたり」、「在支米人の妄動」(『大阪朝日新聞』 5月15日)「暴動の裏面に米人の煽動のあるのは今や公然の秘密である」(前掲書)

⁸ 「学生暴動裏面」(『京都日出新聞』 5月11日)「暴動の裏面には親日派内部の軋轢あるものゝ如く曹汝霖、陸宗輿の親日派に対する他の親日派の反感が其原動力にあらずや」(前掲書)

⁹ 「支那人の運動」(『時事新報』 5月16日)「講和予備会議に於て山東省問題に関する我主張の貫徹したるは当然の主張が当然に貫徹したるものにしても異とするに足らざるに支那人の間には之を以て自国の外交の大失敗なり非常の屈辱たりとし斯る失敗屈辱を来せる抑もの原因は所謂親日派の政治家が山東問題其他に関して売国の所業を取てしたるに在りとて大に之を憤慨する」(前掲書)

¹⁰ 「支那人の運動」(『時事新報』 5月16日)「我国を怨望するの念を深うし」(前掲書)

¹¹ 『中央公論』1919年6月号。原文には署名していないが、吉野作造の執筆である。以下の引用する「狂乱せる支那膺懲論」(1919年7月号巻頭言)「日支条約改訂問題」(1923年4月号巻頭言)も同じである。

¹² 1918年安徽派・奉天派の支持で中華民国第4代大總統に選ばれ、1922年第1次奉直戦争で、奉天派が敗れて、その後直隸派に排斥されて辞職した。

¹³ 藤本博生『日本帝国主義と五四運動』(『京都大学人文科学研究所共同研究報告『五四運動の研究』第一函3』 同朋社 1982年3月) 73—83頁。

¹⁴ 中華民国北京政府の外交史については、川島真「中華民国外交史から見た現代中国:民国前期外交史からの問い」(『北大法學論集』 51(4) 2000年11月)と「中華民国北京政府の対非列強外交」(中央大学人文科学研究所 『民国前期中国と東アジア世界の変動』 中央大学出版部 1999年所収)などの研究がある。

¹⁵ 前掲注2 同書 23頁。

¹⁶ 『中央公論社七十年史』(中央公論社 1955年1月) 145頁。

¹⁷ 1925年5月に、上海にあった日本人経営の在華紡の工場でのストライキ中に、日本人監督が中国人組合指導者の一人を射殺した。上海では学生らを中心として演説などの抗議活動をおこなったが、多数が逮捕され、さらに5月30日に工部局のイギリス・フランス治安維持部隊によってストライキ中の労働者が殺害、逮捕されるに至り、それを機に上海と青島にあった30ほどの在華紡の工場にストライキが広がった。これがいわゆる五・三〇運動で、現在ではこの運動は現代中国における代表的社会運動として知られている。

¹⁸ この巻頭言の署名は杉森孝次郎である。杉森孝次郎(1881—1968)は日本の社会学者、政治学者である。『中央公論』における杉森の初登場は1919年7月の「労働問題」増刊号に掲載された「労働問題の核心」である。それ以来誌上において活躍していた。

¹⁹ 特集には、小村俊三郎「支那の対外運動とその立体的考察」、米田実「支那の国権問題と英米の政策」、松井等「支那問題の重点」が含まれている。

²⁰ 小村俊三郎「支那の対外運動とその立体的考察」(『中央公論』 1925年9月号)。

²¹ 松井等「支那問題の重点」(『中央公論』 1925年9月号)。

²² 巻頭言「支那新人の新支那運動」(『改造』 1925年7月号)。

²³ 小村俊三郎前掲注20。

²⁴ 米田実「支那の国権問題と英米の政策」(『中央公論』 1925年9月号)。

²⁵ 松井等前掲注21。

²⁶ 米田実前掲注24。

²⁷ 小村俊三郎前掲注20。

²⁸ 戴季陶は中華民国の政治家である。名は良弼、伝賢、字は季陶、筆名によって戴天仇でも知られる。民国期の知日家でも知られ、彼が書いた『日本論』(1928年4月)は有名な対日観の一作品と見なされている。1905年日本に留学し、1911年中国同盟会に入会した。1913年と1924年に孫文が日本で「大アジア主義」について講演を行った時に孫文に随行し、日本語通訳を務めた。また、1927年2月から3月にかけて戴季陶は日本の中国革命への理解と日中関係の再構築を求めるために、日本を訪問した。

²⁹ 「無産政党に代りて支那南方政府代表者に告ぐ」(『中央公論』 1927年4月号巻頭言)。

³⁰ 前掲注29。

³¹ 巻頭言「日支両国大衆の精神的連繫」(『中央公論』 1927年5月号)。

³² 後藤孝夫『辛亥革命から満州事変へ—大阪朝日新聞と近代中国』(みすず書房 1987年9月) 296頁。

³³ 輿論について、佐藤卓己は『輿論と世論：日本的民意の系譜学』（新潮社 2008年9月）で戦前は世論と区別され使用されており、理性的な討議による合意、事実をめぐる公的関心のことと解釈している。

³⁴ 例えば、経済的自由主義に基づき、中国の近代化国家化という政治的社会的条件の必要性に着目し、日本政府の拡張政策を批判するのは長谷川如是閑の「満州放棄論」の特徴であり（銭昕怡「1920年代における長谷川如是閑の中国革命論」（『同志社法学』56(7) 2005年3月）、中国を市場として見て、中国へ統一と安定を望んだのは大阪朝日新聞の対中国認識の特徴である。（後藤孝夫『辛亥革命から満州事変へ—大阪朝日新聞と近代中国』（みすず書房 1987年9月）

³⁵ 1927年1月18日の（帝国）第52回国会（通常回）で幣原喜重郎外務大臣（第25代第1次若槻禮次郎内閣（1926年1月～1927年4月））の演説に対する評価はこの特集は中心的テーマである。（演説の内容は政策研究大学院大学・東京大学東洋文化研究所の日本政治・国際関係データベースを参照する。）特集が永井柳太郎の「幣原外交の本領」、信夫淳平の「幣原外相の対支外交の難点」、中村嘉壽の「現代日本の要求する大外交家」、植原悦二郎の「憂ふべき支那の現状と幣原外交」、神尾茂の「幣原外交」試練の時」が含まれている。

³⁶ 特集が永井柳太郎の「自ら侮る勿れ」、山川均の「田中外交の特質」、亀井貫一郎の「分裂外交の必然性」が含まれている。

³⁷ 永井柳太郎は憲政会・立憲民政党に所属し、第一次幣原外交期（1924年6月～1927年4月）に永井は外務参与官に就任していた。田中外交期には、民政党政調会外務部長に就任した。

³⁸ 永井柳太郎「幣原外交の本領」（『中央公論』 1927年3月号）。

³⁹ 永井柳太郎「自ら侮る勿れ」（『中央公論』 1928年9月号）。

⁴⁰ 山川均は社会主義者であり、大山郁夫・吉野作造と同じく、大正デモクラシーに著しく影響力があった。

⁴¹ 山川均「田中外交の特質」（『中央公論』 1928年9月号）。

⁴² 山川均前掲注41。

⁴³ 中村嘉壽は日本の衆議院議員であり、当時政友本党に属する。

⁴⁴ 植原悦二郎は政治家、政治学者であり、当時政友会に属する。

⁴⁵ 中村嘉壽「現代日本の要求する大外交家」（『中央公論』 1927年3月号）。

⁴⁶ 植原悦二郎「憂ふべき支那の現状と幣原外交」（『中央公論』 1927年3月号）。

⁴⁷ 「対支関係の前途と床次氏の立場」（1929年2月号巻頭言）に「帝国主義の甘夢に惑溺し加ふるに保守反動の特権階級の支持に立つ」と政友会を批判している。

⁴⁸ 根岸智代「1930年代半ば中国再認識をめぐる日本の論壇—『中央公論』誌を中心にして」（『現代中国研究』（35・36）中国現代史研究会 2015年11月）

⁴⁹ 栗田確也「解説 インテリ出版人嶋中雄作」（『出版人の遺文 中央公論嶋中雄作』（栗田書店 1969年2月）） 109頁。

⁵⁰ 前掲注49 同書 109頁。

第3章

改造社と中国

はじめに

雑誌『改造』（1919年4月から1955年2月まで）は大正末期から昭和30年代にかけて『中央公論』、『太陽』とともに、日本の主要な総合雑誌であった。1919年ごろの日本は「社会運動や労働運動に漸く目が開けそめた」¹時期であった。このような世相のなかで、雑誌の名を『改造』とし、編集方針としては、「現在許されている社会政策の線に添うこと」²としたのである。創刊号は巻頭に社説「帝国の主導的講和条件」などを並べ、第一次世界大戦後の思想・経済についてふれるものであったが、第四号からは編集方向を転換し、「労働問題社会主義批判号」と銘打って、編集視点を「労働者階級に向けはじめ」³ることになった。

同時に、『改造』は数少なからぬ中国に関する文章を掲載し続けた。創刊号では巻頭の社説「帝国の主導的講和条件」でも、中国政府、日本の対中国政策などにふれている。当時、パリ講和会議により、中国は新しい国内問題及び国際環境に直面していた。『改造』が中国に関する記事を載せ始めた時期は、ちょうどそのパリ講和会議の直後に当たっている⁴。また、1920年代の中国においては、軍閥と列強の圧迫に対抗する動きが強まっており、それを受ける形で、『改造』は中国の反帝国主義運動に常に注目する姿勢を取り続けることになった。

『改造』の中の中国の関連記事を表現形式から見ると、時評・論文・詩歌・漫画・劇・随筆など多岐にわたる。その結果として、雑誌『改造』は中国に関心を持つ日本の知識人に大きな影響を与える総合雑誌としての機能のみならず、ジャーナリスティックな時局解

説や文学的・芸術的・中国イメージの読者への情報提供の点においても重要な役割を果たすことになった。したがって、当時の日本における中国観の形成過程とその実像の解明にあたっては、『改造』は極めて重要なメディアであるということができる。

3.1 バートランド・ラッセルの紹介を通して見た対中国認識

1920年代の『改造』の中国問題へのアプローチは、バートランド・ラッセル⁵というイギリスの哲学者、社会批評家の目を通した形で展開するという特徴を示していた。1920年に、ラッセルは北京大学客員教授として中国に招かれた。第一次世界大戦後、近代以来の西洋の文明に対して疑問を持ち、西洋と違う価値観を求めため、ラッセルは中国に眼を向け⁶、中国に滞在している間に、「現代中国」⁷に出会うことになった。

ラッセルが出会った現代中国を早速日本へ紹介するために、1922年4月号の『改造』はラッセルの「支那の国際的地位を論ず」、および同年の8月号に彼の文章「支那文明と西洋」を掲載した。これらの文章でラッセルは観察した中国のことを紹介し、中国の発展を担うのは若い知識人たちであると述べて、中国の未来、そして中国の若い人たちに期待を示した。そしてラッセルは、欧米で教育を受けて帰国した、あるいは西洋の知識を教える中国国内の大学で西洋の技術や思想を学んだ若い知識人たちを「ヤング・チャイナ」⁸と称したのである。

辛亥革命により、中国では共和政府が樹立したが、近代的な政府を実現できず、軍閥割拠の混乱と、列強を中心とする外国勢力干渉と外国資本の脅威にさらされていた。ラッセルのいう「ヤング・チャイナ」とは、そのような環境のなかで、国家や人民のことを憂慮し、中国が当面の危機をのりきって自立することを目指し、民主主義を要求し、国を変える望みを西洋近代の思想、制度に求める一群であった。

中国の政治的独立の達成を求めた「ヤング・チャイナ」に対して、ラッセルは秩序のある政治の確立、中国人の手による産業の開発、教育の普及という三つの重要な条件が必要であると提案している⁹。中国は頑固な排外主義をとらず愛国心を身につけ、それを支えとした自立に成功した群体を擁することによって、新しく強い国になれるはずであるとラッセルは「ヤング・チャイナ」に期待を寄せたのである。そうしたラッセルの思いがどのように日本人の心に響いたのかを次に見ていくことにしたい。

3.1.1 国家観と愛国心

『改造』が最初にラッセルに注目したのは、彼の政治に関する観察眼で、1920年10月に中沢臨川¹⁰が翻訳した「政治の理想」という名の文章を掲載している。¹¹そして、ラッセルの政治に関する観察眼に注目したその基準はその後『改造』に載せられた彼の文章にも踏襲されていくことになる。ラッセルは山本実彦の依頼を受け、1921年1月号の『改造』に特別寄稿として「愛国心の功過」を寄せた。それ以降、ラッセルは1923年9月まで計15回に渡って政治評論的文章を寄せることになり、表3.1は、『改造』が掲載したラッセルの寄稿をまとめたものである。

表 3.1: 『改造』が掲載したラッセルの寄稿

題目	刊行日付
「愛国心の功過」	1921年1月号
「過激派ロシアの前途」	1921年2月号
「現下の渾沌状態の諸原因」	1921年3月号
「社会組織の良否の分岐点」	1921年4月号
「工業主義の内面的傾向」	1921年8月号
「工業主義と私有財産」	1921年9月号
「工業主義と国家主義との相互作用」	1921年10月号
「華盛頓会議と極東の将来」	1922年3月号
「支那の国際的地位を論ず」	1922年4月号
「未開国に於ける社会主義」	1922年5月号
「先進国に於ける社会主義」	1922年7月号
「支那文明と西洋」	1922年8月号
「相対性理論」	1922年10月号
「機械主義に対する抗議」	1923年2月号
「道徳的標準と社会的幸福」	1923年9月号

15回にも渡る寄稿の最初の一編となった「愛国心の功過」はタイトル通り「愛国心」に関する文章であり、その号の巻頭言とよく呼応したものとなっている。

その巻頭言「済世の誠意、救国の功利」の冒頭には、次のように記されている。

「世は社会だ。国際的社会が唯一の社会だ。国は社会の一要部だ。国際的社会は各国に多少内存し、列国に皆存する。立国の意思は、国際的社会を、成るべく多く

自国の内に発見し得る位置に進達する目的の追求であるべきだ。立身の意味が、成るべく多く国家社会を自己内に発見し得る位置に進達する目的の追求であると同理だ。自愛が愛国である如く、愛国は愛社会であるべきだ。自愛の一念を解放すれば、人は適当に愛国者ともなり、愛社会者ともなる必然的約束を有する。国の外難を救ふ途は、国の内弊を改革するにある。」

この冒頭文によれば、「国」について考える時、重要な観点は、それが「社会の一要素」であり、その「社会」とは「国際的社会」であるということである。そういう社会において個人、及び各国の諸要素に応じて、社会の中の人々がどのように国内の「内弊を改革」すべきか、「社会」の中の各国がどのように他国と接すべきかなどの問題が生じる。この巻頭言により、『改造』が目指す国家の理想態についての理解と位置づけをうかがうことができる。

国家に対するこうした理解は、国内の改革を重視することにつながる。そうした論調は『改造』にのみとどまることなく、例えば、1919年12月『中央公論』において、室伏高信が「改造論の一年」と題して、その一年間にさまざまな「社会改造論」が一齐に噴出してきたことを伝えていることから分かる通り、一種の流行となっていた。¹² ちょうどこの年に、改造社が発足し、新雑誌の題名に『改造』を選んだのも、その流れに沿ったものであった。¹³ 国内の改革を重視する『改造』のスタンスにはまさにこの時期の特徴を色濃く反映している。

また、国際的社会において日本がどのように他国と接すべきかについては、

「国際的社会を、わが宝と視る智眼あらば、撃退と防守とに忙しい手は、進取と攻略とに仕事変へしよう。国際的社会のために正善真美を進取するのだ。国際社会のために利益幸福を攻略するのだ。」

と巻頭言で述べた。

ここは「撃退と防守とに忙しい手は、進取と攻略とに仕事変へしよう」国際社会の一員として、積極的に大勢に順応し、偏狭的なナショナリズムをうちやぶって、「正善真美を進取」し、自国と他国を結びつけながら、「利益幸福を攻略」する、と主張している。

このような内容を持つ巻頭言を掲げる一方で、同号にラッセル寄稿の最初の文章として「愛国心の功過」を掲載することを通じて、『改造』は「愛国心」についてどのようなあり方を提示しようとしたのであろうか。

「愛国心の功過」では、ラッセルは愛国心を「吾人の行為を支配する幾多理想中の最強思想である」と位置づけ、この初心の功は「外来の不正の力もしくは暴圧」に抵抗する砦となり、しかしながら、この初心の罪は「自国が他の各国に比して遥かに優等国である事、随って自国と他国とが争ふ場合には、必ず自国を勝たさなくはいけない事を信じさせられる」ことであり、「必ず他国の独立に対する侵攻として打ち続く」と論じている。

そしてラッセルは中国と日本に言及し、中国は「愛国心未発達期の状態」にあり、一方、日本は「十分愛国的になった」と述べ、さらに愛国心が日本に不利にもたらすことも指摘した。彼は「もしも日本が、或は他のいかなる強国なりともが、或限度を超えて支那侵攻に耽るならば、愛国心は、遂に支那にも喚起されるかもしれない」と述べ、愛国心を軸として日本の対中政策、対中姿勢について鋭い指摘を行っている。

結果的にラッセルは、中国においては愛国心や敵愾心の鼓舞をはかり、日本においては愛国心を過度に強調することのないよう、両国における愛国心の機能と問題点に対してそれぞれの見解を示すことになったのである。

そもそもラッセルは当時の愛国心を賛美する風潮に対して懐疑的な立場をとっていた。第一次世界大戦を経て、ラッセルは破滅的な戦争を導いた社会制度と人間性について考え続け、1916年には彼の一連の講演に基づき、『社会改造の原理』(Principles of Social Reconstruction)を刊行していた。その中で、ラッセルは「宗教としての愛国心」は普遍性を失い、教育によって、偏狭な「ナショナリズム」が国民に持ち込まれることになり、「熱狂的に他国民が蒙る損害に対しては無関心となる」と非難している。¹⁴すでに愛国心が強い日本に対して、ラッセルはその危険性の認識の必要性を訴えたわけであるが、一方いまだ愛国心に乏しい中国に対しては、その「初心の功」に期待するという姿勢を示し、しかもその「初心の功」を発動させるのが日本の愛国心であるという指摘は極めて正鵠を

得たものであったといえる。1921年1月号の『改造』がそうしたラッセルの指摘を載せた点に当時の『改造』のスタンスがよく現れているといえよう。

しかし、ラッセルのそうした観点は当時の日本人に届いたのだろうか。倫理学者である吉田静致は「愛国心の功過」に対して、『東京朝日新聞』に「愛国心論を読みて」¹⁵を書き、異なる観点を示している。吉田は、「愛国心は、人はいつでも自国の利益を目的として行はなくてはいけない」と定義した上で、「自国のために尽くすことが己れのために尽くすことと共に排斥すべし」というラッセルの主張を「謬見」と述べている。吉田からみて、なぜラッセルの主張は「謬見」なのかというと、「自己中心的なる単なる特殊主義の愛国心か然らずんば一切の特殊的差別を無視する抽象普遍的なる世界主義か、其孰かでなければならぬなどと偏狭に考ふ如きは、精神生活の真義に盲目であることを表白するに過ぎぬ」からである。加えて、吉田はロシアの哲学者ソロヴィヨフの言葉を引用し、真の愛国心は「他国に対して憎悪の念を有つ限り決して真に善なる国家と云ふことが出来ない。他国を己れの如く敬愛せざる国家は真に善なる国家と云ふことが出来ない。真の愛国者の道徳的義務は、善に於て国家に奉仕するといふことである。(中略) 真の愛国者の道徳的義務は人道に於て国家に奉仕し国家に於て人道に奉仕する」と解釈しているのである。吉田にあって、ラッセルのいう愛国心は特殊主義の愛国心であり、真の愛国心は、善を積んで悪念を持たないという道徳的普遍的愛国心である。この視点には、一見して人道主義的な発想がうかがえるが、一方で、彼は、明治天皇御百首の「国のためあだなす仇はくたくとも 慈しむべきことな忘れそ」を引用し、「戦争が必要である」の結論をも導き出すことになるのだった。この吉田の学説は奇矯なものに見えるが、1930年代の日本においては結果として実践され、ラッセルの平和主義の影響がやがて消え去ってしまうのは我々のよく知るところである。

3.1.2 社会改造

近代国家が発展を図ろうとする時、当然そこには国内要因と対外要因の二つを考慮する必要が出てくる。1920年代日本における国内問題とは、民主主義の運動や労働運動の形をとって現われた新しい社会主義の風潮の中で、どのように社会改造を行うかという問題である。また、対外要因とは、第一次世界大戦後の大国間協調主義にもとづき日本の国

益を追求するというものであった。この時代状況に対し、『改造』は主として社会問題に焦点を当てながら、中国とロシアの社会主義的民主主義の運動や労働運動に関心を示した。ラッセルは露・中・日三国の政治、社会、生活の実状を観察した一人であったため改造社に期待される人物となったのである。『改造』は社会改造の声が広がって議論が紛々と起こる 1920 年代を背景として、ロシアに対してどのような政策を取るべきかを分析する文章を掲載したほか、ラッセルが書いたロシアにおける社会改造に関する文章も掲載している。例えば、1921 年 2 月号「過激派ロシアの前途」、1921 年 4 月号「社会組織の良否の分岐点」、1921 年 10 月号「工業主義と国家主義との相互作用」、1922 年 5 月号「未開国に於ける社会主義」、1923 年 2 月号「機械主義に対する抗議」の中では全面的、もしくは部分的にロシアをとりあげている。

当時のロシアを考える時、革命勢力に対しては「過激派」、「独裁政治」というイメージが強かった。社会主義運動に対して共感と支持の態度を示していたラッセルから見れば、ロシアの「過激派」は「新しき理想の中堅」だということになる¹⁶。「過渡期に於てはデモクラシーに反対するボリセキキでさへもこれを以て彼等の理想の一部と看做し」¹⁷、専制政治は、ボルシェビズムの理想を実現するために、専制的に支配することを余儀なくされたというのである。しかし、「社会主義は、普通選挙、言論及び出版の自由の如き、自由主義的、民主的な制度を回復し得た後でなければ十分に実現し難い」¹⁸ というのが現実であり、独裁政治下で自由を確保することができず、そのために「創造衝動」¹⁹ に基づき社会改革を行う必要があるとラッセルは主張していた。「社会組織の良否の分岐点」の中で、この理論は展開されている。

「我々が創造しようと努めなければならないものは、希望と喜びとに充ちた世界なのであって、主として人々の悪しき諸衝動を抑圧しようがために案出されたやうな世界なのではない。」²⁰

ロシアの社会主義革命に対するラッセルの発言を総合すると、ラッセルはロシア式の世界主義のもつ専制、集権の欠陥を認めながらも、未開国が工業化を達成するために、それ

を有効的な手段であると認めてもいたが、個人の創造衝動を抑える点では反対し、民主主義の立場にもとづいた社会改造を目指すべきと考えていた、とまとめることができる。

他方、中国の改革に関して、ラッセルが「若し支那にして（これは決して不可能でない）遠からず共産主義者に支配せらるることとなったなら―農民を満足させるレーニンの新しい方法が成功するものと假定して―亜細亜と露西亞とが欧羅巴と亜米利加との気に入らぬ方向に発達し、社会主義の基礎の上にその経済的独立を確立するようなことに終るのも不可能でない」²¹と述べていることは、この段階のラッセルがロシア式の社会主義を中国にとって良い改革方法だと判断していたことを物語る。

もちろん、ラッセルの論調に対して日本の学者たちが完全に賛同したわけではない。1920年12月の雑誌に、ある無名氏の文章「支那に於けるラッセル氏」が掲載された。その文章の中に、「氏は過激主義には一種の宗教的性質が具有されて居ると唱破し、此主義が完全に行はるれば戦争は回避せられ、生活は平均せられ、覆滅に瀕しつつある資本主義は再興を絶つが、しかし私は未だボルシェイズムには十分に賛同しない」と述べている。ラッセルがロシアのボルシェビキの発展の必然性に期待を持つのにに対して、この文章の作者は「ボルシェイズムの研究は細心を要すべき」と懐疑的な態度を持っていた。実際に日本においてボルシェビキの動向を危惧するのはこの文章の作者だけではない。1920年11月10日から1920年11月16日にかけて、読売新聞で連載された「ラッセルの社会思想と支那」と題した文章の中で、長谷川如是閑は中国の現状へのラッセルの思想の適用性に対して疑念を洩らしている。²²

ラッセルは日本に滞在中、京都、東京で、学者たちと懇談した。そのときの模様が「ラッセル教授の印象」²³と題されて、『改造』1921年9月号に載っている。この懇親会に参加した土田杏村は実際にラッセルが日本に来る前にすでにラッセルに対して関心を持っていた。例えば、1921年7月号の『改造』に彼の「ラッセルの哲学」が掲載されている。そして、ラッセルと会見できた杏村はラッセルと哲学および社会改造などについて討論することになった。「ラッセル氏と露国及日本を語る」にはこの討論が記載されている。ラッセルは其中で「独裁主義は現在の露国としては寧ろ適当した政体であるかも知れない。東洋諸国もデモクラシイの栄え得ない国である。此処にも亦××××²⁴が適当して居る」と述べている。いうまでもなく、東洋の一員として、この「東洋にデモクラシイが

実行し難い」という意見には、土田杏村は反対な意見を示している。談話の中で思想自由の問題のテーマについては一定の折り合いがついたが、社会主義と理想主義の結合を目指していた土田杏村はラッセルがロシアの過激行動及び独裁主義を容認する態度を示したことに對して反対の姿勢を崩さなかった。

『改造』に掲載されていたラッセルの文章を読んでみると、大正デモクラシーの動きの中で、ラッセルの哲学研究より、社会主義者として彼の論説のほうが『改造』の関心の的となっていたことがわかる。社会改造の諸説は日本の社会発展及び中国の行く道にかかわっているからこそ、日中両国の思想家たちはラッセルに関心を寄せたのである。しかし、中国、日本の学者たちがラッセルの社会主義諸説を受け入れることはなかった。張東蓀²⁵はラッセルの「Roads to Freedom」(1918)を読んでからギルド社会主義者になった。しかしラッセルが中国においてロシアの「国家社会主義」が相応しいと提案したことは張東蓀を失望させた。²⁶ また、日本の学者たちも必ずしもラッセルの論調を賞賛していたわけではないことは先に確認した通りである。まさに三浦俊彦が指摘しているように「すでに近代国家として一応の成熟をみた壮年日本は、世界大戦後の動揺からも超然とした位置にあって、ラッセルの社会思想等を真に必要としているとはいえなかった」²⁷のである。

3.2 座談会「対支国策討議」に示された中国認識

ラッセルが19世紀の中国と現代中国を分析し、欧米で教育を受けて帰国し民主主義を希求した若い知識人たちを「ヤング・チャイナ」と称し、これらの若い知識人たちに期待をかけていたことは前で述べたとおりである。『改造』にはそのラッセルの目を通して中国を観察していた一面がある。その一方で、『改造』独自の現代の中国に対するスタンスも当然存在する。そのスタンスを代表するのが本節で取り上げる「対支国策討議」である。1924年10月11日に、辛亥革命以来の中国は「どうなるのであるか」「どうしたら宜いのであるか」²⁸という日本国内において主流となっていた議論に對して、現在中国は「どんな風に変わりつつあるのか」²⁹について国民に伝えるため、山本実彦は長谷川如是閑、堀江帰一、吉野作造、永井柳太郎、米田実、福田徳三、小村俊三郎³⁰等その当時の日本において影響力を有していた人物を集めて、「対支国策討議」を開催した。その内容は、

同年 11 月 1 日発行の『改造』に掲載された。その掲載理由は「編輯だより」に以下のよう
に示されている。

「我が社が帝国ホテルにて開催せる対支国策討議は、將に我帝国の最高国策を暗示、
明示する者であった。雑談の裡、支那国家の根本を論じ、孫、張、呉、曹を品し、支
那の經濟、財政を究め、そして或国の採るべき大国策を討議した近來稀に見る有意
義の会合であった。何にせよ各方面に亘る我国第一流の権威者のみであったが為に
日比谷議會などに見られぬ壯觀を呈した。その速記録を一読せば支那に対する根本
知識が得られる雑誌新聞界空前の企図であった。」³¹

1918 年に中国の中央政府の政權を担っていたのは安徽派の段祺瑞だが、あまりに日本
寄りの政策を展開したために、五四運動の高揚と共にその声望は低下していった。そこ
に目を付けた曹錕、呉佩孚ら直隸派はイギリス・アメリカの後押しを受けて、奉天派の張
作霖と同盟して、1920 年 7 月に安直戦争で段祺瑞が率いる安徽派を破り中央政府の政權
を手中に収めた。しかし、連立政權を樹立した直隸派と奉天派は結局政府の主導權をめぐ
って対立し、1922 年 4 月の第一次奉直戦争が起こった。その戦いは直隸派の勝利に終
わり、中央政府の実權を握ったが、曹錕の権力欲が露骨になった結果、曹錕に反対した諸
派が同盟を結んで対抗し、1924 年 9 月から 10 月にかけて、第二次奉直戦争が起こること
になった。

「対支国策討議」が行われたのは、ちょうどそうした第二次奉直戦争の時期であった。
討議は当時中国の三大軍閥の争いを分析し、さらに広東省の孫文の勢力と軍閥を批判す
る一方で、大学生、商工業者、労働者を含む、革命の思想を強く持つ新しい勢力の存在に
言及するものになったのである。

当時日本では中国における軍閥勢力を巡って干渉・不干渉の意見がさまざまに入り乱れ
ており、干渉論に関しては、日本の利益を維持するために、張作霖を援助するものと、直
隸派と反直隸派の争いに干渉するものの二つが主流となっていた。討議ではこの二つの干
渉論を批判している。

小村は積極的なかたちで意見を述べ、具体的に言えば、彼は中国における平和統一を望んでいる民衆の立場から、軍閥対立の状態による苦しい生活を強いられていた民衆に対して深く同情した。しかも「同情と援助と乃至干渉といふものは、是は非常にその間に差別があります。又援助と干渉は、或る点に於ては差別がなくて殆ど同様なものになる。だから同情の範囲を超えて干渉は勿論援助と雖も決して為すべきものぢやない」³²と主張した。

一方、張作霖を援助する干渉論に対しては、米田は「日本が張作霖に奉天を維持させることにすると、日本が是こそ支那の主権を蹂躪することになる」³³と批判した。彼は中国の主権を認め、「満州は日本の領土でもなし、矢張り支那の一部であって見ると支那の主権の下にある」³⁴と主張した。

さらに、軍閥を攻撃し、大学生、商工業者、労働者を含む、革命の思想を強く持っていた新しい勢力の存在を提示した永井は、この新興勢力が率いた運動に対して、「社会革命」³⁵であると同時に、「愛国革命」³⁶であると認め、「今日でも相当に著しく起って居るが、将来は更に大きく発達し得る見込みがある」³⁷と、期待を寄せていた。特に、永井は「大学生を中心としたヤング・チャイニス」³⁸の運動を取り上げ、「ヤング・チャイニスの中に於ける自覚は相当に大きく見るべきものだ」³⁹と主張し、中国の若い世代が中国の革命運動を推進する役割を認めた⁴⁰。永井は民族の自覚的な運動が存在することをはっきり認めると同時に、中国の若い世代に期待を寄せた。

最後に日本が中国からすでに得た利益の話題に触れた際、「宋譲の仁」⁴¹の例えを用い、日本だけがそれを棄ててはいけないという一致した見解の存在から、この討議は結局日本の国益から中国の問題を見ているものであったことが分かる。一方で、永井の見解に代表される中国の新興勢力「ヤング・チャイナ」に対してラッセルのそれより客観的な、そしてより現状認識的に的確な理解を示した『改造』の特徴ある着眼点も指摘することができる。

ラッセルが語る「ヤング・チャイナ」の潜在力を重んじる文章を掲載して、また、中国の現状を分析するに当たって「ヤング・チャイナ」の存在に論及したこと、そして「ヤング・チャイナ」の可能性を認めたことは当時の日本の言論界における対中認識において『改造』が一定の客観性、中立性と独自性を有していたことを示している。

3.3 特集号「現代支那号」に書かれた「現代中国」

1926年7月号に、『改造』は「日本は軍閥官僚の支那を知って民衆支那を知らない。孔孟、四書五経の古典支那を知ってヤングチャイナの白熱せる民衆文化を知らない。故に若き中国人曰く『日本人支那を知らず』と、茫々三千年の伝統文化を塵芥の如く一擲して猛然新支那建設に必死の苦闘を捧ぐる悲壮にして真摯なる若者支那の運動は実に世界的の驚異であらねばならぬ」⁴²という目的で、同年同月に増刊号「現代支那号」を計画した。表3.2は特集号「現代支那号」の目次⁴³をまとめたものである。

表 3.2: 「現代支那号」目次

題目	作者
「支那と現代」	巻頭言
「近代支那西洋文明に対する吾人の態度」	胡適
「中国無産階級及びその運動の特質」	李人傑
「新生支那に於ける女性の地位」	朱胡彬夏
「中国哲学の貢献」	馮友蘭
「中国の学生運動」	高一涵
「中国国家財政と地方財政の区分」	馬寅初
「中国女子の覚醒」	陳望道
「新支那の青年運動と日本の立場」	林駱
「北京政府と広東政府」	伊藤武雄
「在支外人記者の支那観」「一 現代支那の真相」	ランドル・グールド
「在支外人記者の支那観」「二 過渡期に於ける支那」	エム・ロウズン
「在支外人記者の支那観」「三 支那に於ける赤化運動」	布施勝治
「在支外人記者の支那観」「四 列強対支関係の新紀元」	ダブルユー・エイチ・ドナルド
「支那小説の話」	田中貢太郎
「太原 大同の仏頭」	木村莊八
「漫画 同車」	豊子愷
「謝秀卿」	村松梢風
「漫画 都会的清客」	豊子愷
「支那青年と自然科学」	木下柰太郎
「中国新文学談瑣」	西瑩
「漫画 施茶処」	豊子愷
「支那の寄席」	井上紅梅
「社会雑事」	汪俠公
「苦心孤詣（旧式支那小説）」	董諤声
「新支那雑俎」	辻聴花
「日本古典文学に就いて」	謝六逸
「留学所感二三一留学生に与ふ」	何畏

題目	作者
「漫画 「肅静廻避」 与紅頭巡捕」	豊子愷
「北京問話」	小畑薫良
「支那絵画の派別とその変遷」	鄧以蟄
「民国寄稿家略歴」	
「海のひびき」	徐志摩 佐藤春夫
「春光」	聞一多
「三月十八日一大統領府前の大流血を記念して」	饒孟侃
「近詠」	樊山（増祥）
「宣統帝作詩筆影」	
「題宋石門羅漢画像（四首）」	梁啓超
「蘇州の歌謡」	顧頤剛
（創作）「劇曲 圧迫」	丁西林
（創作）「キュラソー」	張資平
（創作）「酒後」	凌叔華
（創作）「王昭君（二幕）」	郭沫若
（創作）「阿蘭の母」	楊振生
（創作）「美しい肉体を見た話」	徐志摩
（創作）「短編三つ」	陶晶孫
（創作）「昼飯の前（一幕）」	田漢
「蘇子瞻米元章」	露伴学人
「剥げた仮面」	正宗白鳥
「大同城内外（雲崗紀行のうち）」	犬養健
「支那の大人物」	長与善郎
「『真生活』ヘール・トライヤスからクロ・ド・キヤアニユ」	武林無想庵
「美術と支那の雑感」	岸田劉生
「明代の通俗短編小説」	塩谷温
「賢くなる法」	里見弴
「返り討」	菊池寛
「支那の国家秩序と社会秩序」	長谷川如是閑
「李鴻章」	佐藤春夫
「蒙古の太陽」	ボリス・ビリニャーク

表 3.2 から分かるように、「現代支那号」では複数の中国人の言説を掲載する形で主に二つの方面から新しい中国と古い中国を比較している。一つは中国の新しい面目であり、一つは新しい中国を支える新興勢力である。新興勢力に関しては、主に学生運動、国民党、独立青年党、共産党を論じている。

中国の学生運動は、五四運動から世界に知られ始めたと言ってもよいが、彼らの運動は次第に中国の改革の道を模索するものへと変わっていった。高一涵⁴⁴は「中国の学生運動」で、学生運動が先頭に立って改革を推進すべきであるというその役割を強調した。高

一涵はまず中国の歴史の視点から、学生運動が先頭に立つ伝統的基盤を論じた。彼は中国の古代の学校は「民意の発表の機関」とする特徴を強調し、従来中国の学生たちは政府を監督するという役割を提示し、加えて「国内に在って民衆を喚醒する出版物の、学校学生の主幹するもの、亦多いこと胡蝶の紛飛するが如くである」という状況から、学生たちが引き起こした運動の一つの特徴は知識を重んずることであると述べた。そのうえで、高一涵は「中国の学生運動は、列強の圧迫に対して正当防衛の運動を為すもので、政府の野心を助成して、他国の土地を兼併したり、他国の権利を侵犯したりする運動ではない」と強調している。

また、国民党、広東政府に関する文章については、満鉄天津事務所所長の伊藤武雄の文章「北京政府と広東政府」が載った。伊藤武雄は中国の南方において近代国家を作るために必要となる自由な精神があると強調しながら、国民党、国民政府が持つ中国の革命運動における二つの重要な地位を論じた。一つは「近代国家組織運動の本営なる」ことであり、もう一つは「無産階級団結の中心勢力の存在地たる」ことである。中国において、最初に帝制の覆滅、共和制の創建に貢献したのは、孫文を中心とする一派である。その後、三民主義を提唱した国民党が生まれた。国民党は当時中国における最有力な革命政党であると言え、また中国を統一する理想に最も近く歩み寄っている政党だと期待されていたと考えられる。

一方、『改造』には独立青年党の一員である林駢⁴⁵の「新支那の青年運動と日本の立場」が載せられ、その中で林駢は共産党と国民党の欠点を指摘しながら、新青年団体は新しい中国を建設する重大な責任を担っていると述べて、独立青年党の将来性を強調した。

中国の労働運動も五四運動以降において始まったと一般には考えられている。「現代支那号」に載る「中国無産階級及びその運動の特質」は、はなはだ興味深いことに、芥川がかつて「若き支那」の代表と紹介した⁴⁶李人傑の手によるものである。そしてまた、李人傑は中国共産党の創立メンバーの一人であった。この文章の中で李は中国の革命の現状を分析し、中国無産階級の運動とは「民族的外衣によって社会の同情を集め、以てその運動の発達を速かならしめ、且つ学生を呼んで社会主義的精神を教へ、また社会主義的原則を教はれて、以てその運動を促進する」ことを目指すものであると述べて、その学生運動との繋がりを強調している。

これらの人々の言説を『改造』が載せた理由は、中国の各新興勢力を目の当たりにし、バランスを取りながら、日本の読者に紹介しようとした目的があったと想像できる。そして、それら言説の多くが、まさに「ヤング・チャイナ」によって書かれたものであったことを考えると、重層化する形で、当時の『改造』が「ヤング・チャイナ」に対する期待を示していた点を指摘することができるだろう。

3.4 『支那事変—北支之巻』から見る山本実彦の戦争認識と中国認識

『改造』の姿勢を語る時、編輯方針を決定した改造社の創業者である山本実彦のことも言及しないわけにはいかない。出版理念について、彼は「十五年」の中に「私どもは何事をするのでも常に広い視野を一まわり見渡さねばならぬ。日本は日本ばかりで太って行くことができないように、日本ばかりで通用する正義観や、道徳観であってはならぬことだ」⁴⁷と述べているが、その言葉通り、彼は国外の知識人の文章を取り上げ、外国知識人を日本に招聘するとともに、中国への関心を持ち続け、中国に関する文章を掲載し、中国問題をめぐる座談会を開くなどの事業を推進し、またそうした編輯方針を取り続けたことは前で述べたとおりである。

ジャーナリストでもあり、同時に改造社の社長を務めていた山本実彦は火野葦平、尾崎士郎のような文学者に中国に行くことを進め、彼らが「中国体験」を基にして書いた小説を出版したばかりではなく、自らも中国に行き、関連記事を残した。このように、多面的身分を持つ山本は当時の中国研究における代表的人物であると言える。本節は山本実彦の戦争への態度、中国への認識を検討し、このような認識は『改造』に如何に反映されていたのかを分析する。

まず、山本実彦について紹介する。山本実彦は鹿児島県川内市の出身で、1904年に上京した。日本大学を卒業し、『やまと新聞』の記者を経て、1915年に東京毎日新聞社を買収し、社長となった。後経営困難になり、4年後東京毎日新聞を売却した。同年には改造社を創業し、総合雑誌『改造』を創刊した。1926年から定価一円の『現代日本文学全集』を刊行しはじめ、円本文化は一世を風靡することになった。出版界の人はそうした山本実彦を評して、

「山本さんは開拓農民のように、いつでも荒地を耕していた。そこがすっかり畑地になると、惜し気もなくうっちゃって、また別の荒地を見つけて鋤を入れる。そんなような事ばかりやっている感じでした」⁴⁸

と山本の型破りの精神を書いている。彼の中国に対する関心は、第一次民国の革命当時からであった。⁴⁹ それ以来、山本は常に中国に注目し、中国人と交遊を保っていた。

その山本実彦についてこれまでの研究は主に彼の出版事業と中国現代文学を日本に普及させた功績の二つの方面に分かれている。⁵⁰ しかし、彼がどのような気持ちで、中国に赴き、中国人と接触したのか、彼がどのように中国を認識することになったのかなどの点はまだ問題として残る。本節は日中戦争開始という時代背景の中で、山本実彦の『支那事変—北支之巻』を分析対象として、彼が中国に渡った時の活動を整理し、さらに彼の中国認識および日中関係観を分析することを目指す。

まず、時間軸を意識した形で、山本の中国滞在中の活動を確認していく。1937年7月11日、日本政府は言論界に対して、拳国体制を確立すべく新聞通信社代表と、雑誌界代表を集め、時局協力を要請した。また、13日には雑誌界の代表である中央公論、改造、日本評論、文芸春秋の四社を招致し、同じことを要求した。18日に改造社の社長である山本実彦は神戸を出て、中国に向った。彼が中国において見たり聞いたりしたことは最初に雑誌『改造』の1937年の9月号と10月号に載り、帰国後彼の感想を加え、『支那事変—北支之巻』(1937年10月15日)として出版した。それらによって、彼の中国での活動が把握できる。

表 3.3: 山本実彦が中国を訪問した際に出会った人物や訪れた場所

日付	訪れた場所	
7月18日	神戸を出て、「長城丸」に乗り、塘沽に向かう。	備考欄： 他に、天津に滞在中に、 冀東防共自治政府の池宗墨、 北京に行った時に、松井石根 ⁵¹ を訪問していた。
8月1日	白河を遡航し、塘沽に着く。	
8月2日	軍用列車で天津に着く。	
8月3日	香月清司 ⁵² に会う。	
8月4日	陳中孚に会う。	
8月4日	天津の仏租界に行って見る。	
8月8日	汽車で北平の正陽門駅に着く。	
8月11日	自動車で通州に行く。	
8月15日	南開大学で見物する。	
8月16日	高凌霨 ⁵³ に会う。	
8月18日	汽船「長城丸」で塘沽から青島に行く。	
8月18日	吉利平次郎 ⁵⁴ に伴われ、青島学院を訪れる。	

山本実彦が従軍記者として中国で訪れたところは以上である。これらの訪問先は一見すると、特に関連性のあるようには見えないが、実はすべて当時の日本の支配が及んでいた地域であった。また、注目すべき点として、山本が中国にいた間に、少なからぬ人を訪問していたことがあげられる。それらの人には日本の軍部の人もいたし、中国の政治関係の要人もいた。以下では、山本実彦が観察した中国と中国人を分析することを通じて、彼の日中戦争に対する認識と彼の中国認識について考察してみたい。

3.4.1 山本実彦の戦争認識

中国に着き、最初に山本の目に映ったのは「(中国側の) 砲台はこはされ、兵営は爆撃されて惨憺たる姿」⁵⁵ だった。天津駅に着き、「(中国の) 便衣隊の死骸がそのまま片づけられないでごろごろして腐爛したまま放置されておる」⁵⁶ と中国の惨めな状況を書いた。また、彼は兵士の惨状を描写しただけではなく、「支那人街の富豪たちは戦禍を避けて佛租界でノウノウと暮らしておる一面に、下層階級のものは蒲団蓆をもって野天にくらしている。そしてそこに雨でも降ってくればたいへんだ」⁵⁷ と一般民衆の姿を描き、そこから戦争の残酷さを伝えている。また彼は元々天津の第一の設備を誇り、爆撃により廃墟になった南開大学を見物した時、このように記した。

「私たちは第一に思源堂の廢墟の前に立った。この建物は袁述之及びロックフェラー基金の援助によるもので、殆ど北方第一の理科の講堂であった。それが見るかげもなく打のめされて内部の器械類は何等の形をとめない。死灰に歸したと云ふ言葉があるが全くその通りだと思はせた。名物の図書館は盧木齋氏の義捐によったものであるが、この図書館の屋外にはねとばされた珍本の片われが、どうしたはずみにか吹き飛ばされておったのを見つかった。」⁵⁸

こうした事実に基づく記録から、戦場の惨さがしみじみ伝わってくる。この惨状を見た山本は「民族と民族との争闘は死を以て終るのだ。戦闘力のない、血の通はない、彼等の死骸にたいしては不憫と思はぬ訳には行かぬ」⁵⁹ という同情的な気持ちを示している。しかしその一方で、彼は中国人との個人的な友愛も情義も民族の前には無力で、国家間の対立状態がある以上、自国のために、献身的に進んで命をささげていかなければならぬと述べている。

「私は日の丸の旗を仰いで勇気が凛々と湧いてくる。御旗の下に死なむと思ふ心もえてくる。御旗のもとに飢えても、血を見ても、死にたいしても、従容として義につくことができると思った。(中略) 民族の死を以って守らんとするところを、また、死をもって進まんとするところを私は静かに描かうとしておるのだ。」⁶⁰

すなわち、山本の中国への同情は民族主義から出発した同情であり、日本国民に「正義感」を伝えようとした同情である。

では、当時山本は日中両国を巻き込んだ戦争に対してどのような認識を披露したのだろうか。多くの日本人は戦局の拡大を予想できず、わけが分からないまま戦争に巻き込まれたように感じた。それに対して、山本は冷静に中国を観察し、研究していた。「戦いは必ず勝つ」、「戦争が必ず早く終わらせられる」のような見解と違い、彼は「長期の戦にもたへ得る覚悟を国民はもつべきだ」⁶¹ など今から思うと先見の明がある見解を持っていた。

また、彼の「我国前途の困難は戦争よりも思想戦にある。(中略) 我国も上下一致して大きな包容力をもってかからねばならぬ。国内皆兄弟のつもりで、金あるものは金を、知識あるものは知識を、労働者は労働者をめいめいの立場でささげてかからねばならぬ」⁶² という観点も 1937 年 9 月から施行されることになる「国民精神総動員」の内容に一致するものであった。中国に対して正確な認識が必要であり、正確な認識に基づき、政府は正しい政策を取るべき、またこの正しい政策を国民に理解させる必要があると山本は日中戦争に対してつねづね考えていた。

3.4.2 山本実彦の中国認識

「北支の旅」の中では、山本と中国のエリートたちとの会見も注目される。これらの会見、またはその中から読み取られた中国における四つの勢力に対する評価により、彼の中国認識、また日中両国の未来への憂慮が見られる。

①冀東防共自治政府

冀東防共自治政府は 1935 から殷汝耕⁶³ により組織されたいわゆる傀儡政権である。1937 年に冀東防共自治政府保安隊が日本軍の通州守備隊、及び日本人居留民を襲撃し、日本人を虐殺した⁶⁴ いわゆる通州事件が起こった。殷汝耕は通州事件により逃亡し、その後を継いで彼の秘書長だった池宗墨が冀東行政長官代理となった。山本は天津日本租界で活躍していた池宗墨を訪問した。

山本は「目の鋭いピストルをもった日本人らしい男、鬚髯蓬々たる半ズボンの壮漢」⁶⁵ と池宗墨のボディガードを描写し、側面から池のびくびくして落ち着かない状態を暗示している。池は山本の質問に、「どうも冀東の保安隊が叛いた訳でなく、第一総隊第二総隊だけで第三、第四は関係ないのです。しかしこの機会に何も彼も改革すべきです」⁶⁶ といったが、どのように改革すべきか、冀東政権の今後の輪郭については答えられなかった。山本は緩衝地域としての冀東政権に期待を持っていたが、池宗墨そのものに対してあまり期待していなかったことが分かる。

②冀察政務委員会

冀察政務委員会は1935年に国民政府により設置された機関であり、山本は天津に滞在中、冀察政務委員会外交委員会の主席であった陳中孚に会ってみた。陳中孚は冀東、冀察の将来について、次のように述べた。

「冀東政権はあまりにも小さい地域を基本にしてあるが、あまたした政権を守り立てて見て日本の利益になることもいくらかはあるだろうが、それより有害の要素が多いのではあるまいか。今度はどこまで行って時局の解決がつくか分からないが、しかし冀東とか冀察とか二つも分立することは無意味と思ふ、しかし、あくまで国民政府の下にあることが必要だ」⁶⁷

山本は陳の言葉から彼の野心を読み取った。また彼の背後に「兵力のたのむべきものは有っていない」⁶⁸と指摘した。とはいえ、冀察政権自体は日本の緩衝地域として期待されるので、陳の存在は考慮しなければならないと主張した。

③蒋介石

当時日本に最も期待された中国における勢力は蒋介石が支配している国民党であった。山本も蒋介石、または国民党の動向を注目し続けていた。盧溝橋事件の後、山本が中国に行った時、蒋介石に会わなかったが、蔣の戦争心理を分析している。

中国では当時一方で日本軍と戦いながら、内戦（国民党と共産党）が続いていた。そのため日本側において中国が抗日統一戦線を成立することを予想していなかった。ところが1936年西安事件が起こった。この西安事件は日中関係、及びその後の戦局に大きな影響を与えることになった。山本は蒋介石のことを「日本の有する軍事、産業、金融等あらゆる組織の力を謙虚に認識する」⁶⁹と称賛したが、西安事件における蔣のやり方を指摘し、「自分の国の兵力、財政力を冷静に判断し」なかった⁷⁰と批判した。すなわち西安事件は蒋介石の生命を生かすために、日中両国が戦争の泥沼に落とし込まれた誘因となったと彼は認識した。一方、彼は蒋介石の兵力を論じ、蒋介石政権の将来性を検討した。こ

の時期に及んで山本はまだ蒋介石及び国民党の形勢をうかがっていたと言える。

④共産党

山本が蒋介石の勢力と一緒に論じたのは共産党であった。山本は毛沢東、朱徳、周恩来のことを中国において「一つの英雄的存在」⁷¹だと認めている。しかし、共産党が主導した西安事件が日中戦争の誘因となったと考え、「我国に直接ブツかってくるようになってきた」⁷²とも述べている。対策として、共産党を冷静に、正確に認識するうえで、「防共」の政策を取るべきだと彼は主張した。共産党も日本政府と交渉できる相手ではないと彼は認識した。

以上四つの勢力に対する山本の認識を分析した。そこから明らかになったのは、いずれの勢力にせよ、日本政府と対話できる相手、あるいは利用できるパートナーではなくなったという判断である。山本実彦の中国の諸勢力に対する態度は、その後の日本政府が中国において自身に都合のよい新しい勢力を育成しようとした傾向と重なるものである。

おわりに

これまで考察したように、一定程度まで、1920年代の雑誌『改造』は「ヤング・チャイナ」への関心を持ち続け、中国の新しい様相を目の当たりにして、現代中国を日本の読者に紹介するという重要な役割を果たしていた。それには、古い伝統文化を持っている中国は新しい様に変われるという期待があった。ラッセルを承継ぐ形で『改造』が取り上げ続けた「ヤング・チャイナ」は、『改造』によってより具体的、現実的に中国の現状と未来に関心をもつ読者に届けられることになった。

1920年代の雑誌『改造』は、結果としてラッセルを通じて辛亥革命以降の現代中国への関心を喚起しようとしていた。またこの時期の『改造』の誌面には中国の社会運動に関する評論もしばしば現れるが、それにもラッセルの影響を見出すことができる。ただし、ラッセル、中国の知識人、そして日本の思想界はそれぞれお互いを必要としながら、それぞれに対する理解の面において同調する点と反目する点を共存させていたことを見逃してはならないだろう。

1920年代の日本においては、対内的な問題といえば、民主主義の運動や労働運動の前

提を持っている社会改造であり、対外的な問題といえば第一次世界大戦後の大国間協調主義にもとづき国益を追求するというものであった。特に、対中国政策に関しては、中国の主権を尊重しながら、既得の影響力を保持しようという立場をとっていた。『改造』がラッセルの「愛国心の功過」を掲載したのは、彼の平和主義の見解を利用して、対外的側面においては中国の現状と未来を肯定的にとらえるという立場を読者に届けることを意図してのことであったが、その一方で、対内的側面においては、愛国心が内弊を改革するうえで不可欠であることを主張するものともなった。この点については、『改造』が中国の主権を尊重しながら、既得の影響力を保持しようとする日本の政治・外交的立場を支えることになってしまい、結果として、ラッセルの平和主義は消え去ってしまうことになったのだった。

また、1920年代に社会改造の問題に直面していた日中両国の知識人は、西洋から来たラッセルに社会改革の方法の教えを求めようとしたのだが、いずれも自国の現状へラッセルの思想の適用性に対して疑念を抱くことになった。さらに、日本の知識人は中国を観察するラッセルを見て、第三者としてラッセルの思想の適用性に対しても疑念を抱くことになった。結果として日本の学者たちも中国の学者たちも必ずしもラッセルの論調に諸手を挙げて賛意を示したわけではなかったのである。

ここから、ラッセル、中国の知識人、そして日本の思想界はそれぞれお互いを必要としながらそれぞれに対する理解を異にするような関係にあったことが明らかになった。結果として、ラッセルを日本に紹介するという『改造』の目論見は、その意図を大きく超えて1920年代以降に東洋・西洋が直面するに至った社会改造など様々な大きな問題、変化を私たちに指し示してくれる貴重な里程標ともなっていたのだった。

なお、盧溝橋事件直後山本実彦の「北支の旅」について考察し、彼の中国における見聞内容、体験を分析すると、1930年代に入って「ヤング・チャイナ」が『改造』の言説から姿を消していくことにそれが繋がっていることが明らかになる。彼は中国人との情義を大切する一方、自分の民族ために死を賭し戦わなければならないと主張し続けた。彼は冷静に情勢を分析する一方、感情的に民族主義を主張した。彼の冷静な認識は、「民族主義」あるいは「国家主義」の枠を乗り越えることはなかったため、結局彼の記事は日本国民に日中戦争が「正義の戦争」であるというイメージを与えることになったのである。

註

¹ 山本実彦「十五年」(『出版人の遺文 改造社山本実彦』(栗田書店 1969年2月) 6頁。初出は『改造』(改造社 1920年4月号)。この文章は『改造』が創刊十五年の時に同誌に掲載されたもの。

² 関忠果『雑誌『改造』の四十年』(光和堂 1977年5月) 35頁。

³ 前掲注2 同書 45頁。

⁴ 佐藤鋼次郎「講和条約の基本的考察と将来の世界的変局に対する日本の国是」「四、妄想的軍備縮小案をわらって日支の文化運動を高唱す」(『改造』 1919年6月号)。

⁵ 20世紀初頭のイギリスを代表する哲学者、論理学者、数学者として知られているバートランド・ラッセルは、イギリス国内の社会問題について意見を述べるとともに、国際的な問題にも関心を示していた。1920年代に彼はロシア、中国、日本を訪問する機会をもち、そこでの体験に基づき、1922年には『中国の問題』という著書を発表し、中国、日本の社会問題について探究を繰り広げている。とりわけ、彼の中国、日本に滞在した経験は、彼の中国・日本に対する見解を大きく変え、同時に、中国・日本に大きな影響を与えることになった。一方、19世紀末以降、中国の知識人たちは自国の衰弱の原因を分析し、国の振興を図るために、西洋文明に学ぶ努力を積み重ね続け、特に1919年の五四運動以降は、梁啓超をはじめ、中国の知識人たちが、改めて積極的に西洋の思想家を中国で紹介していた。1920年10月から翌年7月までラッセルが梁啓超の招きに応じて中国で学術講演を行ったのもその事業のひとつであったのである。そのラッセルは、同時に、当時社会主義的民主主義の動きが活発化していた日本においてもすでに高名な人物で、帰国途中に改造社の社長山本実彦の招聘により、日本で訪問講演をしたのであった。

⁶ ラッセルは『The Problem of China』(London, Allen & Unwin 1922 P20)において、自分が中国に行く目的を述べた。

⁷ ラッセルの『The Problem of China』(London, Allen & Unwin 1922)は、特に一章を設け、「MODERN CHINA」(モダンチャイナ)を紹介した。

⁸ 『改造』1922年4月号に掲載されたラッセルの文章「支那の国際的地位を論ず」の中で、若い知識人たちを「青年支那」と呼んでいる。英語ではそれを「Young China (ヤング・チャイナ)」と書いている。「ヤング・チャイナ」という表現はラッセルの『The Problem of China』(London, Allen & Unwin 1922)の中に出た「Young China」を翻訳したものと同一のものと見なされている。

⁹ Bertrand Arthur William Russell 『The Problem of China』(London, Allen & Unwin 1922)。

¹⁰ 中沢臨川は文芸評論家であると同時に、社会問題にも発言している。改造社の依頼により、ラッセルの「政治的理想」を翻訳するほかに、中沢は社会主義批評に関する文章も寄稿していた。例えば、『改造』1919年12月号に「社会民主主義是非」がある。また、中沢臨川の著作『新社会の基礎』(1920)、『嵐の前』(1921)が改造社から出版された。

¹¹ 原作『Political Ideals』は1917年に書かれたものであったが、『改造』がこの文章を掲載したのは、大正デモクラシーの風潮をうけて、ラッセルの思想の適用可能性を探るためだと考えられる。

¹² 飯田泰三『大正知識人の思想風景—「自我」と「社会」の発見とそのゆくえ』(法政大学出版局 2017年4月) 170頁参照。

¹³ もっともその姿勢は一方で編集方針で「現在許されている「社会政策」の線に添うこと」(関忠果編『雑誌『改造』の四十年』光和堂 1977年5月)と述べる通り慎重なものでもあった。

¹⁴ 村上啓夫訳『社会改造の原理』(『世界大思想全集45』春秋社 1929年5月)

¹⁵ 1921年2月13日から1921年2月15日にかけて、『東京朝日新聞』で吉田静致の「ラッセルの愛国心論を讀みて」と題した文章が連載された。

¹⁶ 「過激派ロシアの前途」(『改造』 1921年2月号)。

¹⁷ 「未開国に於ける社会主義」(『改造』 1922年5月号)。

¹⁸ 前掲注17。

¹⁹ ラッセルによれば、二種類の「もの(goods)」とそれに対応する二種類の衝動とは区別できる。即ち、共有しえない物を入手したり、保有したりしようとする「所有衝動」と、隠したりまたは私有する必要のないものをこの世の中にもたらしたいという「創造衝動」がある。(牧野力編『ラッセル思想辞典』早稲田大学出版部 1985年5月)

²⁰ 「社会組織の良否の分岐点」(『改造』 1921年4月号)。

²¹ 前掲注17。

²² 長谷川の疑念については、三浦俊彦「バートランド・ラッセルと中国・日本」(『比較文学』 29(0) 1987年)に詳しい。

²³ この特集の中には西田幾多郎「学者としてのラッセル」、土田杏村「ラッセル氏と露国及日本を語る」、桑木或雄「文明は寧ろ一様性」、北沢新次郎「ラッセル及其の一行」、大杉栄「苦笑のラッセル」、桑木巖翼「鋭角の人物」が収録されている。

²⁴ 原文が削除された。

²⁵ 張東蓀は影響力のある中国の思想家であり、中国に西洋思想を紹介することに力を尽くした。彼の哲学思想や政治思想はいずれもラッセルの影響を受けていた。

- 26 馮崇義『羅素与中国：西方思想在中国的一次經歷』（三聯書店 1994年2月）。
- 27 三浦俊彦「パートランド・ラッセルと中国・日本」（『比較文学』 29(0) 1987年）。
- 28 座談会「対支国策討議」（『改造』 1924年11月号）。
- 29 前掲注28。
- 30 長谷川如是閑は近代日本を代表するジャーナリスト、思想家であり、一貫して自由主義の立場からファシズム批判活動を展開した。堀江帰一は明治・昭和時代前期の経済学者である。吉野作造は中国通であり、1906年に袁世凱の長男克定の家庭教師として天津に赴任し、翌年天津の北洋法政学堂の教習を兼任し、のちの中国共産党の指導者李大釗らを教えた。永井柳太郎は大正・昭和時代前期の政治家である。米田実は明治・昭和時代の新聞記者、外交史家である。1908年東京朝日新聞社に入り、外報部長、論説部長をつとめ、そのかわり東京商大（現一橋大）などで外交史を教えた。福田徳三は明治・昭和時代前期の経済学者である。1918年吉野作造らと黎明会を結成した。小村俊三郎は明治・昭和時代前期の外交官、ジャーナリストである。1897年北京に留学し、中国語をおさめる。青木宣純の秘書官や一等通訳官などをつとめ、日中外交につくした。退官後、『東京朝日新聞』などの論説委員となった。
- 31 「編輯だより」（『改造』 1924年11月号）。
- 32 前掲注28。
- 33 前掲注28。
- 34 前掲注28。
- 35 前掲注28。
- 36 前掲注28。
- 37 前掲注28。
- 38 前掲注28。
- 39 前掲注28。
- 40 1919年に中国で五四運動が起こった際に、日本の新聞メディアにおける五四運動について、学生たちが「煽動」されたという説があった（「北京学生狂態」（『東京朝日新聞』 1919年12月12日）、「支那の排日運動其根柢的原因」（『東京朝日新聞』 1919年12月19日）が、永井の中国の学生たちが率いた運動に対する評価は、「煽動」の説と違って、大学生たちの自覚性を認めている。
- 41 中国春秋時代に、宋と楚との戦いの際、宋の公子目夷が楚の布陣しないうちに攻撃しようと進言したが、襄公は君子は人の困っているときに苦しめてはいけないと攻めず、楚に敗れたという「左氏伝（僖公二二年）」の故事による。
- 42 『改造』1926年7月号に載せられた「現代支那号」の広告。
- 43 「現代支那号」の目次から明らかのように、「現代支那号」には胡適、李人傑など知識人が書いた現代中国の政治、社会運動を紹介する文章が載せられたほか、郭沫若、徐志摩、村松梢風、佐藤春夫など日中両国の作家たちが創作した現代中国に関する文学作品も掲載された。同号の「編集後記」に「文壇論壇の交歓は今回の本誌の計画」と述べたように、前節で紹介した座談会と同じく、現在中国では「どんな風に変わりつつあるのか」について読者に伝え続け、同時に中国の現代文学を日本の読者に紹介した。ここに、『改造』の中国現代文学の普及、促進という役割もうかがえるだろう。
- 44 高一涵は中国の政治学者、ジャーナリストである。日本に留学したことがあり、明治大学政治科で学んだ。寄稿した時、北京大学教授に任じていた。
- 45 林駭：林植夫、「孤軍派」の一員である。「孤軍派」とは、雑誌『孤軍』を機関誌として、国家主義の精神に基づく組織である。多くの「孤軍派」のメンバーは後ほど中国青年党のメンバーになったことから考えると、「独立青年党」とは中国青年党の異称である可能性がある。
- 46 芥川龍之介「上海遊記」（『大阪毎日新聞』 1921年8月17日～9月21日）（『芥川龍之介全集 第八巻』（岩波書店 1996年10月） 53頁）。
- 47 前掲注1 同書 21頁。
- 48 栗田確也「解説 型破りの出版人」（『出版人の遺文 改造社山本実彦』（栗田書店 1968年6月） 106頁）。
- 49 山本実彦「興亡の支那を凝視めて」（『改造』 1927年12月「臨時増刊」号）
- 50 管見の及んだ範囲では、日中両国における山本に関する論文には、次のようなものがある。
- ・唐政「魯迅と日本改造社同人」（『魯迅研究月刊』 1999年第1期）
 - ・木村泰枝「西方・日本・中国・日本人的「上海夢想」（復旦大学博士論文 2008年）
 - ・劉偉「中国現代文学の日本伝播」（『社会科学家』 2011年2月）
 - ・王中忱「『改造』雑誌と魯迅的跨語際写作」（『魯迅研究月刊』 2015年第10期）
 - ・巖谷大四「明治・大正・昭和、出版文化を開拓した人々—10—山本実彦—「改造」の急進主義と円本革命」（『総合ジャーナリズム研究』 7(1) 1970年1月）
 - ・萩野脩二「関于一个知識分子的生涯—以『改造』雑誌社総経理山本実彦为中心」（『関西大学文学論集』 42(4) 1993年3月）
 - ・十重田裕一「出版メディアと作家の新時代—改造社と横光利一の1920-30年代」（『文学』 4(2) 2003年3月）
 - ・高栄蘭「出版帝国の戦争—一九三〇年前後の改造社と山本実彦『満・鮮』から」（『文学』 11(2) 2010年3月）
 - ・玉井裕志「憧れの円本—『現代日本文学全集』と改造社「山本実彦」社長の功績」（『葦牙』 (40) 2014年7月）
- 51 松井石根は日中戦争で上海派遣軍司令官・中支方面軍司令官などを歴任し、戦後南京大虐殺の責任者とされ、処刑になった。
- 52 香月清司は陸軍省軍務局兵務課長、陸大幹事などを歴任し、1933年中将にすすむ。1937年盧溝橋事件勃発直後に中国駐屯軍司

令官となる。中国派遣軍の新設にともない、第一軍司令官として作戦を指揮した。

⁵³ 高凌霨は北京政府では直隸派に近く、代理國務総理などを務めた。また、後に親日政権である冀察政務委員会の委員になった。

⁵⁴ 吉利平次郎は青島学院創立者である。

⁵⁵ 山本実彦『支那事変—北支之卷』（改造社 1937年10月） 11頁。

⁵⁶ 前掲注 55 同書 18頁。

⁵⁷ 前掲注 55 同書 52頁。

⁵⁸ 前掲注 55 同書 28頁。

⁵⁹ 前掲注 55 同書 18頁。

⁶⁰ 前掲注 55 同書 20頁。

⁶¹ 前掲注 55 同書 179頁。

⁶² 前掲注 55 同書 178頁。

⁶³ 殷汝耕は辛亥革命には革命派として参加した。民国期には国民党に参加した。1935年に冀東防共自治政府を組織して長官となり日本に協力するが、通州事件で逃亡した。戦後漢奸として逮捕され、処刑された。

⁶⁴ 通州事件の始末について今の段階ではいくつかの説がある。冀東防共自治政府保安隊が国民革命軍第29軍によって買収され、あるいは教唆されたと日本側は主張し、それに対して中国側は、保安隊の行動について愛国に基づいた正義の行動であると主張している。

⁶⁵ 前掲注 55 同書 38頁。

⁶⁶ 前掲注 55 同書 39頁。

⁶⁷ 前掲注 55 同書 42頁。

⁶⁸ 前掲注 55 同書 44頁。

⁶⁹ 前掲注 55 同書 69頁。

⁷⁰ 前掲注 55 同書 70頁。

⁷¹ 前掲注 55 同書 78頁。

⁷² 前掲注 55 同書 78頁。

第4章

岩波書店と中国

「支那を識る為には支那の歴史文化を識らねばならず、更に古代支那が東洋否世界文化に及ぼした影響を考へねばならず、身近に於ては日本文化に尽した功績をも認めてやらなければならない。」

—岩波茂雄「古典の普及 支那をも尊重 新世界観の創造へ」(1938年)¹

岩波書店とその創業者である岩波茂雄は中国と密接な関係がある。1927年に岩波書店の代名詞と言える岩波文庫が創刊され、その中では中国の古典に関する出版物が次々と刊行されている。また、1929年7月には『思想』が特集号「支那号」を出し、中国の革命に関心を持って、中国問題を解説している。加えて、日中全面戦争勃発後の1938年に創刊された岩波新書も、中国をよりよく理解する機会を積極的に読者に与えることになった。このような中国についても深い関心を持った旺盛な出版事業を展開する一方で、岩波茂雄は中国との間で起こった戦争に対してはナショナリストでありながら、批判的な立場に立っていたとされている。²

岩波茂雄が力を入れた中国の古典の出版に対して、中島岳志は、「日中戦争を批判する書物の出版が難しい状況下で取り組んだのは、中国古典の出版によって日本人の中国蔑視を除去させる作業だった」³と指摘した。中島岳志の研究では、リベラル・ナショナリストとしての岩波茂雄が中国の古典文化を重視する姿を明らかにしている。しかし、1920年代から30年代にかけて大きく変貌を遂げる日中関係が岩波茂雄の対中国観とどのような関連性があるのかについてはまだ十分に検証されていない。本章は改めて1920年代か

ら日中全面戦争突入時期における岩波茂雄の出版活動を綿密に研究し、主に日中文化交流における彼の業績と限界に焦点をあてながら、その時代性や岩波茂雄の思想との関連性において検証することを目的とする。

4.1 古典の普及と中国に対する尊重

日本では大正末期から昭和初期にかけて、経済界の不況が続いていた。この不況に対して、改造社の山本実彦は、『現代日本文学全集』という円本を出した。続いて円本の第二弾として新潮社が『世界文学全集』を刊行し始めた。第三弾として春秋社が『世界大思想全集』を刊行した。円本の濫出と増量により大きな取次から地方小売り書店への発送と到着が混乱するようになった。それに対し岩波茂雄はドイツのレクラム文庫を模倣し、日本版レクラムの計画を立て、古典を普及させるという考えで、岩波文庫の計画を進めることになったのである。このような時代の中で岩波書店がなぜ「岩波文庫」を刊行したのだろうか。それを知るうえで参考になるのが、岩波文庫は創刊する際に「岩波文庫発刊に際して」と題して1927年7月の『思想』に発表された文章である。

「吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亘って文芸哲学社会科学自然科学等種類の如何を問はず、苟も万人の必読すべき真に古典的価値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は予約出版の方法を排したるが故に、読者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選択することが出来る。」

まず先に述べた範としてのレクラム文庫と岩波文庫とを比べてみる。「岩波文庫発刊に際して」の冒頭には、次のようなことを書いている。

「真理は万人によって求められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために学芸が最も狭き堂宇に閉鎖され

たことがあった。今や知識と美とを特権階級の独占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切実なる要求である。岩波文庫はこの要求に応じそれに励まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少数者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。」

これはレクラム文庫の理念「知識・教養の仲介を通じての民衆の政治的解放」⁴と一致する。また、レクラム文庫の原則である「文庫の内容的多様性」、「古典の強調」、「本の外観の規格化（簡易なる形式）」、「予約出版に頼らない叢書の個別売り」⁵などもまさに岩波文庫が参考にした原則である。

1867年、ドイツに於ける著作権法を制定し、それまで著者に無期限に与えられていた著作権が死後30年までと規定されたことにより、古典作品の刊行が自由となった。フィリップ・レクラム・ユング書店はレクラム文庫を刊行し、これが文庫創刊の大きな契機となった。その事業は社会の変化と深い関係がある。1866年には、ビスマルクの手によって北ドイツ連邦が生まれたが、4年後の普仏戦争に勝って1871年には、念頭のドイツ統一が達成されている。そしてこの後ドイツには、長く、豊かな平和時代が訪れた。一方、経済的にも、かつてないほどの大規模な好景気が訪れた。それによって経済活動は更に活発になり、それは同時にドイツ人の一人一人に社会的な上昇の可能性を与えることになった。教育や教養が絶対不可欠の条件とみなされるようになったのである。このことにより古典主義の教養の理念も個人に身近なものとなり、レクラム文庫の流行になったのである。

岩波茂雄が「岩波文庫」を創刊した最大の目的は、古典の重視と提供という理念の実現であった。それは彼の次のような言葉から伺い知ることができる。

「古典といふものは歴史の洗礼を受けて現在に至ったものでいはば古今東西の変らざる真理を伝えて居りそしてこの真理に対する愛と尊敬といふものは常に民衆を正しき方向に導く偉大なる原動力となるものであるからである、変動の激しい時代には人々は動ともすれば波の間に動揺し勝ちなものである。」⁶

「岩波文庫」が日本出版界において生命力を持ち得た理由は、読者の要求に答え、古典を用いて現在の問題を解決する方法を指し示し続けたその理念にある。ここで問題とすべきは、その理念と中国との関係である。表 4.1 は 1927 年の創刊から日中戦争の終了までどのような中国関連の書物が文庫化されたのかを示したものである。

表 4.1: 1927 年から 1945 年まで「岩波文庫」が刊行した中国に関する書籍

刊行日付	著訳編者	題目
1932 年 2 月	淡濟主人 訳	『通俗古今奇観』
1932 年 11 月	幸田露伴 校閲	『李太白詩選』
1933 年 4 月	武内義雄 訳注	『論語』
1933 年 10 月	藤原正 校訳	『孔子家語』
1934 年 3 月	曾我部静雄 訳注	『塩鉄論』
1934 年 10 月	太田悌蔵 訳注	『寒山詩』
1935 年 4 月	藤原正 訳注	『子思子』
1935 年 6 月	佐藤春夫・増田渉 訳	『魯迅選集』
1935 年 11 月	橋本循 訳注	『楚辞』
1935 年 11 月	山田準・阿多俊介 訳注	『孫子』
1936 年 6 月	武内義雄・小林勝人 訳注	『孟子』
1937 年 4 月	高田真治 訳注	『易経』
1937 年 9 月	司馬遷 著 藤原正 訳注	『孔子伝』
1937 年 12 月	山田準・安本健吉 註解	『千字文』
1938 年 3 月	武内義雄 訳注	『老子』
1938 年 9 月	那珂通世 著 和田清 訳	『支那通史 上冊』
1939 年 9 月	那珂通世 著 和田清 訳	『支那通史 中冊』
1940 年 3 月	清原宣賢 講述	『毛詩抄』
1940 年 7 月	武内義雄・坂本良太郎 訳注	『孝経・曾子』
1941 年 12 月	那珂通世 著 和田清 訳	『支那通史 下冊』
1942 年 10 月	石島快隆 訳注	『抱朴子』
1943 年 11 月	武内義雄 訳注	『学記・大学』

改めて特徴を読みとってみよう。岩波文庫が 1927 年に創刊されたにもかかわらず、このシリーズで中国に関する書籍を発行しはじめたのは 1932 年からである。この現象は満州事変に関与しているのではないかと推測される。それは 1932 年 10 月岩波が「時局に際し同業に告ぐ」の中で満州問題に言及し、「果していつになったら満州国に王道の理想が実現し、三千万民衆が平和と幸福を享受するやうになれるか」⁷と述べているからである。

さて岩波文庫の特徴に戻ろう。岩波文庫は中国古典思想を紹介する際、その最初に中国

の四書五経に注目している。『論語』は古代中国古典「四書」のひとつであり、『易経』は易・書・詩・礼・春秋の五経のひとつである。『老子』、『孫子』は諸子の代表作である。

さらに、このシリーズの中には古典以外の著作も収録されている。1937年日中戦争が始まったあと、『支那通史』が発行された。『支那通史』は中国歴史の知識の普及を必要とした明治中期の時代的要請に応じて、那珂通世（1851 - 1908）が、半生の研究成果を注いだ著作である。明治中期に生まれた本書が1938年に文庫化された経緯は和田清の序文によって明瞭に理解することができる。

「是より先き、維新の大業が成って我が邦の文運が大に開けるや、新興の洋学と共に、併せて東亜の形勢を容易に知るべき簡明なる史書に対する要求が蔚然として起った。……繰返して言ふが、私が今日本書を邦訳して出す意味は、今の時局に当って、他に適当な良書が無いから、姑く間に合せにこの古本を提供するといふことでは決してない。「支那通史」は我が東洋学界が永く誇とすべき古典的作物であるから、この際之を読み易く軽便な形にして、広く世の需要に応じたいといふ念願に外ならぬのである。」⁸

つまり、日中戦争下における大衆の中国歴史へのアクセスを近代の「古典」である本書に担わせたのである。

このように岩波書店は中国古典の書籍を刊行し、日本の読者に中国の古典に接触する機会を与えた。では、岩波茂雄は中国の古典に対してどのような態度を持ち、作品を選んだのであろうか。それについて改めて彼の言葉を引きながら考えてみることにしたい。改めて冒頭に引いた「古典の普及 支那をも尊重 新世界観の創造へ」を見てみよう。

「支那を識る為には支那の歴史文化を識らねばならず、更に古代支那が東洋否世界文化に及ぼした影響を考へねばならず、身近に於ては日本文化に尽した功績をも認めてやらなければならない」

彼は中国の状況をよく理解しなければならないという観点を主張し、中国の状況をよく理解するために、ある民族の根本としての歴史文化を理解しなければならないと述べている。また、彼は中国の古典文化が東洋、さらに世界文化に及ぼした影響と、日本文化に尽くした功績を認めている。具体的に中国のどのような古典作品が日本に影響を与えてきたと彼は考えていたのだろうか。岩波は1941年に太平洋戦争の勃発に先だって、NHKの希望により、超短波による海外放送で次のようなことを述べている。

「我々の祖先は千数百年に涉って孔子や老子や荘子の原典に親しんで来て、彼等の教説は今日でも私たちの日常生活の中にいろいろな形で溶けこんでいるのである」⁹

その中で彼は孔子、老子、荘子の原典を提示し、これらの典籍は日本人の日常生活にも溶けこんでいると述べている。いうまでもなく孔子の学説は儒学であり、日本伝来後、日本人と日本社会に大きな影響を与え続けた。後で述べるように明治維新を追慕し、義勇で公事を重んじ、法律を守る岩波の姿勢にも儒教の影響もうかがわれるであろう。また、1945年3月に岩波が書いた「貴族院質問事項」のメモは次のように記している。

「中華民国は四、五千年の古き歴史ある大国であり我が日本は文化に負ふところ少なからぬ恩義を持っている。維新以来近代文化を輸入するに於て一日の長あり、兄貴分たる位置にありしが之を以て旧恩を忘る可きではない。」¹⁰

その中で、彼は改めて中国文化を悠久なる歴史があると位置づけ、その文化の日本に対する影響を語った。また、日清戦争後中国への評価を否定的なものに変えていった一般日本人の対中国認識と違い、明治維新後にあっても中国文化が古来日本に与えてきた影響の大きさを認めている。そこには、岩波の客観的な態度と「恩返し」という彼の義侠の精

神が見られる。そしてこの恩返しの思想も彼に根づいた儒教精神の発露だと考えられる。

4.2 「岩波新書」の刊行

前節で述べたように、岩波文庫は古典を普及するのを目的としていた。しかし、戦争が拡大しつづけるなかで、同時代に関わりある叢書を刊行する必要があると岩波書店は判断した。それが1938年に刊行し始められた岩波新書である。岩波新書は読者が現下最も注目しなければならない問題を扱い、特に創刊した当初は、中国に関係ある様々な問題を扱った。いまこそ、日本人は中国の歴史文化を知らなければならず、中国と日本が現在どのような関係があるのかについても知らなければならぬ。岩波新書は中国をよりよく理解する機会を読者に与えるものともなったのである。岩波は「古典は古典だ、今度のやつは今の問題を、今の人に書いてもらうのだ。大体寿命はあまり長くなくてよい、生き生きした問題を掴まえるのだ」¹¹と岩波新書の刊行を決定した。こうした岩波新書刊行の趣旨は、岩波茂雄による「岩波新書を刊行するに際して」¹²の中にも確認できる。本節はその「岩波新書を刊行するに際して」を分析した上で、新書に収められた中国関係の著作と翻訳の実際を検討しながら、岩波茂雄の時局に対峙する姿勢を考察する。まずは「岩波新書を刊行するに際して」の中で岩波が提示した日中戦争に対する認識と時勢に対する批判的な言葉に注目し、それらをトピックとしてとりあげながら、岩波の考えを探っていく。

①日中戦争に対する認識

「岩波新書を刊行するに際して」の冒頭では読者が現下最も注目しなければならない問題として日中戦争を扱っている。岩波は「世界は白人の跳梁に委すべく神によって造られたるものにあらざると共に、日本の行動も亦飽くまで公明正大、東洋道義の精神に則らざるべからず。東洋の君子国は白人に道義の尊きを誨ふべきで、断じて彼等が世界を蹂躪せし暴虐なる跡を学ぶべきでない」と述べ、武力を行使し、日中戦争を起こした日本をあくまでも道義心のレベルに限定した形ではあるが批判した。それに、「日支事變の目標」は「人類に平和を与へ王道楽土を建設することは東洋精神の神髓にして、東亜民族の指導者を以て任ずる日本に課せられたる世界的義務」にあらねばならないと主張した。

鹿野政直はそういう言い方は「日中戦争が侵略的であることへの批判」¹³と評価した

が、岩波の日中戦争に対する認識には時代的制約があると指摘できる。確かに平和に基づく民主主義の認識を持っていた岩波は武力による帝国主義的侵略を批判したが、彼の認識にはアジア（特に日本が主導するアジア）対欧米という対抗軸が色濃く見られ、上から目線的姿勢の存在が読み取れるのである。これが彼の思想の限界だと考えられる。

②自由化、民主化への追求

岩波は対外的には平和に基づく国際的民主主義を持ち、対内的にも自由化、民主化を追求していた。彼は「政党は健在なりや」と疑問を呈しつつ、日本の政党政治に対して問題点を指摘した。つまり彼は政党が独断で国の政策を決定せず、常に時局の動きを国民に知らせるべきと主張していたのである。

また、彼は「思想に生きて社会の先覚たるべき学徒が真理を慕ふこと果して鹿の溪水を慕ふが如きものありや」と知識人が真理を追求すべきと主張しながら、政府の言論統制に対して「国策の線に沿はざるとなして言論の統制に民意の暢達を妨ぐる嫌ひなきか」と批判した。岩波は自由な文化人としてこの点においては国策に同調するわけにはいかなかったのである。この「言論統制」は国民が心の底から望むことではないと批判し、知識人の自発性を損なう「言論統制」から「民意の暢達」への転換を強く要求した。具体的にいえば、彼は直ちに1937年に第一次近衛内閣が主導した「挙国一致国民総動員」に対して、「現状に少からぬ不安を抱く」と政策に対する疑惑を表明した。

自由化、民主化を追求している岩波によると、国家は民主主義によって運営されているにもかかわらず、日中戦争の実態を国民に十分に知らせていない。しかも、政府は日中両国の関係を平和的解決に対する熱意も持たず、方針すら決めかねている。ここからは時勢つまり日中全面戦争に突入している状況と関連事項を国民に紹介しようとする岩波新書の刊行目的が見えてくる。

③思想の源流である「五箇条の御誓文」

岩波は「岩波新書を刊行するに際して」の中で、何度も「五箇条の御誓文」に触れ、自分が「明治に生まれ、明治に育ち来れる者である」ことを強調する。そして、拡大する戦争の中であって、「明治時代を追慕し、維新の志士の風格を回想するの情切なるものが

ある」と述べている。「吾人は欧米功利の風潮を排して東洋道義の精神を高調する点に於て決して人後に落つる者でないが、驕慢なる態度を以て徒らに欧米の文物を排撃して忠君愛国となす者の如き徒に与することは出来ない。近代文化の欧米に学ぶべきものは寸尺と雖も謙虚なる態度を以て之に学び、皇国の発展に資する心こそ大和魂の本質であり、日本精神の骨髓であると信ずる者である」という岩波の主張はまさに「五箇条の御誓文」の反映である。つまり彼は偏狭なナショナリズムを否定し、「皇国の発展に資する」者は謙虚なる態度を以てその精神を欧米に学ぶべきであると考えていたのである。本章の第4節で岩波の思想の源流である「五箇条の御誓文」が彼に与えた影響を考察する形で詳細に論述する。

以上、岩波新書の刊行の辞「岩波新書を刊行するに際して」の中で岩波茂雄が提示した彼の日中戦争に対する認識と時勢に対する批判的な言葉に注目し、岩波の考えを考察した。岩波文庫にせよ、新書にせよ、その刊行の目的はお互いを知ることが大事だと強調するものだと考えられる。特に日中戦争を契機として刊行が始まった岩波新書の刊行の辞から、平和、言論の自由を重視している岩波の日中戦争、時勢に対する批判的な姿勢を読み取ることができるのである。しかし、「東亜民族の指導者」という言葉を目にすると、これは彼が批判した偏狭なナショナリズムと繋がったものだと言える。この点から岩波の思想の限界が徐々に明らかになってくるだろう。

次に、上述のような日中戦争下の時局に対する反応を示した出版人、岩波茂雄が刊行を開始した岩波新書の具体的刊行状況を検討してみたい。岩波新書シリーズの中で、最初に発売されたのは次の20冊の本である。

表 4.2: 岩波新書の最初のラインナップ

刊行日付	著訳編者	題目
1938年11月	クリスティ 著 矢内原忠雄 訳	『奉天三十年 上』
	クリスティ 著 矢内原忠雄 訳	『奉天三十年 下』
	津田左右吉	『支那思想と日本』
	寺田寅彦	『天災と国防』
	斎藤茂吉	『万葉秀歌 上』
	斎藤茂吉	『万葉秀歌 下』
	小倉金之助	『家計の数学』
	中谷宇吉郎	『雪』
	白柳秀湖	『世界諸民族経済戦夜話』

刊行日付	著訳編者	題目
	武者小路実篤	『人生論』
	ヴィットコップ 編 高橋健二 訳	『ドイツ 戦歿学生の手紙』
	ジーンズ著 鈴木敬信 訳	『神秘的な宇宙』
	サートン著 森島恒雄 訳	『科学史と新ヒューマニズム』
	長谷川千秋	『ベートーヴェン』
	小堀杏奴 編	『森鷗外 妻への手紙』
	里見淳	『荊棘の冠』
	山本有三	『瘤』
	久保田万太郎	『春泥・花冷え』
	横光利一	『薔薇』
	川端康成	『抒情歌』

最初に刊行された 20 冊の中に、中国に関連する書籍が 3 冊ある。特に『奉天三十年』をもって新書の第一冊とするのは、読者の中国に対する理解を深めることを意図したものだといえる。『奉天三十年』の出版経緯は、岩波書店の元編集者中島義勝が「戦争の中の岩波新書」で述べているように、岩波が衛藤利夫が訳述する「満州生活三十年—奉天の聖者「クリスティ」の思出」¹⁴を読んで感動したからだという。¹⁵ また、これについては岩波はかつて「時局下の好読物」は何だと聞かれた時、「奉天図書館衛藤氏訳述「クリスティ牧師満州生活三十年」」¹⁶だと答えたというエピソードも残っている。

『奉天三十年』が新書の第一冊として選定されたのは偶然の読書経験によるものではなかったであろう。この点については、矢内原忠雄が「訳者序」で「(岩波茂雄)氏は本書を読んでクリスティの無私純愛なる奉仕的生涯に感激し、今や満州及び満州人に対し従来よりも遙かに大なる責任を取るに至りし我が国民に本書を提供し、以て満州をして真に王道楽土たらしむるに資せしめようと欲せられたのである」¹⁷と解釈している。確かにここには日本が主導的立場で「王道楽土」を建設する主張と上から目線の姿勢が読み取れるが、岩波新書発刊の動機は日中戦争にあり、そして岩波が『奉天三十年』を第一、二篇に選んだので、武力を行使し日中戦争を起こした日本を批判していたと考えられる。

原著 (Thirty years in Moukden, 1883-1913, being the experiences and recollections of Dugald Christie) は 1883 年から 1913 年までの 30 年間、イギリスの医療宣教師であるクリスティ (Christie Dugald, b, 1855) が中国の東北地方で宣教した経歴である。クリスティは中国で日清戦争、義和団運動、日露戦争、辛亥革命を経験した。この本には、クリスティの中国に対する医療援助の実際と中国に対する深い愛情が見られるだけではな

く、清朝末期の歴史、中国東北地方の歴史、中国東北地方におけるキリスト教宣伝の歴史を見ることができる。最初は1914年5月にロンドンの「Constable and Company Ltd」により発行された。のち衛藤利夫が抄訳し、1935年に大亜細亜建設社により「満州生活三十年—奉天の聖者「クリスティ」の思出」というタイトルで発行された。そして1938年に岩波書店により矢内原忠雄が翻訳した『奉天三十年』が発行されることになったのである。原著と比較すると、各章の前の詩は残しているが、元の図版は利用していない。中国語訳としては2007年の張士尊・信丹娜による湖北長江出版集団・湖北人民出版社版『奉天三十年（1883-1913）——杜格尔德・克里斯蒂的経歴与回憶』がある。この本の序文では、「他們希望佔領東北的日本殖民者向杜格爾德學習，以愛征服東北人民的心，征服中國人的心，從而實現其在東北以及全中國建立“王道樂土”的“理想”¹⁸と述べ、王道樂土の理想を批判しているし、日本語版は、戦争と植民地支配にある程度加担したと指摘している。¹⁹しかし、翻訳版を考察する際、翻訳者や出版社の価値判断、時代背景、作品の受容者である読者の心理など各要素を無視することはできない。先述したように岩波新書の創刊の目的には常に中国の理解を広め、中国の理解を深め、平和を維持するという信念があった。民族主義者としての限界はありながら、信念を持って中国の現状の一端の理解に手がかりを与えようと試みは称賛に値する。

『奉天三十年』をはじめ、1938年から1945年まで岩波書店が発行した中国に関する書籍は71冊ある。紙幅の関係で詳細には立ち入らないが、それらのなかから岩波新書のみを取り出したのが以下の表である。

表 4.3: 1938年から1945年まで「岩波新書」が刊行した中国に関する書籍

刊行日付	著訳編者	題目
1938年11月	クリスティ 矢内原忠雄 訳	『奉天三十年 上』
1938年11月	クリスティ 矢内原忠雄 訳	『奉天三十年 下』
1938年11月	津田左右吉	『支那思想と日本』
1938年12月	長与善郎	『大帝康熙—支那統治の要道』
1939年4月	ウィットフォーゲル 平野義太郎・宇佐美誠次郎 訳	『支那社会の科学的研究』
1939年5月	尾崎秀実	『現代支那論』

刊行日付	著訳編者	題目
1939年6月	周仏海 犬養健 訳編	『三民主義解説 上』
1939年11月	武内義雄	『儒教の精神』
1939年12月	周仏海 犬養健 訳編	『三民主義解説 下』
1940年1月	林語堂 吉村正一郎 訳	『支那のユーモア』
1940年9月	何幹之 中西功・小泉謙 訳	『支那の経済機構』
1941年3月	グルーシャコフ 西尾忠四郎・西沢富夫 訳	『支那の経済地理』
1942年3月	殿木圭一	『上海』
1942年4月	鳥山喜一	『支那・支那人』
1943年7月	橘樸	『中華民国三十年史』

1938年から1945年まで発行された岩波新書は合計で98冊であり、その中で中国に関する書籍は全体の約15%を占めていることがわかる。一方、岩波文庫の中国関連書籍の数は、その間に出版された岩波文庫の総数の約0.03%に止まり、両者を比較すると、中国の現在の状況に関連する新しい書籍を出版することに岩波が注力していたことがわかる。言論の自由が制限されているなかで、状況が緊迫している中国の現在の状況を見つめ続け、それを出版し続けたことは非常に称賛に値する。新書の出版後、編集長は陸軍部の尋問を受け続け、1944年には出版を中断することを余儀なくされている。しかし、岩波新書の命は当初の宣言通り「短期間」ではなかった。1949年に新たに刊行が開始されて以降の歩みは通算3400冊の刊行数が物語っている。

4.3 雑誌と時局

「限りなく出版されて居る雑誌は、それぞれ深淺こそあれ社会的學術的に文化の進展に寄与して居るのであるから、その普及に協力することは当然よいことであるが、また一面この週間に於て、雑誌発行者は自己の発行せる雑誌について常に社会的責務を果して居るか、またこの非常時に於て充分その使命をつくして居るか等につき、反省することは一層必要なことと考へる。」

—岩波茂雄「時局下の雑誌観」『新聞之新聞』1938年9月²⁰

岩波書店は岩波文庫、岩波新書などの叢書を刊行する他、各種の雑誌も刊行している。例えば、1921年に専門的知識の枠組みを越え、思考の活性化を通して広さと深さを追求する『思想』を創刊する。1931年には『科学』を創刊する。『図書』は、1936年に最初は広告冊子の『岩波書店新刊』の配布から始まり、1938年に『岩波月報』と改題、さらに同年に『図書』と改題されたものである。そして、敗戦後まもなく1945年12月に『世界』を創刊する。本節ではそれらのなかで『思想』を取り上げ、そこに現れた中国認識を追求していくことにする。

創刊号の表紙には「時流に媚びずしかも永遠の問題を一般の読者に近づけようとする」とある。そこには学術にとどまらず社会問題に敏感に反応しようとする雑誌『思想』の主旨がうかがわれる。その具体的実践は各「特集号」において確認することができる。1929年7月「支那号」、1938年4月「自由主義検討」、1941年11月「大東亜戦争」などがそれである。以下表4.4「支那号」を例とし、分析してみる。

表 4.4: 特集号「支那号」目次

分類	作者	題目
論説	和辻哲郎	「支那人の特性」
	小川琢治	「歴史地理学上から観た東亜文化の源流」
	長谷川如是閑	「支那大陸に於ける『外国』の運命」
	園田次郎	「革命支那の一断面」
	藤野啓次	「支那革命史概論」
	平田良衛	「支那革命の農業問題」
	藤枝丈夫	「支那最近の思想運動」
資料	石田幹之助	「最近に於ける支那学の展望」
	松方三郎	「最近十年間に於ける支那に関する英米文献」
	経済批判会	「支那革命に関するロシア書」
	支那問題調査所	「一九二十年以後に於けるドイツ語文献」
	支那問題調査所	「支那語で書かれた文献」
学芸余録	青木正児	「支那の絵本」
	佐藤春夫	「鴻雪因縁図記といふ本」
	奥野信太郎	「媚香楼余事」
	清水安三	「支那学雑記」

『思想』が創刊された大正時代は、わずか15年間という短かさであったにも関わらず、民主主義と教養主義が横溢した時代であり、近代国家建設に力を入れる明治時代と国

家統制が進む昭和時代との間の過渡期として、時代的特徴を持っていた。その特徴は哲学に反映した。1915年岩波書店は時代に応じ、「哲学叢書」を刊行し始めている。『思想』の創刊もその流れのなかに位置付けられるが、こちらの方はジャンルを超えて我々が直面する様々な問題を討議する場の形成を目指すアクチュアルな性格を持っていた。²¹つまり文化的立場から国家や国際問題を検討する雑誌だったのである。1920年代の中国の動向は世界に注目されており、この時期に「支那号」を刊行したのは『思想』の編集ポリシーに見合ったのであった。支那号の編集後記のなかには、次のような一文がある。

「多くの学問が一層切実に方法論的再吟味を要求されその意味から哲学に関心をもたねばならなくなったと共に、また哲学が—或は哲学者が—今迄のやうな古い殻の中に閉ぢこもっていられなくなった今日、「思想」が在来の領域以外にその問題を見出してゆくのに不思議はない。それによって「思想」はかへって（或は始めて）思想に忠実でありうるだらう。」²²

特集号「支那号」に収録された論説について簡単に紹介すると、和辻哲郎の「支那人の特性」は中国人の特性を分析し、最後に日本人は中国人の敵ではない、中国に勝つという考え方は一つの退歩であると結論づけ、長谷川如是閑の「支那大陸に於ける『外国』の運命」は、中国大陸における帝国主義の勢力、とくに満州における日本の勢力を論じ、中国の無産階級との競争により、衰退しつつあることが見てとれると述べている。また、中国において、孫文の死後、1920年代後半から国民党と共産党が、激しくぶつかり、中国の革命運動はそれを境に分かれることになったのであるが、このような事態を背景に、園田次郎の「革命支那の一断面」、藤野啓次の「支那革命史概論」、平田良衛の「支那革命の農業問題」らの文章が書かれ、中国の革命の進展を紹介することになった。

論説を寄せた者たちは当時の日本の代表的な哲学者、倫理学者、文化史家、日本思想史家であり、通常「知識人」と呼ばれている面々であった。この特集号に集まったこれらの「知識人」がおしなべて中国問題に対して慎重な態度をとり、国益重視論を戒める論陣を展開したわけである。ここにリベラリストとしての岩波茂雄の姿勢がよく現れているといえるだろう。

以上、『思想』『支那号』に基づいて、メディアとしての岩波書店の中国認識について検討してみた。以下では岩波茂雄個人の中国認識をその思想に分け入って考察することにした。

4.4 岩波茂雄による五箇条の御誓文と彼の中国認識

第2節の「「岩波新書」の刊行」において述べたように、岩波茂雄は何度も「五箇条の御誓文」に触れ、偏狭な国粹主義による言論統制を批判していた。彼の遺文を読めば、それ以外の場面でも繰り返して「五箇条の御誓文」に言及している。安倍能成も『岩波茂雄伝』で「岩波の文化政策従って政治の根本は、一言にしていえば、明治維新の五箇条の御誓文にあった」²³と評している。では、この事実は岩波の思想、中国認識にどのような関係を持つのだろうか。

五箇条の御誓文は明治新政府が「従来の幕末政治からの決別を宣言する」²⁴ために作成した短い五つの条文からなる抽象的な文書²⁵である。テツオ・ナジタは『明治維新の遺産』で御誓文は「日本を自己の歴史の大部分から切り離すだけでなく、アジア文化圏全体からも分離しようとする維新の指導者の決意を表明したものであった」²⁶と開示し、五箇条の御誓文の外来の文化（特に欧米の先進技術）の受け入れを促進するという文化的意義と、新しい国際関係を樹立し、民族の発展を促進するという国際政治的意義を提示している。実際に五箇条の御誓文は多様な立場から受容され、その多様性と柔軟性について大塚桂と川田敬一の研究は示唆的である。²⁷大塚、川田両氏の言うように、さまざまな立場から解釈可能な五箇条の御誓文は解釈する側の思考パターンを反映することになったであろう。

岩波が中国を語った時も五箇条の御誓文の理念を盛り込んでいる。本節においては、岩波茂雄の中国観の中の「五箇条の御誓文」を取り上げ、彼の中国認識の特徴をあらためて探ってみることにする。

4.4.1 満州問題

岩波茂雄はいわゆる十五年戦争期に日本が突入した、つまり満州事変勃発時から日本の対中国政策に対し、違和感を覚え、それに批判を加えることから、その出版活動を出発さ

せた。そして、その問題点を指摘する際に、五箇条の御誓文をシンボルとして取り上げることになるのである。岩波は満州事変以降日本の対中国政策に対して次のように批判している。

「東洋人の進路を阻まれるといふが如きことは、天地の道に悖るべきものである。これなどは大いに国際聯盟に於て争ふべきである。友朋支那に□□「原文ノママ」せず、むしろこれと提携して東洋のレベルを高め、平気でものを言へるやうにしなければならぬ。今日の日本の対支方策は私としては讚成することは出来ない。日支歡喜の捷徑は、満州国をして真に王道樂土を建設せしめることである。」²⁸

岩波は日本の対中国政策を「天地の道に悖る」として捉える視点を持っていた。1932年に「満州国」の建国が宣言された後、日本の対中国政策は「軍備拡張」、「国家総動員体制の確立」を背景に進展し、²⁹ それに「支那本部政策」³⁰ が加えることになった。中国の分裂を促進し、中国の華北地方において日本の満州支配を容認する政權を樹立することを図った「支那本部政策」は日本の武力による侵略拡大を実行する際の根拠となる。岩波は日本のそうした武力侵略を批判すると同時に、「満州国」において「真に王道樂土を建設」することを憧れている。彼は武力侵略を「天地の道に悖る」として考え、一方「満州国の王道樂土の建設」を「天地の公道」として考えていた。

「満州国の王道樂土の建設に専念助力して三千万の民を喜ばしめ我国の意図の侵略的に非ざることを中外に明示確認せしむること、あくまで平和的手段を以て不合理なる障壁の撤廃を世界に提議し天地の公道に立って勤勉進取の我が国民の新興勢力を扶植拡張する所以の道を講じること、日支親善提携して東洋の文化と実力を向上せしめ東洋民族を白人の繫縛より解放する機運を促進すること」³¹

「天地の道」とは五箇条の御誓文の「旧來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ」のこと

である。ここで岩波は「天地の道」を国際関係において従うべき民主主義の平和理論と文化・経済の繁盛の実現として解釈したのである。だが、ここには矛盾がある。「満州国」を一つの国にし、中国本部と分離して視するのは「満州」は中国の一部ではないという中国認識である。「満州国」を一つの国と目する考えは第一次世界大戦後国際関係において理想とされた民主主義に基づく政治的自立と国家安全保障に反しているのである。そうした矛盾を生んだ原因は、「満州国の王道楽土の建設」の遂行を通じて、「日支親善提携して」、「東洋民族を白人の繫縛より解放する」という岩波の理想と現実が合わないことにあった。ここで考えるべきは、岩波がどのように東洋と世界の関係、そしてこういう関係における日本の役割を捉えていたのかである。

岩波の言論活動において、五箇条の御誓文への言及とともに一貫して見られるのは東洋に対して日本が果たす役割である。岩波が「東洋民族を白人の繫縛より解放する」³² といひ、日本が東洋を守るために戦うと主張し、「御誓文に対する感激を新にして私心を去ってこの精神に生くることが日本を救ひ時局を救ひ、東亜の建設者として世界に立つ所以だと信ずる」³³ と、日本を東洋の「救世主」として位置付けている。しかし、このような東洋への視線には、問題点がある。まず、「満州国の王道楽土の建設」、「日支親善提携」というのは岩波が東洋の構成員を「日・満・支」として捉える視点を持っていたからである。そして日本を東洋の「救世主」として位置付けているのは「満州国」・中国に対する優越感や指導者意識に基づいているからである。つまりこうした岩波の主張には近代日本のアジア観におけるアジア連帯論と日本盟主論を見て取れるのである。³⁴ 結局岩波は侵略と連帯の本質を区別できず、あくまでも理想主義的な対中国認識を維持することしかできなかったのである。このような理想主義的の正当化論は結局ナショナリズムの拡大、つまり国家主義に傾斜していくことと繋がっていく。その意味においては岩波も国家主義に傾斜していくことになったと批判することも可能である。

4.4.2 時局と五箇条の御誓文

日中戦争が進むにつれて、侵略を正当化し、なおより強力な戦争動員体制を創出するために、国民精神総動員強化方策³⁵ や「八紘一宇」³⁶ などの方策やスローガンがぞくぞく掲げられていった。当該時期に岩波は日中戦争に関心を寄せ、時局に対して盛んに意見

を述べていた。言い換えれば、岩波の時局に対する認識にはつねに中国があったのである。その彼の認識によって立つ原理的な部分に五箇条の御誓文があったわけで、その意味でも岩波が言及した五箇条の御誓文の意味を分析することは重要である。

岩波は国家と国民のあるべき精神として、国民精神総動員や八紘一宇ではなく、「事変以来、急に国民精神総動員だとか八紘一宇だと喧しく云はれて居るね、こんな事が俄かに説へられ国民の結束を堅めようなんていふのは凡そ拙い、こんな事をやいやい云ふ連中程軽薄で内容のない種類の人間が多いのぢやないか、私は今日何よりも必要と考ふるのは、明治天皇の下し賜うた「五箇条の御誓文」これですよ」³⁷と語っている。日中戦争長期化のもと、戦争の泥沼から抜け出すために「明治大帝の五箇条の御誓文を強調力説国民のすべてに知らしめねばならぬ。殊に武人に徹底を要す。海軍よりも陸軍に一層必要ありと信ずる。これこそ明治維新開国の指針たるに止らず、興隆日本永遠の国是として、又今時の事変に於ける指導原理として遵守」³⁸されなければならないと岩波は言うのである。岩波の思考の出発点は明治維新論にあったのである。特にそれには武士的色彩が色濃く出ている。このような武士的ナショナリズムは日本国に対する過度の自負を生み、言い換えると過度の愛国心の発露につながり、不平等な目線で世界の国々を見てしまうという側面を持つことになる。これこそ岩波が国家主義に傾斜していく思想的源流だと考えられる。

無論、岩波の武士的ナショナリズムが一方で時局に対する憂慮と体制への抵抗という面を有していたことは看過することはできない。「明治大帝の御誓文を体して民意暢達の立憲政治を擁護することは君国に対して忠誠なる日本国民の最高義務」³⁹であらねばならないと岩波は言うのである。彼の忠誠の対象は君主ではなく、民意暢達の立憲政治なのである。こちらは五箇条の御誓文の「広く会議ヲ興シ万機公論ニ決スヘシ」を基準にし、デモクラシーの世論を重視することである。そういう意味において岩波のナショナリズムはデモクラティックな性格を持ったものであったといえる。

また、岩波のナショナリズムの主張は、つねに出版人としての使命感に支えられたものとして提出された。「私が文化戦線に立つ一兵卒として常に念願して止まざるは知識を世界に求むる明治維新御誓文の御遺訓を体して學術の進展に寸尺の寄与をなし君国に報い奉らんとする唯一事である」⁴⁰と岩波は言うのである。こちらはまさに五箇条の御誓文の

「智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ」を基準にするのである。彼は自国を誇りに思い、読者に自国を理解させること求めるとともに、他国を理解させることに努めていた。特に彼は中国への理解を呼び掛けていた。「大陸認識とか東亜協同体とか、言はれて居るが支那についての知識なども信用の置けるものは極めて少いやうだ、出版物で碌なものが見当たらないのは出版者の不見識もあるにはあらうが、しっかりした筆者が居ないからだ」⁴¹と岩波は指摘している。そうするとここでの「知識」とは中国の歴史文化について知ることのみならず、中国の現状や日中関係を判別すべきということになる。このように岩波は戦時中言論統制の状況において言論の育成、及び暢達を優先課題としたのであった。

4.4.3 ナショナル・デモクラットとしての岩波茂雄

岩波は国家と国民の精神的支柱として、五箇条の御誓文を挙げた。五箇条の御誓文の性格について大塚桂は「デモクラシー、福祉、共和主義的側面、などの理念が盛り込まれている」と「第三条の趣旨は、その後の家族国家観、天皇制国家の中心的理念として意味合いをもたされる」と解説している。⁴² 岩波の五箇条の御誓文による思想にも確かにデモクラシーとナショナリズムという二つの側面がある。

岩波茂雄の遺文には、満州事変直後の日本の軍事行動に対する言説は見当たらない。そのことと「満州国」を一つの国と視し、王道楽土を建設するという彼の言説を合わせて考えると、その時点では岩波がむしろ日本の侵略性を無視していたと言える。そうした岩波の思想は日本国に対して過度に自負を持った国家主義と見なさざるを得ない。

一方で、日中戦争が始まった後岩波は次第に国の方針に対して疑問を呈すことになった。平和を希求する岩波は武力日本ではなく、文化日本に憧れるようになる。そして戦争、体制への抵抗姿勢を示した岩波は言論の暢達と知識の普及のために彼なりの出版社者の使命感に基づく出版活動を進めたのだった。ここには岩波のデモクラットとしての姿勢を窺い知ることができるのである。

おわりに

岩波はかつて言った。「我々の祖先は千数百年に涉って孔子や老子や荘子の原典に親しんで来て、彼等の教説は今日でも私たちの日常生活の中にいろいろな形で溶けこんでいる

のである」。⁴³ また、彼は中国人留学生や中国の友人を少しのためらいもなく援助した。岩波は日清戦争後中国を侮蔑するという一般日本人の対中国認識と違い、客観的に中国の現状を日本に向けて紹介しようと努力した。例えば、中国の古典文化を重視し、中国の古典の出版に力を入れた。『思想』の特集「支那号」の中で中国国内革命を紹介したことから彼の中国民族運動に対する客観的態度と理解のあり方がうかがわれる。また、彼は職業政治家と違い、出版人の視点から独特な対中国認識を持っていた。「岩波新書」はその一例であり、中国に関わる諸問題について、当時の日本人が認識しておかなければならないテーマを扱った。しかし一方で、当時の彼が国家政策から受けた影響と「日本は東洋民族を指導する」、「欧米人の圧迫から解放する」、「日本の発展を求める」など日本中心主義的観点を有していたことは見逃してはならないだろう。中島岳志は「岩波は言論の自由を踏みにじる国粋主義者と」戦い、「専制政治を打破する国民主権の主張」を繰り返すというリベラルの肖像と「五箇条の御誓文」を布告した「明治天皇の遺志を継ぐ」というナショナリストの肖像を描き、「リベラル」と「ナショナリスト」という矛盾する性質を合わせもった人物として岩波を捉えたが、⁴⁴ 本論においては、岩波が客観的に中国の現状を日本に向けて紹介し、出版事業を展開した行為の積極的な意味と、その行為を根源的に支える思想として「五箇条の御誓文」に盛り込まれているアジア連帯論と日本盟主論への傾倒を明らかにすることができた。このことに彼があくまでも政治に期待して自らの理想を現実に実現しようとした点にこそ彼の「リベラル」な態度を見出すべきと考えられる。しかし、彼が日本中心主義思想を持っていたということは一方の事実であり、この点は事後的に見て明らかな矛盾を呈するものとなっている。言い換えると、これは彼の思想の限界だと考えられ、前項が書いた中国を傷つけてはいけないと思うにもかかわらず、「日中提携」に基づく日中関係の発展を主張し、戦争の侵略的な性質を深刻に認識することがなかったのはその現れであったと考えられる。

岩波茂雄は出版人として相手国の歴史文化を尊重する態度を持ち、政治、経済、芸術を含め多様な面から中国を日本に向けて紹介し、一方で彼は積極的に日中戦争を平和的解決する可能性を探った。岩波の思想の中で平和主義が根強く存在し続けていたことも事実である。前者の点において日中文化交流のために大きな功績をあげたといえる。しかし、彼の主張、行為には日本中心主義に基づく「日中提携」に影響された面もあり、「興

亜論」、「日中提携」という主張に立った時は平等な立場を前提にした文化交流はたちまち不可能になるということを彼は理解できなかったのである。これこそ彼の思想の限界だと言えるであろう。

註

¹ 「古典の普及 支那をも尊重 新世界観の創造へ」（『国民新聞』 1938年9月19日）（『岩波茂雄文集 2 1936-1941年』（岩波書店 2017年2月））。

² 中島岳志『岩波茂雄—リベラル・ナショナリストの肖像』（岩波書店 2013年9月）参照。

³ 前掲注2 同書 167頁。

⁴ 戸叶勝也『レクラム百科文庫—ドイツ近代文化史の一側面』（朝文社 1995年12月） 31頁。

⁵ 前掲注4 同書 31頁。

⁶ 前掲注1。

⁷ 「時局に際し同業に告ぐ」（1932年10月）（『岩波茂雄文集 1 1898-1935年』（岩波書店 2017年1月））。

⁸ 那珂通世著、和田清訳『支那通史』（岩波書店 1938年9月）。

⁹ 「日本の出版事業について」（1941年秋）（『岩波茂雄文集 2 1936-1941年』（岩波書店 2017年2月））。

¹⁰ 「貴族院質問事項」（1945年3月）（『岩波茂雄文集 3 1942-1946年』（岩波書店 2017年3月））。

¹¹ 小林勇『惜襟荘主人—一つの岩波茂雄伝』（講談社 1993年9月） 234頁。

¹² 「岩波新書を刊行するに際して」（『思想』 第198号 1938年11月）（『岩波茂雄文集 2 1936-1941年』（岩波書店 2017年2月））。

¹³ 鹿野政直『岩波新書の歴史』（岩波書店 2006年5月） 7頁。

¹⁴ 衛藤利夫訳述『満州生活三十年—奉天の聖者「クリスティ」の思出』（大亜細亜建設社 1935年）。

¹⁵ 中島義勝「戦争の中の岩波新書」（『日本出版史料 3—制度・実態・人』（日本出版学会・出版教育研究所 1997年11月））。

¹⁶ 「銃後の青年に対して」（1938年8月）（『岩波茂雄文集 2 1936-1941年』（岩波書店 2017年2月））。

¹⁷ クリスティ著、矢内原忠雄訳『奉天三十年』（岩波書店 1938年11月） 9頁。

¹⁸ 「日本の植民地主義者たちにクリスティの経験に学ばせ、東北の人々の心を征服し、中国の人々の心を征服し、東北および中国全土に王道楽土を建設するという見せかけの理想を実現させる」（筆者訳）

¹⁹ クリスティ著、張士尊・信丹娜訳『奉天三十年（1883-1913）—杜格尔德・克里斯蒂の経歴と回憶』（湖北長江出版集団、湖北人民出版社 2007年2月）。

²⁰ 「時局下の雑誌観」（『新聞之新聞』 1938年9月21日）（『岩波茂雄文集 2 1936-1941年』（岩波書店 2017年2月））。

²¹ 『思想』の性格について、1926年5月第55号の巻末に「我邦における最高教養雑誌としての使命」という言葉が見え、同年9月第59号の奥付頁にも『思想』特集号発行に就て」という文章があり、そこでも、「有識者の最高教養機関」という言葉が見える。

²² 「特集支那号」（『思想』 岩波書店 1929年7月）。

²³ 安倍能成『岩波茂雄伝』（岩波書店 2012年12月） 307頁。

²⁴ テツオ・ナジタ著、坂野潤治訳『明治維新の遺産』（講談社 2013年8月） 122頁。

²⁵ 具体的には、以下の五箇条となっている。

「一 広ク会議ヲ興シ万機公論ニ決スヘシ

一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ経綸ヲ行フヘシ

一 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメン事ヲ要ス

一 旧來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ

一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ」

²⁶ 前掲注24 同書 122頁。

²⁷ 大塚桂「五箇条の御誓文・再考」（『駒澤大學法學部研究紀要』 (64) 2006年2月）、川田敬一「『五箇条の御誓文』再考」（『日本学研究』 (10) 2007年12月）

²⁸ 「黒色事件を直視して」（『東京朝日新聞』長野版 1937年1月16日）（『岩波茂雄文集 2 1936-1941年』（岩波書店 2017年2月））。

²⁹ 『外交年表並主要文書 下巻』を参照する。（外務省編『外交年表並主要文書 下巻』（原書房 1966年1月））。

³⁰ 前掲注29。

³¹ 「年賀状」（1937年1月1日）（『岩波茂雄文集 2 1936-1941年』（岩波書店 2017年2月））。

³² 前掲注 31。

³³ 「何を改革すべきか」(『中央公論』 第 54 年第 5 号 1939 年 5 月)(『岩波茂雄文集 2 1936-1941 年』(岩波書店 2017 年 2 月))。

³⁴ 近代日本のアジア観におけるアジア連帯論と日本盟主論については、岡本幸治『近代日本のアジア観』(ミネルヴァ書房 1998 年 5 月)、和田守「近代日本のアジア認識—連帯論と盟主論について」(『政治思想研究』 (4) 2004 年 5 月)、劉峰「近代日本の「アジア主義」再考—研究史と課題の整理」(『千葉大学人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』 (264) 2013 年 2 月)などを参照する。

³⁵ 1937 年 9 月から施行されることになり、日中戦争長期化のもと運動のさらなる強化の必要から、1939 年 2 月には運動強化方策が決定された。

³⁶ 日本の侵略を正当化するために、1940 年 8 月第 2 次近衛内閣が発した基本国策要綱に「皇国ノ国是ハ八紘ヲ一宇トスル肇国ノ大精神ニ基キ世界平和ノ確立ヲ招来スルコトヲ以テ根本トシ」と記され、「八紘一宇」が大東亜新秩序を掲げた際にスローガンとして使われ始めた。

³⁷ 「五箇条の御誓文 この精神を体得せよ」(『新聞之新聞』1939 年 5 月 3 日)(『岩波茂雄文集 2 1936-1941 年』(岩波書店 2017 年 2 月))。

³⁸ 「国民精神総動員の強化に関する意見」(1939 年 3 月)(『岩波茂雄文集 2 1936-1941 年』(岩波書店 2017 年 2 月))。

³⁹ 「安部磯雄推薦状」「三輪寿壮推薦状」(1937 年 4 月)(『岩波茂雄文集 2 1936-1941 年』(岩波書店 2017 年 2 月))。

⁴⁰ 「風樹会設立の趣旨」(1940 年 10 月 30 日)(『岩波茂雄文集 2 1936-1941 年』(岩波書店 2017 年 2 月))。

⁴¹ 前掲注 37。

⁴² 大塚桂「五箇条の御誓文・再考」(『駒澤大学法學部研究紀要』 (64) 2006 年 2 月)

⁴³ 前掲注 9。

⁴⁴ 中島岳志『岩波茂雄—リベラル・ナショナリストの肖像』(岩波書店 2013 年 9 月)。

第2部

1920、30年代日本における対中国認識の 共通点—日本における新しい中国への注目

中央公論社、改造社、岩波書店の対中国認識の検討を振り返ると、一つの共通点があることに気づく。それは、現代の中国、あるいは新しい中国への注目である。雑誌『中央公論』は中国の学生運動に注目し、同情・支持を示し、中国の思想の変化への注目を呼び掛けている。『改造』は「現代支那号」をはじめ、中国の新しい様相を目の当たりにして編集方針を立て、現代中国の実態を日本の読者に紹介しようとした。岩波書店が刊行した岩波新書は読者が現下最も注目しなければならない問題を扱うことを目指す企画であったが、その創刊した当初は、日本が中国との間で全面戦争に突入していたことを背景に中国に関係ある様々な問題を扱った。

実は現代の中国、あるいは新しい中国に注目していたメディアはこの3メディアだけではない。例えば、岡本隆司は『近代日本の中国観 石橋湛山・内藤湖南から谷川道夫まで』で「青年支那」という用語を使い、「ヤング・チャイナ」に同情している人として石橋湛山と吉野作造を取り上げている。¹ それに1920年12月5日の『大阪毎日新聞』は、ラッセルの「支那の第一印象」を掲載し、その冒頭において、「『ベルトラン・ラッセル』の名は今や新文化、新思想に憧憬する隣邦の若き人々に種々の響きを与えて居る」という解説を加えている。さらには、ラッセルが中国を訪れたことについてだけでなく、新旧二つの勢力が対立している中国の現状について、関心を持っていたことも重要である。そして、その二つの関心は、1921年3月から7月にかけて、芥川龍之介を大阪毎日新聞社の特派員として中国に派遣することにも繋がっていく。1921年3月31日に「支那印象

記 新人の眼に映じた新しき支那 近日の紙上より掲載の筈」のタイトルで、掲載された予告記事からは、その派遣の理由が上記の二つの関心に基づくものであったことを知るることができる。

「支那は世界の謎として最も興味の深い国である。古き支那が老樹の如く横はって居る側に、新しき支那は嫩草の如く伸びんとして居る。政治、風俗、思想、有ゆる方面に支那固有の文化が、新世界の夫と相交錯する所に支那の興味はある。新人ラッセル氏やデュウイ教授の現に支那にあるのも、またベルグソン教授の遠からず海を越えて来ようとするのも、やがて此の点に心を牽かるゝに外ならぬ。吾が社はこゝに見る所あり、近日の紙上より芥川龍之介氏の『支那印象記』を掲載する。芥川氏は現代文壇の第一人者、新興文藝の代表的作家であると共に、支那趣味の愛好者としても亦世間に知られて居る。氏は今筆を載せて上海に在り、江南一帯の花を狩り尽くした後は、やがて春をもとめて北京に上るべく、行々想を自然の風物に寄せると共に、交りを彼の土の新人に結びて、努めて若き支那の面目を観察しようとして居る。新人の見たる支那が、如何に新様と新意に饒なるものであるかは唯本篇に依ってのみ見られよう。」

この記事には、別種の観点から注目されてきた「表現」がある。それは、中国について「新しき支那」、「若き支那」と言い表している点である。では、実際に芥川によって、この「新しき支那」、「若き支那」がどのように語られたのか。「江南遊記」（1922年1月1日から2月13日まで『大阪毎日新聞』に連載）は、芥川が杭州・蘇州・揚州・南京に遊んだ記録である。「上海遊記」（1921年8月17日から9月12日まで『大阪毎日新聞』に連載）には、「若き支那」の代表者として李人傑を取り上げ、「李氏は年未二十八歳、信条よりすれば社会主義者、上海に於ける「若き支那」を代表すべき一人なり」とも述べている。² また、北京訪問を記述する「北京日記抄」（1925年6月号の『改造』に掲載）のなかに、辜鴻銘との会見を記述した際、辜鴻銘について「されどヤング・チャイニイズと異なり、西洋の文明を買ひ冠らず」と述べ、「ヤング・チャイニイズ」という言葉を用い

て、西洋の文明について多くのことを学ぼうとする「新人」と帝制を擁護する辜の異なるところについて言及している。³ こうした「新しき支那」、若き支那」についてはすでにくつかの先行研究が取り上げている。例えば、単援朝は1974年筑摩書房版の『芥川龍之介全集』における「若き支那」に対する解釈から出発し、李人傑と「少年中国学会」（英語名 THE YOUNG CHINA ASSOCIATION）の関わりについて考察している。そこで、単援朝は李人傑が「少年中国学会」とは関係がなく、むしろ「共産党を「代表すべき一人」といったほうが真実である」と主張、芥川が李人傑に対して「若き支那」と称する理由は「表現上の習慣性や読者層への配慮」と「検閲対策のひとつ」だと結論づけている。⁴ また、王書璋は「上海遊記」の「徐家匯」に触れ、大阪毎日新聞社の予告記事を踏まえながら、「徐家匯」の創作目的を「若き支那の面目として描いた」と推測している。⁵ そして、周芷冰は芥川が見出そうとするのは「革命の胎動をも強く感じられる、動きつつある」、新しい上海だったと結論づけている。⁶

芥川龍之介の遊記に見られる「支那」の表象は芥川の研究者にこれまで繰り返し研究されてきたが、そのひとつである「新しき支那」、「若き支那」についての分析は以上のようにまだ十分になされていないといってもいい状況にある。それを明らかにするためには、改めて芥川龍之介だけではなく、当時の日本のメディア言説におけるそれらの語られ方に注目する必要があるだろう。

註

¹ 岡本隆司『近代日本の中国観 石橋湛山・内藤湖南から谷川道夫まで』（講談社 2018年7月） 29頁参照。

² 芥川龍之介「上海遊記」（『大阪毎日新聞』 1921年8月17日～9月21日）（『芥川龍之介全集 第8巻』（岩波書店 1996年10月） 53頁）。

³ 芥川龍之介「北京日記抄」（『改造』 1925年6月号）（『芥川龍之介全集 第12巻』（岩波書店 1996年10月） 210頁）。

⁴ 単援朝「芥川龍之介研究—中国文学との関わりを中心に」（筑波大学大学院文芸・言語研究科学位論文 1991年10月）。

⁵ 王書璋「『上海遊記』の「徐家匯」—キリスト教受容史に芥川の見出した「近代」（『千葉大学社会文化科学研究科プロジェクト報告書』（102） 2005年3月）。

⁶ 周芷冰「芥川龍之介「上海遊記」論：「私」が見た「新しい」上海」（『人文論究』 2016年5月）。

第5章

「ヤング・チャイナ」に注目して

「若き支那」について、筑摩書房版の『芥川龍之介全集』（1974年6月）は「Young China」と内外から呼ばれた中国の新勢力」と解釈している。また、岩波書店版の『芥川龍之介全集』（1996年6月）は「中国の若い知識人、学生を中心とした五・四運動当時の文化学術団体「少年中国学会」の英語名「Young China」（THE YOUNG CHINA ASSOCIATION）を念頭に置く表現」と解釈している。日本では、「青年支那」は吉野作造が1916年3月号の『中央公論』（「対支外交根本策の決定に関する日本政客の昏迷」）で取り上げた概念であった。¹ 吉野は「青年支那」の努力を評価し、「自治主義」と「聯省主義」による中国の真の平和統一の実現の期待を寄せ、中国の統一国家の構想をしていたのである。言い換えると、吉野のように「ヤング・チャイナ」への注目から彼の中国統合の構想を読み取れるのである。金山泰志は「日清戦争に際し、国家主導的側面の強い小学校教育では、中国への否定的言説に対し警鐘が鳴らされていた」のに対し、「メディアで否定的評価を伴った中国が盛んに語られていた」と述べ、「メディアというものは国家に統制され、従属しているだけの存在ではない」と指摘している。² したがって、メディアの視点から「ヤング・チャイナ」への注目を分析することを通じて、メディアが自発的どのような期待を選択したのかを導き出すことが可能となるはずである。以下では、ラッセルが『中国の問題』（1922年）の中で「ヤング・チャイナ」として称賛した胡適と革命青年のひとりと目された戴季陶を中心に、「ヤング・チャイナ」の紹介を通して、どのようにメディアが中国を見ていたのかを分析する。

5.1 胡適と東西文明の論争

1926年7月号の『改造』にはラッセルが『中国の問題』の中で「ヤング・チャイナ」³として称賛した胡適の「近代西洋文明に対する吾人の態度」が掲載されている。

「歐洲大戦の影響として一部の西洋人は近世の科学的文化に対して一種の嫌悪的反感を抱く様になり、従て西洋の学者中にも東方の精神文明を崇拜するやうな議論を為す者を時々耳にするのである。併しこの種の議論は本来ただ一時の病的心理に出づるものであるにも拘らず、たまたまこれが東方民族の誇大狂に投合し、茲に東方の旧勢力は少からざる気焰を挙ぐるに至ったのである。」

そのうえで、胡適は続けて東西文明に関する彼の理解を述べている。

「東方文明の最大特色は「足ることを知る」にあり、西洋文明の最大特色は「足ることを知らざる」にある、足ることを知る東洋人は自ら簡陋の生活に安ずる故に、物質的享樂の向上を求めず、自ら愚昧に安じ、自ら「不識不知」に安ずる故に、真理の発見や技芸機械の発明に注意を拂はうとしない、自ら現在に環境と運命とに安ずる故に、自然を征服することを想はずして、唯天を楽しみ命に安ずることを想ひ、制度の改革を想はずして、唯分に安じ己を守ることを図り、革命を想はずして、唯順民たらんことを願ふのである。」

彼は近年の西洋における物質文明に対し精神文明を尊重しようという風潮を批判している。一方、彼は西洋文明の最大の特色は「足ることを知らざる」にあり、「足ることを知らざる」ことにより、真理を追求し、物質環境を変え、社会改造を実現することができる点にあると考える。彼は東洋の「楽天」、「安命」、「知足」、「安貧」などの精神を批判し、西洋文明の科学精神を称賛した。当時、第一次世界大戦を経て、ラッセルのような知識人

が近代科学に対して反感を持つようになり、東洋の精神文明に解決策を求めていた。胡適がこの文章を書いたのは、東西文明に関する理解を述べるとともに、ラッセル流の物質的な文明と見なされる西洋文明を貶め、精神的な文明と見なされる東洋文明を推賞する風潮を批判するためであったのである。

胡適の観点をめぐっては、中国国内において論争が盛んに行われることになった。希祖という署名のある「我們对于西洋近代文明的態度」⁴は、胡適の観点を批判し、胡適が紹介する西洋の近代的資産階級文明は腐ってやがて滅亡する文明であると主張した。東西文化調和論を持っていた常燕生は東西文明について対立するのではないとより明確に論述し、両者は進行していく段階が異なっているゆえに、いわゆる東西文明の相違は古今文化の相違と同じであると主張した。⁵ また東西文化調和論を批判し、西洋風を取り入れることを支持していた張東蓀は「西方文明与中国」⁶の中で胡適の観点を称賛し、西洋文明を吸収し、同時に西洋文明の欠陥を見出す必要があると主張した。この文章は胡適の文章の不足部分を補うものであるといえる。

また、胡適の東西文明論に関する文章が掲載される前に、1922年8月号の『改造』にはすでにラッセルの「支那文明と西洋」と題する東西文明論を討論する文章が掲載されていた。「支那文明と西洋」の中でラッセルは中国の儒教、道教、仏教と西洋の宗教を比較しながら、中国の文明と西洋の文明の一つの大きな相違点は科学であると述べた。そして、最後に「東西の接触は双方に有益である」と主張した。近代の中国文明が西洋文明に劣るという一般的な認識と違い、ラッセルはむしろ西洋文明を批判するという姿勢をとっていたのである。

「支那人の寛容は、歐洲人が自国での経験から推して、到底想像し難い底のものであると私は考へる。吾々は自分らの祖先よりは寛大なので、自分達は寛大な者だと想像する。然し吾々は尚ほ政治的及び社会的迫害を行ひ、更に其上、吾々の文明と吾々の生活方法とは、他のいかなるものよりも無限に優れたものであると堅く確信し、そのために支那人のやうな国民に出遭ふとき、吾々が彼等に対してなし得る最も親切なことは、彼等を吾々自身のやうにすることだと考へるのである。私は此

の考へは非常な間違だと信ずる。一般の支那人は、惨憺たる、貧苦の中に居ても、一般英国人より幸福である、それは支那の国民は吾が英国人よりも人道的な、文明的な考へ方の上に立って居るので、より幸福なのだと私は信ずる。動揺と喧嘩好きとは、表面に現れた災害を醸すに留まらず、吾々の生活を不平満々たらしめ、美を享樂する能力を奪ひ、瞑想に伴ふ美德を不可能にする。此の点に於ては、過去百年の間に、吾々は急激に悪くなってしまった。」

中国の寛容、平和的、忍耐強いなどの美德を称賛するラッセルはまさに古き中国に理想を見出している。

そもそも文明論は欧米で研究され始めた概念である。福沢諭吉は「civilization」を「文明」と訳し、西洋文明と日本文明を比較した。やがて文明開化期の文明論は福沢の紹介により、ナショナリズム意識と結びつくという特徴を呈する。1920年代に入って、明治ナショナリズムの意識が解体して、大正デモクラシーの風潮が登場し、また「社会問題」、「労働問題」が活発化すると、文明をめぐる論争は社会評論や時局解説の性格を帯びるに至った。

一方、近代中国の場合、梁啓超により日本経由で「文明」という価値観が翻訳、紹介された。五四運動は中国の民族運動であると同時に、社会主義運動の出発点でもある。五四運動を経て、旧来の文化と西洋のものが激突する状況下で、東西文明をめぐる、中国がどのような文化を基盤にすべきか、どのような道を選んだらいいのかについての論争が展開されることになった。特に1920年前後、デューイ、ラッセルなどの来華により、中国の知識人や若者の間で文明に関する論争が一層盛んに行われることになった。

ちょうどその時期明治以来欧米に追いつくことを目標にし続けてきた日本では、大正期に入ると文学・芸術を中心に中国を中心とした東洋文化への関心が高まり、いわゆる「支那趣味」が広まっていた。中国の古典世界への憧れがよみがえってきたのである。そこで折から中国を近距離から観察する機会を持ったラッセルに一部の日本人が関心を寄せるといふ現象も見られた。1920年12月5日に『大阪毎日新聞』にラッセルの「支那の第一印象」が掲載されたことはそのことをよく表している事例である。さらに、日本におい

て西洋文明より東洋文明への関心が高まったのは自ら東洋を率い、西洋に対抗する目的で、中国の古典世界への憧れがよみがえってきたのではないかと考えられる。しかし、1920年代の中国においては、新旧文化の優劣をめぐる論争も続いていて、むしろ近代西洋思想の新思想で武装し、国家主権の回復することを目標とした。ここには中国の民族自決の目標と日本の東洋を率いて西洋に対抗する目標、この二つの目標のずれを見出すことができるのである。

5.2 革命青年戴季陶

革命青年のひとり目された戴季陶は従来より日本で注目されていた。例えば、1925年3月号の『改造』はすでに戴季陶の寄稿を受けている。加えて戴季陶が1927年2月から3月にかけて日本を訪問した際に、改造社の社長山本実彦は戴季陶を招聘し、福田徳三、後藤新平と合わせて三人で座談会を開いた。それは後に1927年4月号の『改造』に「日・支・露問題討議」と題してその内容が掲載されている。また、本論の第2章で紹介したように同年同月号の『中央公論』にも「無産政党に代りて支那南方政府代表者に告ぐ」と題する巻頭言と戴季陶の「中国革命運動の歴史的考察」が載せられた。戴季陶の訪日の目的について、張玉萍⁷、嵯峨隆⁸など学者は蒋介石が日本朝野の国民革命に対する理解と協力を求めるために戴季陶を派遣したと指摘している。では、日本人、日本社会はどのように戴季陶の訪日を見ていたのか、日本のメディアは戴季陶を通して、新しい中国のどのような側面を注目していたのか。本節は主に座談会「日・支・露問題討議」に着目し、戴季陶の主張と日本の世論のずれ、および各言説に現れた中国に対する期待と疑問から中国側と日本側の時局判断のずれを浮き彫りにする。

戴季陶は国民革命に対する理解と協力を求めるという目的を抱いて日本に来た。このような目的に基づき、戴は座談会「日・支・露問題討議」の最後に以下のような旨を附記した。

「支那国民とロシア国民との親交は不平等条約撤廃の上に建立したのであって全世界の国家が不平等条約を以って支那を束縛して居る以上は他の国民と平等なる親

交を建立する仕様がなない。日本と支那との関係は歴史的、文化上血統上の関係を充分に持って居り特に近代に於いては経済的需要供給の関係に由って密切の度を加へて居る。若し両国間に於ける親交を真に建立せむと欲せば不平等条約の撤廃より始まるではないのか、此れは支那国民の日本に対する親切なる希望である。

政治組織、又社会組織が行きつまと革命が興る、支那民族は南京条約以来、凡て行きつまって仕舞った、故に革命が興るのは自然の結果である、革命の完全に成功するでなければ決して中止し得るものでない。今支那の革命の力は中国国民党に由って組織し指揮して居る、全国が中国国民党に由って完全に統一する日がもう既に来つつある。

今日全世界の問題は民族問題、民権問題、民生問題以外にない此れに根本的而して統一的解決を与えるのは三民主義の原則である国民党の奉持して居る三民主義は一個の最も事実的實際的革命理論にして国家又社会建設の原則である。其の實際の建設政策は中山先生の建国方略に書してある、諸君の一讀を乞ふ。」⁹

一方で改造社は「革命政府の種類、及露西亜と、日本との関係」¹⁰について強い関心を示していたのであった。戴季陶の主張と改造社の関心との間ずれがありながら座談会が進められていったと言えよう。以下では、「中国とロシア・日本との関係」、「革命政府の種類」、「三民主義について」の三つの側面からこのずれを探っていく。

①中国とロシア・日本との関係

当時の日本における国民革命軍に対する評価は、ソ連に操られた勢力だろうという認識が強かった。福田徳三は広東国民政府の位置づけについて「労農共和国連邦の一員」ではないかという質問を投げかけている。戴は「不平等条約を撤廃した露西亜に対しては好感を持ち、それと同時に親交を結」んだからと解釈し、中国の国民政府に対するロシア革命の影響を認めつつ、「中日露の自由なる立場の上に於て」親交を結ぶと言う一方で、不平等条約の撤廃と日中両国の親交が日本の帝国主義によって阻害されていると声明した。これに対して、福田は「日本の発展が帝国主義的、利権侵略的であるとするならば、決し

て真正確固たる日支の親交は望み得られないものではないか」と悲観的な見解を示したのだった。

②革命政府の種類

前述した福田の「労農共和国連邦の一員」という断定は、広東政府＝社会主義・共産主義、革命政府の当面の課題は労働問題だと認識していたことに由来すると考えられる。しかし、戴季陶が座談会の最後の附記で強調したように、革命政府の当面の課題は中国を国際的圧迫から解放すること、すなわち南京条約以来の不平等条約の撤廃と中国の統一の実現するのであった。

③三民主義について

前述したように、戴季陶は革命政府の当面の課題は不平等条約の撤廃と中国の統一の実現すること、すなわち三民主義の民族問題、特に民族の対外自立問題を一番重視していた。しかも後藤新平に中国の状態について尋ねられた時、戴は中国の目標は「先づ第一に国家の独立を全うすると云ふことになり、中国の状態は「国家の独立を全うすると云ふごく単純」で、「多数の人民の政治的自覚、政治的、意識的に、革命的に生きて来ると云ふ組織と団結を与へつつあると云ふのが、現在の国民党のやって居る仕事」であり、「此革命が自然不平等条約の撤廃と云ふことに向かって進み、国際間に於ける国家の独立を全うすると云ふ方向に向かって進」むと答えている。戴季陶によれば、中国の国家の建設において不可欠なのは多数の人民が団結して、列強からおしつけられた不平等条約や圧迫から自分たちを解放することなのである。これはまさに孫文の民族主義理論を援用して、列強に対抗し、民族統一と独立を目指すという主張についての解説であった。

戴季陶が二番目に強調したのは民生の問題であった。座談会の初めに戴は日本の社会運動に対して興味を示した。そのうえで中国の農民運動が「支那の民衆運動の基調になって居る一つの運動である。将来支那の国家的統一の上に、又総ての社会建設の上に、農民運動、農民の組織と農民生活改善の要求と云ふものは、総ての問題の中心にな」と中国の民生問題を社会主義の問題とみなし、中国の統一が実現すれば、次に解決すべき問題は民生の問題だと述べた。

しかし、後藤によると、中国が当面注視すべき問題は経済だと主張し、特に中国で阿片問題の解決により、財政問題が解決できると断定した。この観点に対して戴は中国を「経済的復活させるには、一番必要とするのは関税問題」だと言い、中国の関税自主権回復の必要性＝不平等条約の撤廃の必要性を強調した。

以上の戴と日本人との間のやりとりから、両者の中国情勢に関する時局判断にずれがあることを指摘できる。戴季陶は日本に対して不平等条約を撤廃するという期待を持ち、国民革命軍が中国の統一を達成する強い意志を伝えようとしていた。一方で、日本側は中国の安定、特に民生問題の解決を重視していた。この背景には日本が中国政府内へのソ連の勢力の浸透と革命政府の暴力共産化に対する憂慮があっただろうことが想像できる。

5.3 中国への期待と中国認識のずれ—むすびにかえて

以上、「ヤング・チャイナ」として称賛した胡適と革命青年のひとり目された戴季陶を取り上げ、日本のメディアが「ヤング・チャイナ」の紹介を通して、どのように中国の見ていたのかを考察した。

胡適の「近代西洋文明に対する吾人の態度」を収録したのは第3章で紹介した『改造』の特集号「現代支那号」である。第3章で指摘したように、「現代支那号」を刊行したのは、中国の新しい様相を目の当たりにして、現代中国を日本の読者に紹介することを主目的としているので、胡適の「近代西洋文明に対する吾人の態度」を掲載したのも中国の思想文化の発展と変革に関心を寄せ、その変革を担う中国の若い知識人に期待を与えていたからだと思える。また、東西文化論争は国民革命の進行とともに、終息への道を辿り、1920 後半から日本のメディアは中国の革命運動に目を向けた。革命青年である戴季陶の文章を掲載し、中国の革命運動に注目したのは中国の平和統一の実現に期待を寄せたからだといえるであろう。

しかし、中国の主張と日本の中国への期待との間にはずれがある。中国において新旧文化の優劣をめぐる論争が行われたのは近代西洋文明、あるいは、東西文明の調和による国と民族の救済を求めていたからである。この点から考えて、中国のナショナリズムの要求を無視することはできない。一方で、近代日本における東西文明調和論はアジア連帯論と繋がっていた。言い換えると、東西文明の調和によって、アジア、特に日本を中心と

するアジア対欧米という日本の盟主論の色彩が強かったのである。またラッセルが「支那文明と西洋」を書いたのは第一次世界大戦により、西洋文化が没落したという危機意識を契機としたものであった。『改造』がラッセルの「支那文明と西洋」を掲載したのは当時の日本における政治論・文化論的東洋回帰ともいべき現象があったためだとも考えられる。

加えて、日本は中国の革命運動への期待を持っていたにもかかわらず、急進的な労農運動を排斥した。それに中国側は不平等条約を撤廃するという期待を持っていた一方で、日本側は中国の安定、特に民生問題の解決を重視していた。つまり、日本は中国の国内の矛盾に目を向け、官僚や軍閥といった特権なる貴族の階級に対する労働者や農民の庶民階級の闘争を革命の主目的と考えた。しかし、当時の中国が当面する最も重大な課題は関税自主権の回復であり、それを無視した日本は自国の利権を結果として最優先したのではないかと考えられる。

註

¹ 岡本隆司『近代日本の中国観 石橋湛山・内藤湖南から谷川道夫まで』（講談社 2018年7月） 29頁。

² 金山泰志著『明治期日本における民衆の中国観』（芙蓉書房 2014年2月） 255頁。

³ Bertrand Arthur William Russell『The Problem of China』（London, Allen & Unwin 1922） 250頁。

⁴ 希祖「我們对于西洋近代文明的態度」（『政治生活』 1926年7月）（『五四前后東西文化問題論戰文選』 中国社会科学出版社 1989年3月）。

⁵ 常燕生「東西文化問題質胡適之先生——讀《我們对于西洋近代文明的態度》」（『現代評論』 1926年8・9月）（『五四前后東西文化問題論戰文選』 中国社会科学出版社 1989年3月）。

⁶ 張東蓀「西方文明与中国」（『東方雜誌』 1926年12月）（『五四前后東西文化問題論戰文選』 中国社会科学出版社 1989年3月）。

⁷ 張玉萍『戴季陶と近代日本』（法政大学出版局 2011年2月）。

⁸ 嵯峨隆「国民革命時期における戴季陶の対日観について—『日本論』の再検討を通して」（『法学研究』 2002年1月）。

⁹ 「日・支・露問題討議」（『改造』 1927年4月号）。

¹⁰ 前掲注9。

第6章

「新中国」について

辛亥革命と五四運動を経て、1920年代の中国は大きな変革期を迎えた。この新しい中国とその変革の担い手として新思想を持つ青年たちが日本から注目されていたことは前で述べたとおりである。例えば第3章で取り上げた雑誌『改造』は新しい中国への関心を持ち続け、特に1924年に開かれた座談会で中国の革命運動の一環としての「大学生を中心としてヤング・チャイニスの運動」を取り上げ、中国の革命青年たちの自覚性を称賛した（「対支国策討議」1924年11月号『改造』）。『改造』のみならず、1920年代は大正デモクラシー、ロシア革命の影響や、いわゆる「支那趣味」の流行等といった政治状況、世相に応じて日本メディアの中国に対する関心が多方面にわたって強まった時期であった。『中央公論』と『改造』を例として、満州事変までに両誌に掲載された中国の新しい様相に言及する論文は下記の通りである。

表 6.1: 満州事変までに両誌に中国の新しい様相を言及する論文

作者	題目	掲載誌及び刊行日付
(海外新潮)	「支那の覚醒」	『中央公論』1906年3月号
青柳篤恒	「新支那を紹介す」	『中央公論』1909年6月号
茅原華山	「新しく見たる新しき支那」	『中央公論』1913年8月号
吉野作造	「対支外交根本策の決定に関する日本政客の昏迷」	『中央公論』1916年3月号
パートランド・ラッセル	「支那の国際的地位を論ず」	『改造』1922年4月号
(座談会)	「対支国策討議」	『改造』1924年10月号
(巻頭言)	「支那新人の「新支那運動」」	『改造』1925年7月号
小村俊三郎	「支那の対外運動とその立体的考察」	『中央公論』1925年9月号
松井等	「支那問題の重点」	『中央公論』1925年9月号

作者	題目	掲載誌及び刊行日付
(特集)	「(夏季増刊号「現代支那号」)」	『改造』1926年5月号
(特集)	「お前(日本)は支那に何を望むか」	『中央公論』1927年10月号
御手洗辰雄	「新支那を観る」	『改造』1929年4月号
室伏高信	「新支那論」	『中央公論』1930年9月号
室伏高信	「新支那思想とは何か」	『改造』1931年1月号
駒井徳三	「新支那建設秘録」	『中央公論』1931年4月号・5月号

調査したところ、1906年の『中央公論』はすでに「覚醒せる」中国に言及し、「日本に送られたる若き支那学生の数千は日本政府に反抗して続々帰国の途に就く」と中国の学生運動に目を向けていた。¹ 第2章と第3章の結果を合わせてみると、清朝最末期以来日本のジャーナリズムは中国の若い知識人たちの動向に常に関心を持ち続けていたことが分かる。しかし、国民革命の進行につれて、中国の新たな担い手が見出されるようになり、革命の性質への理解、それを担う勢力への対応などの議論をめぐって日本では中国の捉え方を見直すべきではないかという観点が生まれることになった。それは、五四運動以降の「青年支那」、「新しき支那」、「若き支那」などの新しい中国に対する言い方と対照的に中国に対して「新支那」という言い方が表れてきたことに象徴的に見出すことができる。本章ではこの言い方の変化から日本の中国国民革命への目の向け方の特徴を検討する。そのために、主に国民革命時期に両誌に掲載された中国の新しい様相に言及した論文を中心に、その対中国政策に焦点をあてて、同時の中国に対する評価と政策転換の方向性の諸類型を明らかにすることを目指す。

6.1 資本主義か社会主義か

「新支那に対して外交建直しを要す」は『中央公論』1927年10月号の特集「お前(日本)は支那に何を望むか」の中の一編である。この特集は下記の論文から構成されている。

大山郁夫「支那の無産階級への言葉」

室伏高信²「先づお前の悪夢から醒めよ」

笹川潔³「新支那に対して外交の建直しを要す」

石川三四郎⁴「隣邦日本人としての『私』の希望」

小村俊三郎「大局論と利害論との衝突」

では、彼等は新しい中国のどの側面に注目し、中国に何を望んでいたのかを見てみよう。

よく知られているように、大正デモクラシーを指導し、のち労働農民党⁵の委員長として無産運動を指導した大山郁夫は平和主義、民主主義に立ち、民主化を求める中国、特に中国の無産階級運動を支持した。1927年に労働農民党を先頭に「対支非干涉同盟」を結成し、山東出兵反対運動を行ったのはその一例である。彼は中国の無産階級に言及した時、「眼ざめたる無産階級」といい、中国の無産階級の活力と価値を認めている。一方、大山は張作霖のことを「国外の帝国主義の手先となっている」といい、蒋介石のことを「都市の新興ブルジョアジーの傀儡として動いている」と述べている。そして当時中国における三つの勢力の軍閥、資本階級、無産階級の存在に言及し、無産階級が中国の支配権力を「支那の軍閥や資本階級の手から戦ひ取ること」を望んだ。⁶

そして、「支那は独裁政治に適するよりも無政府共産主義に適している」という大山に近い考えを持っていた室伏高信は、彼が描く無政府共産主義、すなわち「新支那」への中間的過程において「バラック的假舞台の踊り手」として「孫逸仙の国民党系統」を取り上げ、「新興支那にとって最も実用的立場を代表するものである」と述べている。⁷すなわち、室伏は孫文の三民主義⁸の本質を大同の共産主義とし、「新支那」の未来像を労働者の解放と、国民党の資本主義をめざす政権とも共産党の共産主義をめざす政権とも異なる理想的な共産主義への追求に見出したのである。

ところで、無産階級に期待し、新しい中国には社会主義（理想的な共産主義）が適しているとする見方に対して、異なる主張も展開されている。石川三四郎は独裁的中央権力に反対し、「相互扶助的自治連合主義」⁹こそが中国に適すると説いている。また、長谷川如是閑は当時の中国は「資本主義国家のある段階」に到達していると判断し、「すべての近代国家がその初期に経験した民族主義勃興の時代」が中国にも到来していると考え、中国における資本主義の発展は民族意識の高揚とつながるから、中国国民革命は「決して共産主義的效果をもつ運動ではなく、国内の資本主義的結成に役立つもの」だと言っている。¹⁰

では、こうした中国の行く末に対する主張に照らすと、これらの知識人は日本政府の対中国政策にどのような期待を持つことになるだろうか。

6.2 対中国政策

上述したように、大山郁夫が率いる労働農民党は「対支非干渉」運動に取り組んでいた。「支那の無産階級への言葉」にも「我々が我々の対支非干渉声明と共に掲げた諸要求中、今日に於て最も現実的な意義を見せているものは、対支出兵反対」だと述べられ、さらに「若槻内閣の下に於て一田中内閣になってからは尚ほ更らさうだが一強硬なる弾圧の下におかれたことは、偶ま幣原外交の対支非干渉主義が如何に欺瞞的のもの」¹¹であるかを示していると述べて、日本政府の対中国政策への批判を示している。その論調はまさに特集「お前（日本）は支那に何を望むか」の核心部分ということができ、室伏高信、笹川潔も大山と同じく、「非干渉」論の観点に立っている。¹² 言い換えると、この特集は中国に対する要望、期待を伝えるのみならず、日本政府に対しても政策転換を主張するものであった。

その具体的な内容について見ていくと、小村俊三郎は「日本は率先して、関税法権その他の条約を改定し、その不平等条約を自然に廃棄せしむる」¹³ と中国の関税自主権を承認するよう提唱し、加えて日本と中国は政治、国防、経済上の提携が必要となると説いている。特に彼は日中両国間の経済的提携を重視した。そして、経済的提携に関して最初に取り上げるべきものは「通商貿易で、その中には勿論航海の自由、それも内河ではあるが、海とも同然である揚子江、その他の沿岸航路をも含んでおる」¹⁴ と述べているが、この点は日本政府の外交方針と軌を一にするものである。1927年11月に芳沢謙吉¹⁵ が田中義一に送った報告の中に、航行権の問題に及んでいる。

「差当り航行権問題又ハ旅行営業権問題又ハ警察、課税ノ各問題ノ何レカニ審議ヲ局限シ当分継続シ度キ意向ナリ」¹⁶

しかし、内河航行権はもともとアヘン戦争以降不平等条約下において外国船舶が中国内地河川を航行する権利であり、すべての不平等条約を廃棄しないかぎり、航行権、関税問題、及び経済的提携を論じるのは中国側にとっては受け入れられない提案であったはず

である。まさに室伏高信が指摘している通り「謂ふところの対支不干涉、若しくは経済的提携なるものが経済的帝国主義の別名にほかならないものであることは、既に支那の諸君が見抜いているとほりである」。¹⁷

まとめてみると、この時期において「新支那」については、中国の行く方に関しては資本主義か社会主義かをめぐる論争と、新しい中国に対してどのような対外政策を取るべきかをめぐる論争があったことになる。そのうえで論者間に共通していたのは「対支不干涉」という認識である。加えて、孫文の三民主義が再度検討され、三民主義が新しい中国の新思想として期待されてもいたのである。しかし前節で述べたように、この時期において中国側が一番重視していたのは対外的民族自立問題であり、日本の知識人の抱く孫文像と実際の孫文の思想は異なっていたのだった。彼らが中国に目を向ければ、当然日本の対中国政策も視野に入ることになる。したがってその論調は民主主義の立場に立った不干涉論の展開と、田中外交の山東出兵に対して厳しい批判を展開しているところに特色があった。また、小村のように、両国間の経済問題に関心を寄せ、経済的提携を提唱するのも一つの特徴であるが、しかし中国が主張したように不平等条約が廃棄されないかぎり、「日支提携」の理想は実現から遠ざかっていくのである。

6.3 対中国認識における雑誌メディアの役割—むすびにかえて

後藤孝夫は「内には立憲主義、外へ帝国主義」という二つの顔をもって展開した大正デモクラシーの生成・発展・衰退の過程を、辛亥革命（一九一一）から満州事変（一九三一）まで、ちょうど二十年間にわたる大阪朝日新聞の日中関係論を通して検証¹⁸し、新聞メディアの視点から1920、30年代日本の他者認識を問い直している。速報性を重視する新聞メディアと異なって、雑誌メディアは事実・情況の分析、特に専門家の見解、そして当事者や第三者の存在・見解を重視し、特定のトピックを取り上げて深い考察を進めることを特徴としている。第2章、3章では雑誌メディアの視点から1920年代の日本社会の中国への認識を検討した結果として、『中央公論』・『改造』両誌が「現代中国」に関するトピックを取り上げて五四運動以降日本が新しい中国への関心を持ち続け、中国問題を考え続けていたことを解明した。この研究の延長として、本章では主に『中央公論』・『改造』を中心とし、誌上の言論の分析を通じて、「新中国」に対して日本の雑誌メディアが

示した理解・対応の特徴を解明した。これまで進めてきた『改造』や『中央公論』といった雑誌メディアの対中国イメージ、中国認識の分析から、日本では五四運動期の中国を「ヤング・チャイナ」、国民革命期の中国を「新支那」との名称で捉えて分析し、読者に紹介してきたことが分かった。それらは中国を停滞、否定、侮蔑の対象として描き出す一方で相変わらず「古典中国」に親近感を抱き続けるという近代以降の日本のメディアが作り上げた中国理解の定式に風穴を開け新しい理解の道を示すものとなった。もちろん両者はニュアンス的には似ているが、その背景には違いがある。五四運動期に「ヤング・チャイナ」と称されたのは、特に欧米で教育を受けて帰国した、あるいは西洋の知識を教える中国国内の大学で西洋の技術や思想を学んだ若い知識人たちが率いる学生運動に関心を寄せたものであったが、国民革命期に中国を「新支那」と称されたのは中国の新しい政治勢力の出現に対応したものであった。本章では後者に焦点を当てて研究を進めたが、その結果「新支那」という表現、評価には孫文の三民主義に対する期待に加えて、北伐への武力干渉へ反対し不干渉政策を採りながら日中の経済的提携を推進すべしという日本としてのコミットのあり方を提唱する意味も読み取れることが分かった。しかし、不平等条約を撤廃せず「経済的連携」を提唱するのは、中国側の疑念を招く致命的な欠陥を持った態度だったといえる。

註

- 1 「支那の覚醒」(『中央公論』(海外新潮) 1906年3月号)。
- 2 室伏高信は評論家であり、『改造』『中央公論』両社に寄稿したことがある。大正時代に大正デモクラシーの論者として活躍した。
- 3 笹川潔は1910年3月から1913年12月までの間に『読売新聞』の主筆となり、大正時代にジャーナリストとして約7年間中国湖北省に滞在したことがある。
- 4 石川三四郎も労働農民党の一員であり、社会主義、無政府主義運動に活躍した。
- 5 労働農民党は1926年に結成された無産政党である。労働農民党が三・一五事件で弾圧を受け、解散させられた。
- 6 大山郁夫「支那の無産階級への言葉」(『中央公論』1927年10月号)。
- 7 室伏高信「先づお前の悪夢から醒めよ」(『中央公論』1927年10月号)。
- 8 三民主義は孫文が唱えた中国革命の基本理論であり、民族主義、民権主義、民生主義からなっている。特に民生主義は地権平均を原則として掲げ、土地所有や私的独占資本を制限して農民への土地の再分配を強調し、その中に含まれる大同の共産思想は社会主義的な考え方であると思われる。
- 9 石川三四郎「隣邦日本人としての『私』の希望」(『中央公論』1927年10月号)。
- 10 長谷川如是閑「支那の大陸に対する我が軍事行動—済南事件に対する反省」(『改造』1928年6月号)。
- 11 大山郁夫前掲注6。
- 12 室伏高信が今は「対支非干渉の行はるべき時代ではなくして謂ふところの既得権なるものがその正当な所有者のために反還さるべき時代である」と述べている。笹川潔が「段祺瑞に対する寺内内閣の覆轍を踏」まないとやっている。
- 13 小村俊三郎「大局論と利害論との衝突」(『中央公論』1927年10月号)。
- 14 小村俊三郎前掲注13。

¹⁵ 芳沢謙吉は外交官であり、1923年から1929年まで中国公使となった。

¹⁶ 1927年11月18日在中国芳沢より田中外務大臣宛「通商条約改訂商議の停滞と条約廃棄の趨勢について」(通機密第52号)(外務省外交史料館日本外交文書デジタルコレクション)。

¹⁷ 室伏高信前掲注7。

¹⁸ 後藤孝夫『辛亥革命から満州事変へ—大阪朝日新聞と近代中国』(みすず書房 1987年9月) 1頁。

第7章

まとめと展望

7.1 各章のまとめ—中央公論社、改造社、岩波書店における中国の扱われ方の特徴

以上、本論では、中央公論社、改造社、岩波書店を中心として、1920、30年代の日本出版文化における中国への評価を明らかにしてきた。以下はまずこの三社の対中国認識の特徴を踏まえつつ、改めて1920、30年代の日本における一般的な対中国認識を概括したい。

第2章では、大正期の民主主義の形成に大きな影響力を持った中央公論社の看板雑誌である『中央公論』を中心に、五四運動以降から満州事変前まで『中央公論』の対中国認識の変遷と中国の扱われ方の実態について検討を行った。まず、『中央公論』に掲載された中国に関する巻頭言を抽出し、検討を行った。巻頭言は時局に対して取り上げなければならないテーマについて、出版社として考え方をまとめて示した文章であり、そこに示された対中国認識には、中央公論社の意見が表明されていたと考えて差し支えない。巻頭言に記述された中国に関する意見を見ていくと、軍閥主義、帝国主義を批判し民主主義を提唱する立場に立っていた『中央公論』が同時に中国の民主主義運動を支持していた態度が論述されている。そのなかでは民主主義に基づく「輿論政治」の必要性に着目し、それが『中央公論』の対中国認識の特徴であることを読み取ることができた。一方、中国の国権回復運動に対し、日本が東洋を率いる西洋への対抗を主導する姿勢が見られ、いわゆる上から目線の姿勢が読み取れたのである。また、中国問題に関する特集には日本の満蒙権益に対し、既得権益に執着する態度が見られていた。このような矛盾する態度から、

当時の雑誌メディアが示していた対中国認識の二面性の存在を指摘した。

第3章では、改造社の看板雑誌であり、1919年に創刊され、第一次世界大戦直後の社会の動揺期を経験することで社会主義的傾向をおびることになった『改造』に注目し、五四運動以降から満州事変前まで『改造』の対中国認識を読み解いた。穏健な民主主義の原則を貫く『中央公論』と異なり、『改造』は積極的に新しい中国理解の道を示した。言い換えると、中国を停滞、惰弱の存在と規定する一方で「古典中国」には親近感を抱き続けるという近代以降の日本のメディアが作り上げた中国理解の定式に対して、現代中国に注目し、新しい中国理解の道を示したのが『改造』の特徴だったと結論付けた。本章からも第2章と同様に、『改造』には新しい中国の潜在力を重んじる態度が見られる一方で、日本の既得権益を手放さないという主張が見られるという対中国認識の二面性を指摘できた。また、本章では日中戦争後改造社の創業者である山本実彦の戦争認識と中国認識を踏まえつつ、1930年に入ると日本において相手国を尊重する自由主義・民主主義から国家主義に転向する傾向が見られるようになったことも指摘し、その変化の内実にまで検討を深めた。

第4章では、教養主義を重んじ、岩波文化をもって一世を率いた岩波書店を取り上げた。新しい中国理解の道を示した改造社とは対照的に、中国の古典文化を重視する立場に立ちながら客観的に中国の現状を日本に向けて紹介しようとしたのが岩波書店の特徴だったと結論付けた。また、本章では岩波書店の創業者である岩波茂雄に「満州国」を一つの国と視し、王道楽土を建設し、東洋を率いる西洋に対抗するという主張が見られる。いわゆる上から目線的姿勢と日中戦争勃発後次第に国の方策に対して疑問を呈し、平和を希求して、武力日本ではなく、文化日本に憧れるという態度が見られたことを指摘した。そして戦争、体制への抵抗を示し、言論の暢達と知識の普及のために彼なりの出版社者の使命感に基づく出版活動を行ったことを指摘した。ここに岩波のナショナル・デモクラットの二面性を確認することができ、その二面性の内実は「五箇条の御誓文」にあると結論付けた。

第2部では、第1部の結果を踏まえ、1920、30年代日本における対中国認識の共通点、つまり日本における新しい中国への注目という点を抽出し、検討を行った。まず、いままでよく混用されていた「新しき支那」、「若き支那」、「青年支那」、「ヤング・チャイナ」と

「新支那」との概念の相違を明確にした。つまり、五四運動期に「ヤング・チャイナ」と称されたのは、特に欧米で教育を受けて帰国した、あるいは西洋の知識を教える中国国内の大学で西洋の技術や思想を学んだ若い知識人たちが率いる学生運動に関心を寄せたものであったが、国民革命期に中国を「新支那」と称したのは中国の新しい政治勢力の出現に対応したものであったという点がそれである。そしてメディアが「ヤング・チャイナ」として称賛した胡適と革命青年のひとりと目された戴季陶を分析することを通じて、メディアが「ヤング・チャイナ」を紹介する際に、東洋を率いて西洋に対抗する目的で、中国の古典世界への憧れを回復させたことと中国の安定、特に民生問題の解決を重視していたことを明らかにし、ここからは中国情勢に関する時局判断にずれがあったことが指摘できた。

7.2 1920、30年代日本における対中国認識の特徴

世界史的に見れば、1920年代は第一次世界大戦により、社会主義、民族自決、ナショナリズム、民主主義、平和主義などさまざまな思想潮流が現れ、いわゆる新しい時代の始まりであった。日本においては、ナショナリズム、デモクラシー、帝国主義、社会主義それぞれの思想がぶつかり合い、一方、中国においては、五四運動以降民主主義と科学主義が導入され、社会主義運動、労働運動が盛んになり、同時に民族自決により排日運動が生じていた。このような時代の中で日本の対中国認識に影響を与えた要素として、政治、メディア、理想と現実、知識人と一般民衆などさまざまな要素の存在を想定できるのであるが、本研究では中央公論社、改造社、岩波書店における中国の扱われ方の特徴の検討を踏まえて、1920、30年代の日本における対中国認識の特徴を考察してきた。それは以下の三つの点に総括することができる。

まず、変動性が指摘できる。20年代初期には中国の学生運動に注目を与え、20年代半ばになると日本が交渉すべき相手として国民党を重視するようになるという時期や状況に応じた関心の対象の変化が見られた。そして1920年代後半に満蒙問題が注目を集めた。このような変動性が見られるのは、その当時中国国内において民主や民族自決を要求する革命運動が度々行われ、転換期を迎えたのが一因である。加えて中国のナショナリズムの台頭により、日本の外交政策が中国の権益を重視する姿勢から「満州」での権益

を重視する姿勢へと転換するようになったのがもう一つの要因である。

次に、二面性の存在が指摘できる。つまり、反帝国主義の立場に立ち、中国の民族運動への共感を持ち、平和主義への関心を持っていた一方で、帝国主義的な愛国主義も持っていた点である。この中で第2章で指摘した『中央公論』に中国の国権回復運動に対して同情、支持を示しながらも、日本が東洋を率いて西洋に対抗するといういわゆる上から目線的姿勢の存在が読み取れることと第4章で指摘した岩波茂雄が平和を希求しながらも、「満州国」の正当性を認め、東洋を率いて西洋に対抗することを主張したのはその好例である。このような帝国主義的な愛国主義はその後ますますエスカレートして、最終的に「大東亜共栄」構造に帰結し、満州事変、日中戦争に至る要因の一つとなった。日本人、日本社会の中国イメージ、中国観の形成に一定の役割を果たしていた総合雑誌、それもリベラル、進歩的なそれにおいても「自由主義」的な論調と「帝国主義」的論調が同居するという矛盾は、当時の日本が抱えていた政治的矛盾と同一視できるものである。

最後に、中国情勢に関する時局判断にずれがあったことが指摘できる。具体的には二つの点があげられる。まず、1920年代の日本では東洋文化への関心が高まり、いわゆる「支那趣味」が広まり、さらに、東洋を率いて西洋に対抗する目的で、中国の古典世界への憧れがよみがえってきていた。一方で、1920年代の中国においては、新旧文化の優劣をめぐる論争が続いていて、むしろ近代西洋思想の新思想で武装し、国家主権の回復することを目標としていた。もう一つは戴季陶が日本に訪問した時、不平等条約を撤廃するという期待を持ち、国民革命軍が中国の統一を達成する強い意志を伝えようとしていた一方で、日本側は中国の安定、特に民生問題の解決を重視していた。このようなずれが政治的な摩擦の原因となったと考えられる。

本研究は雑誌『中央公論』、『改造』、岩波書店三つのメディアを中心に1920、30年代日本における対中国認識を明らかにした。残された課題も数多く挙げられる。例えば、本研究は雑誌『中央公論』、『改造』、岩波書店三つのメディアを中心に対中国認識を考察したが、中国側のメディアの反応についてはほとんど触れていない。日中相互認識を知るためには、中国側のメディアの出版活動についての考察が無視できない。そして、日本における対中国認識は実に様々であり、例えばエリートの岩波文化と異なる大衆的講談社文化など、ほかのメディアを考察する必要がある。1920、30年代日本における対中国認

識という課題はさらに多様な視点によって検討されなければならない。

資料:『中央公論』、『改造』に掲載された中国関係の文章一覧表及び岩波書店中国研究刊行一覧表

1919年から1929年まで『中央公論』に掲載された中国関係の文章一覧表(『中央公論総目次一創刊号より第1000号まで』(中央公論社 1970年11月)に基づく作成)

刊行日付	題目	作者
1919年4月号	「支那の芝居の話」	福地信世
1919年5月号	「支那に於ける儒教の民主化」	宇野哲人
	「燈影綺談」	村松梢風
	「支那劇の発展」	塩谷温
1919年6月号	「北京学生団の行動を漫罵する勿れ」	巻頭言
	「支那劇を観る記」	谷崎潤一郎
	「山東問題解決の世界的背景」	吉野作造
	「北京大学に於ける新思潮の勃興」	吉野作造
1919年7月号	「狂乱せる支那膺懲論」	巻頭言
	「対支借款団問題と日支経済関係」	堀江帰一
	「支那に於ける排日事件」	吉野作造
1919年10月号	「対支政策の低迷」	吉野作造
1919年11月号	「支那に於けるABC同盟」	日高進
1920年2月号	「支那に於ける日英米の三国関係」	堀江帰一
	「支那学生運動の新傾向」	吉野作造
1920年6月号	「日支学生提携運動」	吉野作造
1920年7月号	「国民党の宣伝部新設」	吉野作造
1920年8月号	「支那最近の動乱を論じて」	吉野作造
1920年9月号	「対支政策の一転回」	吉野作造
1920年10月号	「支那朝鮮基督教徒の大会不参加」	吉野作造
1920年12月号	「大連にて」	木村莊八
1921年1月号	「支那に入る 北京篇」	木村莊八
	「支那の近状」	吉野作造
1921年4月号	「支那留学生問題」	吉野作造

刊行日付	題目	作者
1921年5月号	「支那阿片問題の真相」	井出季和太
1921年7月夏季 特別「都市と 田園」号	「日支経済同盟に実行的価値ありや」	堀江帰一
	「日米交渉の一問題としての山東問題」	吉野作造
	「支那の都市＝北京」	伊東忠太
1921年10月号	「山東問題の直接交渉の拒絶」	吉野作造
1921年12月号	「支那人の顔其他」	長谷川如是閑
1922年1月号	「唐土雑観」	小杉未醒
	「私の支那趣味観」	佐藤功一
	「住宅から見た支那」	伊東忠太
	「支那文人と文房」	後藤朝太郎
	「支那趣味と云ふこと」	谷崎潤一郎
	「支那問題観」	吉野作造
1922年3月号	「四国協商並に極東協約」の成立と対支経済政策」	堀江帰一
	「支那近事」	吉野作造
1922年11月号	「一巡りして来た支那の社会と文化観」	内ヶ崎作三郎
	「洞庭夜話」	田中貢太郎
1923年4月号	「日支条約改訂問題」	巻頭言
	「列強に先んじて対支領事裁判権を撤廃せよ」	柏田忠一
	「支那漫遊前記」	田中貢太郎
1923年5月号	「対支文化事業の経済的観察」	堀江帰一
1923年8月号	「不思議な都「上海」」	村松梢風
1923年9月号	「満鮮一周」	田山花袋
	「江南の風物と趣味」	村松梢風
1924年11月号	「動乱の支那対策と停頓の日露交渉前途」	米田実
1924年12月号	「経世眼及び趣味眼に映ずる満蒙」	黒頭巾
1925年2月号	「孔子の素描」	高須芳次郎
1925年3月号	「日露の提携を支那にまで及ぼせ」	安部磯雄
1925年8月号	「支那問題がわが国民に与ふる試練」	巻頭言
1925年9月号	「支那の対外運動とその立体的考察」	小村俊三郎
	「支那の国権運動に対する英米の政策」	米田実
	「支那問題の重点」	松井等
1925年10月号	「支那の関税問題に直面して」	太田正孝
1925年12月号	「支那の動乱に就いて」	米田実
1926年1月号	「満州動乱の対策」	吉野作造
	「西原借款の不始末」	吉野作造
1926年2月号	「支那の治外法権会議」	米田実
	「満州動乱その後の問題」	吉野作造
1926年3月号	「上海風俗印象記」	村松梢風
1926年8月号	「支那の関税会議に就いて」	小村俊三郎
1927年2月号	「英国の関税提案並に最近租界事件」	米田実
	「現下に於ける対支諸意見の解剖と批判」	小村俊三郎
1927年3月号	「幣原外交の本領」	永井柳太郎
	「幣原外相の対支外交の難点」	信夫淳平
	「現代日本の要求する大外交家」	中村嘉壽

刊行日付	題目	作者
	「憂ふべき支那の現状と幣原外交」	植原悦二郎
	「「幣原外交」試練の時」	神尾茂
1927年4月号	「無産政党に代わりて支那南方政府代表者に告ぐ」	巻頭言
	「中国革命運動の歴史的考察」	戴季陶
1927年5月号	「日支両国大衆の精神的聯繫」	巻頭言
	「支那の動乱と我利権問題」	高柳松一郎
	「正義人道に基く解決」	長野朗
	「更生の陣痛たらしめよ」	神田正雄
	「国民革命を成就せしめよ」	根岸佶
	「動き行く支那の局面を觀て」	米田実
	「支那近事」	吉野作造
	「支那から歸って支那を語る」	長永義正
	1927年6月号	「田中内閣とその対支方針」
「支那の家庭を説く」		井上紅梅
1927年7月号	「支那時局の正視」	巻頭言
	「支那出兵に就て」	吉野作造
	「北滿放浪雑話」	里村欣三
1927年8月号	「対支出兵問題」	吉野作造
1927年9月号	「政友会内閣の対滿蒙政策」	巻頭言
	「滿鉄首腦者の更迭と滿蒙政策」	神田正雄
1927年10月号	「滿州の排日騒ぎにつき或る支那人からの來書」	吉野作造
	「支那の無産階級への言葉」	大山郁夫
	「先づお前の悪夢から醒めよ」	室伏高信
	「新支那に対して外交の建直しを要す」	笹川潔
	「隣邦日本人としての『私』の希望」	石川三四郎
	「大局論と利害論との衝突」	小村俊三郎
1927年11月号	「最負役者を見る」	高島素之
	「情の人蒋介石」	清水安三
	「反革命の徒蒋介石」	猪俣津南雄
	「革命家としての蒋介石」	長野朗
	「徹頭徹尾意の人」	殷汝耕
1927年12月号	「支那食人考察」	長永義正
	「揚州十日記」	王秀楚記・佐藤春夫訳
1927年1月号	「支那の不老長寿」	池田桃川
1928年3月号	「支那の大衆文学」	井上紅梅
1928年6月号	「対支那出兵」	吉野作造
1928年7月号	「張作霖の没落と滿蒙問題」	巻頭言
	「張作霖の没落と日本の特殊利益」	鈴木茂三郎
	「支那の形勢」	吉野作造
	「トレチアコフの「支那よ、哮へよ」」	秋田雨雀
1928年9月号	「日支条約問題を中心として」	小村俊三郎
	「自ら侮る勿れ」	永井柳太郎
	「田中外交の特質」	山川均

刊行日付	題目	作者
	「分裂外交の必然性」	亀井貫一郎
	「対支政策批判」	吉野作造
1928年10月号	「張作霖は誰が殺したか」	清沢洌
1928年11月号	「「中央公論」を通して日本民族に懇ふ」	王大楨
	「蒋介石と馮玉祥」	橘樸
1928年12月号	「支那の政治と日本の政治」	巻頭言
	「上海的生活往来」	馮夷
	「満州旅暦」	田山花袋
1929年1月号	「支那外交の大立物王正廷論」	三宅周太郎
	「新支那訪問記」	村松梢風
1929年2月号	「対支関係の前途と床次氏の立場」	巻頭言
	「新支那訪問記」	村松梢風
	「楊宇霆の惨死を語る」	小村俊三郎
1929年3月号	「対支問題概観」	幣原喜重郎
	「支那」	前田河広一郎
1929年4月号	「新支那訪問記」	村松梢風
	「支那」	前田河広一郎
1929年5月号	「対支外交の好転」	巻頭言
	「済南事件解決と日支の将来」	米田実
	「新支那訪問記」	村松梢風
	「支那」	前田河広一郎
1929年6月号	「蔣馮二人を繞る支那時局」	長野朗
	「支那」	前田河広一郎
1929年7月号	「対支帝国主義の屈折と極東市場戦」	高橋亀吉
	「支那」	前田河広一郎
1929年8月号	「支那資本主義革命の現段階」	鈴木茂三郎
	「対支外交の立場から」	大西斎
	「支那」	前田河広一郎
1929年9月号	「露支紛争の合理的解決を望む」	巻頭言
	「満州問題の中核」	蠟山政道
	「東鉄を繞る露支紛争」	長野朗
	「露支紛争の意義」	藤枝丈夫
	「露支紛争の印象」	杉森孝次郎
	「東支鉄路問題とロシアの態度」	嘉治隆一
	「社会主義国の権益防衛のために」	鈴木茂三郎
	「軍備より見た露支両国」	河野恒吉
	「支那」	前田河広一郎

1919年から1929年まで『改造』に掲載された中国関係の文章一覧表（関忠
果・他編著『雑誌『改造』の四十年』（光和堂 1977年）に基づく作成）

刊行日付	題目	作者
1919年6月号	「妄想的軍備縮小案をわらって日支の文化運動を高唱す」	佐藤鋼次郎
1920年1月号	「朝鮮満州支那案内」	鉄道院
1920年3月号	「孔子の帰国」	長与善郎
1920年8月号	「喜劇 蘇東坡」	谷崎潤一郎
1920年11月号	「満鮮赤化対応策」	巻頭言
1920年12月号	「遣唐使時代の再現」	巻頭言
	「在満露領の鮮人解放」	大庭柯公
	「支那に於けるラッセル氏」	
1921年1月号	「愛国心の功過」	バートランド・ラッセル
	「黄五郎」	佐藤春夫
1921年2月号	「支那社会主義の信徒」	小村俊太郎
	「上海印象記」	成瀬無極
1921年4月号	「出版を通して見たる支那思想」	
1921年6月号	「支那舶来」	
1921年7月 (夏期臨時号)	「西湖と太湖」	成瀬無極
1921年9月号	「章美雪女士之墓」	佐藤春夫
1921年10月号	「(時評) 支那の国際管理観」	杉森孝次郎
1922年1月号	「陳独秀より胡適へ」	柏城学人
1922年4月号	「支那の国際的地位を論ず」	バートランド・ラッセル
1922年5月号	「支那に於ける非宗教運動」	柳瀬清
1922年8月号	「支那文明と西洋」	バートランド・ラッセル
1922年11月号	「長春決裂と日露の将来」	ウエー・アントーノフ
1923年3月号	「独露支同盟と日露外交の転機」	巻頭言
1923年8月号	「対支経済政策の根本的改造」	堀江帰一
1924年2月号	「満鮮吟行」	高田保馬
1924年10月号	「民国の動乱と我国の態度」	巻頭言
	「支那の戦争とその思想並に政治的背景」	小村俊二郎
	「支那ノいくさ」	岡本一平
1924年11月号	「現代日本の一人が選ぶ支那観とその或関係意識」	杉森孝次郎
	「支那の統一と我対策」	三宅雪嶺
	「戦争は支那の痼疾、利権獲得は日本の慢性病」	安部磯雄
	「反直隸派の役者と作者」	小村俊二郎
	「(座談会) 対支国策討議」	
1924年12月号	「支那時局の前途の收拾は如何」	太田宇之助

刊行日付	題目	作者
	「支那劇の盛衰と其技術の変遷」	梅蘭芳
1925年1月号	「支那に経済立国策を提唱す」	巻頭言
	「大亜細亜主義の意義と日支親善の唯一策」	孫文
1925年3月号	「日本の東洋政策に就いて」	戴天仇
	「孫逸仙物語」	宮崎龍介
1925年6月号	「支那旅行雑感」	片山潜
	「北京日記抄」	芥川龍之介
1925年7月号	「支那新人の「新支那運動」」	巻頭言
	「支那の排外罷業擾乱の意味と日本の位置」	高橋亀吉
	「支那学生運動と共産党」	松本鎗吉
1925年8月号	「支那問題に対する問答」	巻頭言
	「支那反帝国主義運動の基本考察」「一 支那の国権回復問題」	米田実
	「支那反帝国主義運動の基本考察」「二 対支列国借款の由来と其現状」	木村増太郎
	「支那反帝国主義運動の基本考察」「三 国際関係の現状に対する支那人の不平と要求」	米内山庸夫
	「支那反帝国主義運動の基本考察」「四 支那労働運動に就いての一観察」	及川忠恒
	「支那南北記」	木下杢太郎
1925年10月号	「支那関税会議と日本」「一 支那の関税自主運動と日本資本主義経済の運命」	高橋亀吉
	「支那関税会議と日本」「二 支那関税問題と日本」	武藤山治
1925年12月号	「支那の関税自主権と日本の対支経済関係」	堀江帰一
	「北京印象記」	犬養健
1926年1月号	「満州出兵と我国の態度」	巻頭言
	「支那の赤化的傾向」	大西斎
	(創作)「劇曲 陶淵明」	長与善郎
1926年3月号	「北京印象記」	犬養健
1926年5月号	「燕京漫筆」	犬養健
	「論語の講義(一)」	武者小路実篤
1926年6月号	「論語の講義(二)」	武者小路実篤
1926年7月号	「論語の講義(三)」	武者小路実篤
1926年5月 (夏季増刊号 「現代支那号」)	「支那と現代」	巻頭言
	「近代支那西洋文明に対する吾人の態度」	胡適
	「中国無産階級及びその運動の特質」	李人傑
	「新生支那に於ける女性の地位」	朱胡彬夏
	「中国哲学の貢献」	馮友蘭
	「中国の学生運動」	高一涵
	「中国の国家財政と地方財政の区分」	馬寅初
	「中国女子の覚醒」	陳望道
	「新支那の青年運動と日本の立場」	林駉
	「北京政府と広東政府」	伊藤武雄

刊行日付	題目	作者
	「在支外人記者の支那観」 「一 現代支那の真相」	ランドル・グールド
	「在支外人記者の支那観」 「二 過渡期に於ける支那」	エム・ロウズン
	「在支外人記者の支那観」 「三 支那に於ける赤化運動」	布施勝治
	「在支外人記者の支那観」 「四 列強対支関係の新紀元」	ダブルユー・エイチ・ドナルド
	「支那小説の話」	田中貢太郎
	「太原 大同の仏頭」	木村荘八
	「漫画 同車」	豊子愷
	「謝秀卿」	村松梢風
	「漫画 都会的清客」	豊子愷
	「支那青年と自然科学」	木下柰太郎
	「中国新文学談瑣」	西瑩
	「漫画 施茶処」	豊子愷
	「支那の寄席」	井上紅梅
	「社会雑事」	汪俠公
	「苦心孤詣 (旧式支那小説)」	董諤声
	「新支那雑俎」	辻聴花
	「日本古典文学に就いて」	謝六逸
	「留学所感二三 留学生に与ふ」	何畏
	「漫画 「肅静廻避」 与紅頭巡捕」	豊子愷
	「北京間話」	小畑薫良
	「支那絵画の派別とその変遷」	鄧以蟄
	「民国寄稿家略歴」	
	「海のひびき」	徐志摩 佐藤春夫
	「春光」	聞一多
	「三月十八日 大統領府前の大流血を記念して」	饒孟侃
	「近詠」	樊山 (増祥)
	「宣統帝作詩筆影」	
	「題宋石門羅漢画像 (四首)」	梁啓超
	「蘇州の歌謡」	顧頡剛
	(創作) 「劇曲 圧迫」	丁西林
	(創作) 「キュラソー」	張資平
	(創作) 「酒後」	凌叔華
	(創作) 「王昭君 (二幕)」	郭沫若
	(創作) 「阿蘭の母」	楊振生
	(創作) 「美しい肉体を見た話」	徐志摩
	(創作) 「短編三つ」	陶晶孫
	(創作) 「昼飯の前 (一幕)」	田漢
	「蘇子瞻米元章」	露伴学人
	「剥げた仮面」	正宗白鳥
	「大同城内外 (雲崗紀行のうち)」	犬養健
	「支那の大人物」	長与善郎

刊行日付	題目	作者
	『『真生活』ヘール・トライヤスからクロ・ド・キヤアニユ』	武林無想庵
	「美術と支那の雑感」	岸田劉生
	「明代の通俗短編小説」	塩谷温
	「賢くなる法」	里見弴
	「返り討」	菊池寛
	「支那の国家秩序と社会秩序」	長谷川如是閑
	「李鴻章」	佐藤春夫
	「蒙古の太陽」	ボリス・ペリニヤーク
1926年8月号	「論語の講義（四）」	武者小路実篤
1926年9月号	「成都道中記」	遅塚麗水
1926年10月号	「広東革命軍と日本」	巻頭言
1927年2月号	「(時評) 支那最近の形勢を望見して」	米田実
	「孔子の廟に賽す」	田中真太郎
1927年3月号	「支那現時の問題 英国の帝国主義と支那の国民運動」	山川均
	「国民政府の実情と蒋介石及びその周囲」	山村時男
	「支那の時局と民衆運動」	池田桃川
	「南支を動かすポローチンの怪腕」	古荘国雄
	「クリスチャンジェネラルの日記」	馮玉祥
1927年4月号	「日・支・露問題討議」	福田徳三 戴天仇 後藤新平
	「漫画 支那人の好む闘争」	ポスト（ワシントン）紙所載
	「蒋介石は何処へ行く」	古荘国雄
1927年5月号	「支那の動乱と米国」	鶴見祐輔
	「南京事件と「共同動作」」	山川均
	「国民政府に返り咲きした汪兆銘氏」	山村時男
	「上海騒擾記」	井上紅梅
	「南京暴虐事件の真相」	池田桃川
1927年6月号	「李大釗氏銃殺の報を手にして」	荒川実蔵
	「胡適漫談」	胡適
1927年7月号	「蒋介石を戒る」	巻頭言
1927年10月号	「中国国民革命と労働組合運動」	山本懸蔵
1927年11月号	「日本の満蒙経済政策」	堀江帰一
1927年12月号	「(時評) 蒋介石は復活するか」	山川均
1928年6月号	「最近支那政局と支那事情」「一 支那に於ける共産主義運動の発展過程と其現勢」	横田実
	「最近支那政局と支那事情」「二 支那政局と我が出兵」	長野朗
	「最近支那政局と支那事情」「三 支那大陸に対する我が軍事行動」	長谷川如是閑
	「満蒙調査日記の一つ一つ」	鳥居龍蔵

刊行日付	題目	作者
1928年7月号	「重大性ある対支策の根本修正」	巻頭言
	「北方軍閥没落と満蒙問題」「一 満州政局の将来と日本」	長野朗
	「北方軍閥没落と満蒙問題」「二 支那に於ける日本の「国家資本」と「財閥コンツェルン」」	鈴木茂三郎
	「北方軍閥没落と満蒙問題」「三 張遭難後の満州」	米田実
	「北方軍閥没落と満蒙問題」「四 政友会政府の対支政策批判」	小村俊三郎
	「支那のモダン・ガール」	池田桃川
	「張作霖」	松本鎗吉
1928年8月号	「支那革命の発展と日本帝国主義の運命」	猪俣津南雄
	「(経済時評) 中国国民政府に望む」	根岸佶
	「(歌と詩) 支那名媛詩鈔」	佐藤春夫
1928年9月号	「対支の根本策樹立」	巻頭言
	「日支条約破棄と経済関係の将来」「一 国民政府の条約破棄と其波紋」	嘉治隆一
	「日支条約破棄と経済関係の将来」「二 日支経済関係と武断政策」	高橋亀吉
	「馮玉祥」	布施勝治
	「(歌と詩) 満州と蒙古の旅」	与謝野晶子
1928年11月号	「風呂と銀行」	横光利一
1928年12月号	「(時評) 対支外交の好転」	山川均
	「国民政府の新組織と中心人物」	長野朗
1929年1月号	「対支根本策樹立を急げ」	巻頭言
	「支那は動く」	前田河広一郎
	「支那今日の政治社会運動」	浜野未太郎
	「王正廷論」	大西斎
1929年2月号	「更迭の一路あるのみ」	巻頭言
	「国民政府の所謂満蒙及満鉄回収論」「一 我國民と対支外交」	植原悦二郎
	「国民政府の所謂満蒙及満鉄回収論」「二 田中内閣は支那の大勢を洞察せよ」	大西斎
	「国民政府の所謂満蒙及満鉄回収論」「三 日支関係の悪化と満鉄回収問題」	中野正剛
	「支那は動く(その二)」	前田河広一郎
1929年3月号	「支那は動く(完)」	前田河広一郎
	「鹿・象・獅子吼の蒋介石」	小村俊太郎
	「足と正義」	横光利一
1929年4月号	「新支那を観る」	御手洗辰雄
1929年5月号	「東洋の解放」	巻頭言
	「上海の宿」	前田河広一郎
1929年6月号	「掃溜の問題」	横光利一
1929年7月号	「某重大事件と政局の展開」	巻頭言
	「支那共産党の理論及び方略」	橘樸

刊行日付	題目	作者
1929年9月号	「東支鉄道回収問題の必然性」	長谷川如是閑
	「東支鉄道問題の経緯」	長野朗
	「持病と弾丸」	横光利一
1929年12月号	「海港章」	横光利一

1913年（創業）から1945年（日中戦争終戦）まで岩波書店の中国研究の刊行一覧表（『岩波書店八十年』（岩波書店 1996年）に基づく作成）

刊行日付	題目	著訳者	掲載誌	備考
1924年10月	『支那上代画論研究』	金原省吾		
1929年2月	『芥川竜之介全集』	芥川竜之介		「日本小説の支那訳」を収める
1929年3月	『訳注 杜詩 卷之一』	漆山又四郎訳注		<岩波文庫>
1929年4月	『訳注 杜詩 卷之二』	漆山又四郎訳注		<岩波文庫>
1929年5月	『訳注 杜詩 卷之三』	漆山又四郎訳注		<岩波文庫>
1929年7月	『訳注 杜詩 卷之四』	漆山又四郎訳注		<岩波文庫>
1929年7月	「支那人の特性」	和辻哲郎	『思想』	『思想』特集号「支那号」
	「歴史地理学上から見た東亜文化の源流」	小川琢治		
	「支那大陸に於ける『外国』の運命」	長谷川如是閑		
	「革命支那の一断面」	園田次郎		
	「支那革命史概論」	藤野啓次		
	「支那革命の農業問題」	平田良衛		
	「支那最近の思想運動」	藤枝丈夫		
	「最近に於ける支那学の展望」	石田幹之助		
「最近十年間に於ける支那に関する英米文献」	松方三郎			
1930年6月	『支那研究』	慶応義塾・望月基金支那研究会編		
1930年6月	「支那社会の歴史的発展段階」	郭沫若 著 頼貴富 訳	『思想』	
1930年7月	『老子と莊子』	武内義雄		<学芸叢書 10 >
1931年2月	『孔子全集』	藤原正 纂訳		
1931年5月	『訳注 唐詩選 上巻』	漆山又四郎 訳注		<岩波文庫>
1931年5月	『訳注 唐詩選 下巻』	漆山又四郎 訳注		<岩波文庫>
1932年2月	『通俗古今奇観』	淡濟主人 訳		<岩波文庫>
1932年7月	『燉煌出土古写仏典に就いて』	矢吹慶輝 述		
1932年11月	『訳注 李太白詩選 上巻』	幸田露伴 校閲 漆山又四郎 訳注		<岩波文庫>

刊行日付	題目	著者	掲載誌	備考
1933年4月	『訳注 李太白詩選 下巻』	幸田露伴 校閲 漆山又四郎 訳注		<岩波文庫>
1933年4月	『論語』	武内義雄 訳注		<岩波文庫>
1933年10月	『孔子家語』	藤原正 校訳		<岩波文庫>
1934年1月	「自然主義の作家たち」	村尾三郎 訳	『文学』	謝六逸「日本文学史」の一節
1934年2月	『満州問題』	矢内原忠雄		
1934年3月	『塩鉄論』	曾我部静雄 訳注		<岩波文庫>
1934年6月	『菜根譚』	山口察常 訳注		<岩波文庫>
1934年10月	『寒山詩』	太田悌蔵 訳注		<岩波文庫>
1934年10月	『支那現代思潮』	松井等		<岩波講座・東洋思潮>
1935年2月	『天の思想—先秦思想の天道観』	郭沫若		<岩波講座・東洋思潮>
1935年4月	「『易』の構成時代」	郭沫若	『思想』	
1935年4月	『子思子』	藤原正 訳注		<岩波文庫>
1935年5月	『日本小説の支那訳』	芥川竜之介		<芥川竜之介全集>第8巻所収
1935年6月	『魯迅選集』	佐藤春夫・増田渉 訳		<岩波文庫>「孔乙己」・「風波」・「故郷」・「阿Q正伝」・「家鴨の喜劇」・「石鱈」・「高先生」・「孤独者」・「藤野先生」・「魏晋の時代相と文学」・「上海文芸の一瞥」及び「魯迅伝」(増田渉)を収める
1935年7月	『支那民族』	松井等		<岩波講座・東洋思潮>
1935年10月	『支那農業と工業』	R.H. トーネイ 著 浦松佐美太郎・牛場友彦 訳		
1935年11月	『楚辞』	橋本循 訳注		<岩波文庫>
1935年11月	『孫子』	山田準・阿多俊介 訳注		<岩波文庫>
1935年12月	『支那の社会』	加藤繁		<岩波講座・東洋思潮>
1936年5月	『支那思想史』	武内義雄		<岩波全書>
1936年5月	『支那語の系統』	宮越健太郎		<岩波講座・東洋思潮>
1936年6月	『孟子』	武内義雄・小林勝人 訳注		<岩波文庫>
1936年9月	『支那仏教史』	宇井伯寿		<岩波全書>
1936年12月	「中国に反映した漱石の片影」	一戸務	『文学』	<海外に於ける漱石研究>
1936年12月	『講孟余話』	吉田松陰 著 広瀬豊 校訂		<岩波文庫>
1937年3月	『孟子・荀子』	安部能成 著		<大教育家文庫>

刊行日付	題目	著訳者	掲載誌	備考
1937年4月	『易経』	高田真治 訳注		<岩波文庫>
1937年5月	『万葉集の支那通訳』	一戸務	『文学』	<海外に於ける万葉集研究>
1937年7月	『東亜の子かく思ふ』	蔡培火		
1937年9月	『孔子伝』	司馬遷 著 藤原正 訳注		<岩波文庫>
1937年12月	『評釈 千字文』	山田準・安本健吉 註解		<岩波文庫>
1938年3月	『老子』	武内義雄 訳注		<岩波文庫>
1938年4月	『太極図説・通書・西銘・正蒙』	西晋一郎・小糸夏次郎 訳注		<岩波文庫>
1938年6月	『東亜錢志』	奥平昌洪		(第一章 「支那」)
1938年9月	『支那通史 上冊』	那珂通世 著 和田清 訳		
1938年9月	『支那の建築と芸術』	関野貞		『関野博士論文集 4』
1938年11月	『孔子』	和辻哲郎		<大教育家文庫>
1938年11月	『奉天三十年 上』	クリスティ 著 矢内原忠雄 訳		<岩波新書>
1938年11月	『奉天三十年 下』	クリスティ 著 矢内原忠雄 訳		<岩波新書>
1938年11月	『支那思想と日本』	津田左右吉		<岩波新書>
1938年12月	『大帝康熙一支那統治の要道』	長与善郎		<岩波新書>
1939年4月	『日支交渉史研究』	秋山謙蔵		
1939年4月	『支那社会の科学的研究』	ウィットフォーゲル 著 平野義太郎・宇佐美誠次郎 訳		<岩波新書>
1939年5月	『現代支那論』	尾崎秀実		<岩波新書>
1939年6月	『支那社会の研究』	清水盛光		
1939年6月	『三民主義解説 上』	周仏海 著 犬養健 訳編		<岩波新書>
1939年9月	『支那通史 中冊』	那珂通世 著 和田清 訳		<岩波文庫>
1939年11月	『道家の思想と其の展開』	津田左右吉		
1939年11月	『満文老檔』	藤岡勝二 訳		
1939年11月	『儒教の精神』	武内義雄		<岩波新書>
1939年11月	『論語之研究』	武内義雄		
1939年12月	『東邦近世史 上巻』	田中萃一郎		<岩波文庫>
1939年12月	『三民主義解説 下』	周仏海 著 犬養健 訳編		<岩波新書>
1940年1月	『支那のユーモア』	林語堂 著 吉村正一郎 訳		<岩波新書>

刊行日付	題目	著者	掲載誌	備考
1940年2月	『尚書正義 第一冊』	吉川幸次郎		
1940年3月	『紅樓夢 (一)』	曹雪芹 著 松枝茂夫 訳		<岩波文庫>
1940年3月	『毛詩抄 (詩經) (一)』	清原宣賢 講述		<岩波文庫>
1940年3月	『中国農村問題』	太平洋問題調査会 編 杉本俊朗 訳		<東亜研究叢書>
1940年7月	『孝経・曾子』	武内義雄・坂本良太郎 訳注		<岩波文庫>
1940年7月	『大陸文化研究』	京城帝国大学・大陸文化研究会 編		
1940年9月	『支那古代家族制度研究』	加藤常賢		
1940年9月	『支那の経済機構』	何幹 著 中西功・小泉謙 訳		<岩波新書>
1940年10月	『尚書正義 第二冊』	吉川幸次郎		
1940年10月	『方輿記 支那の民族産業』	平野義太郎 編		<東亜研究叢書>
1940年10月	『支那事変歌集』	斎藤茂吉・土屋文明 編		<アララギ叢書>
1940年10月	『紅樓夢 (二)』	曹雪芹 著 松枝茂夫 訳		<岩波文庫>
1940年11月	『ソープ 支那土壤地理学』	伊藤隆吉・保柳睦美・上田信三・原田竹治 訳		<東亜研究叢書>
1941年3月	『支那の経済地理』	グルーシャコフ 著 西尾忠四郎・西沢富夫 訳		<岩波新書>
1941年3月	『支那語教育の理論と実際』	倉石武四郎		
1941年5月	『支那の現実と日本』	杉村広蔵		
1941年8月	『東邦近世史 中巻』	田中萃一郎		<岩波文庫>
1941年9月	『北京年中行事記』	清敦崇 編 小野勝年 訳注		<岩波文庫>
1941年10月	「燕京歳時記」	周作人 著 松枝茂夫 訳	『図書』	
1941年11月	『紅樓夢 (三)』	曹雪芹 著 松枝茂夫 訳		<岩波文庫>
1941年11月	『尚書正義 第三冊』	吉川幸次郎		
1941年11月	『支那小説史 (上)』	魯迅 著 増田渉 訳		<岩波文庫>
1941年12月	『支那通史 下冊』	那珂通世 著 和田清 訳		<岩波文庫>
1941年12月	『現代支那の倫理思想』	福井康順		<岩波講座倫理学>
1942年1月	『蒙古の旅 上』	ハズルンド 著 内藤岩雄 訳		<岩波新書>
1942年3月	『論語義解』	秋月胤継		

刊行日付	題目	著訳者	掲載誌	備考
1942年3月	『香港』	小椋広勝		<岩波新書>
1942年3月	『上海』	殿木圭一		<岩波新書>
1942年4月	『支那・支那人』	鳥山喜一		<岩波新書>
1942年4月	『支那社会経済史研究』	玉井是博		
1942年4月	「現代支那人の読書」	吉川幸次郎	『図書』	
1942年5月	『唐西域求法高僧伝』	足立喜六 訳注		
1942年6月	『毛詩抄（詩経）（二）』	清原宣賢 講述		<岩波文庫>
1942年6月	『リヒトホーフエン 支那』	望月勝海・佐藤晴生 訳		<東亜研究叢書>
1942年6月	『支那家族の構造』	清水盛光		
1942年8月	『蒙古の旅 下』	ハズルンド 著 内藤岩雄 訳		<岩波新書>
1942年9月	『史記平準書・漢書食貨志』	加藤繁 訳注		<岩波文庫>
1942年10月	『抱朴子』	石島快隆 訳注		<岩波文庫>
1942年10月	『支那・上海の経済的諸相』	杉村広蔵		
1942年12月	『支那小説史（下）』	魯迅 著 増田渉 訳		<岩波文庫>
1943年2月	『東邦近世史 下巻』	田中萃一郎		<岩波文庫>
1943年2月	『尚書正義 第四冊』	吉川幸次郎		
1943年4月	『支那文学思想史』	青木正児		
1943年4月	『続 大陸文化研究』	京城帝国大学・大陸文化研究会 編		
1943年6月	『易と中庸の研究』	武内義雄		
1943年7月	『中華民国三十年史』	橘樸		<岩波新書>
1943年8月	『リヒトホーフエン 支那』	能登志雄 訳		<東亜研究叢書>
1943年8月	『東邦の理想』	岡倉覚三 著 村岡博 訳		<岩波文庫>
1943年11月	『学記・大学』	武内義雄 訳注		<岩波文庫>
1944年3月	『支那地史の研究 上巻』	坂本峻雄 訳編		<東亜研究叢書>
1944年5月	「支那文学」	工藤篁	『一橋論叢』	魯迅「中国小説史略」・胡適「白話文学史」・周作人「中国新文学的源流」について
1944年8月	『支那人の古典とその生活』	吉川幸次郎		
1944年11月	『宋名臣言行録（上）』	和田清 校閲 河原正博 訳注		<岩波文庫>
1945年10月	『紅樓夢（四）』	曹雪芹 著 松枝茂夫 訳		<岩波文庫>

参考文献

<単行本>

- ・岡本隆司『近代日本の中国観—石橋湛山・内藤湖南から谷川道雄まで』（講談社 2018年7月）
- ・飯田泰三『大正知識人の思想風景—「自我」と「社会」の発見とそのゆくえ』（法政大学出版局 2017年4月）
- ・植田康夫、紅野謙介、十重田裕一編『岩波茂雄文集 3 1942-1946年』（岩波書店 2017年3月）
- ・植田康夫、紅野謙介、十重田裕一編『岩波茂雄文集 2 1936-1941年』（岩波書店 2017年2月）
- ・植田康夫、紅野謙介、十重田裕一編『岩波茂雄文集 1 1898-1935年』（岩波書店 2017年1月）
- ・保田龍夫『日中関係の針路とメディアの役割』（公益財団法人新聞通信調査会 2014年3月）
- ・金山泰志『明治期日本における民衆の中国観』（芙蓉書房 2014年2月）
- ・テツオ・ナジタ著、坂野潤治訳『明治維新の遺産』（講談社 2013年8月）
- ・安倍能成『岩波茂雄伝』（岩波書店 2012年12月）
- ・子安宣邦『日本人は中国をどう語ってきたか』（青土社 2012年12月）
- ・吉田則昭・岡田章子編『雑誌メディアの文化史—変貌する戦後パラダイム』（森話社 2012年12月）
- ・松本三之介『近代日本の中国認識』（以文社 2011年8月）
- ・小林道彦・中西寛『歴史の桎梏を越えて—二十世紀日中関係への新視点』（千倉書房

2010年9月)

・大野俊編『メディア文化と相互イメージ形成：日中韓の新たな課題』(九州大学出版会
2010年3月)

・佐藤卓己『輿論と世論：日本的民意の系譜学』(新潮社 2008年9月)

・クリスティ著、張士尊・信丹娜訳『奉天三十年(1883-1913)——杜格尔德・克里斯蒂的
経歴与回憶』(湖北長江出版集団・湖北人民出版社 2007年2月)

・言論NPO『メディアの責任』(言論NPO 2006年12月)

・岩波書店編集部『岩波への手紙』(岩波書店 2003年11月)

・『講談社日本人名大辞典』(講談社 2001年12月)

・鈴木貞美編『雑誌『太陽』と国民文化の形成』(思文閣出版 2001年7月)

・岡本幸治編『近代日本のアジア観』(ミネルヴァ書房 1998年5月)

・永嶺重敏『雑誌と読者の近代』(日本エディタースクール出版部 1997年7月)

・戸叶勝也『レクラム百科文庫—ドイツ近代文化史の一側面』(朝文社 1995年12月)

・『岡山県歴史人物事典』(山陽新聞社 1994年10月)

・吉田曠二『魯迅の友・内山完造の肖像』(新教出版社 1994年9月)

・古屋哲夫『近代日本のアジア認識』(京都大学人文科学研究所 1994年3月)

・馮崇義『羅素与中国：西方思想在中国的一次経歴』(三聯書店 1994年2月)

・アレン・S. ホワイティング著・岡部達味訳『中国人の日本観』(岩波書店 1993年12月)

・小林勇『惜櫟荘主人—一つの岩波茂雄伝』(講談社 1993年9月)

・竹内実『日本人にとっての中国像』(岩波書店 1992年8月)

・伊東昭雄『アジアと近代日本』(社会評論社 1990年2月)

・田中壮吉『「文求堂」主人田中慶太郎：日中友好的先駆者』(極東物産出版 1987年
11月)

・後藤孝夫『辛亥革命から満州事変へ—大阪朝日新聞と近代中国』(みすず書房 1987年
10月)

・牧野力編『ラッセル思想辞典』(早稲田大学出版部 1985年5月)

・山本遺太郎『岡山の文学アルバム』(日本文教出版 1983年2月)

・藤本博生『日本帝国主義と五四運動』(『京都大学人文科学研究所共同研究報告』『五四運

動の研究』第一函3』同朋社 1982年3月)

- ・野村浩一『近代日本の中国認識』(研文出版 1981年4月)
 - ・西谷能雄『出版界の虚像と実像』(未来社 1981年3月)
 - ・小泉譲『魯迅と内山完造』(講談社 1979年6月)
 - ・関忠果『雑誌『改造』の四十年』(光和堂 1977年5月)
 - ・歴史学研究会・日本史研究会『講座日本史 第7巻 日本帝国主義の崩壊』(東京大学出版会 1975年3月)
 - ・竹内好・橋川文三『近代日本と中国 下』(朝日新聞社 1974年1月)
 - ・小沢正元『内山完造伝』(番町書房 1972年1月)
 - ・安藤彦太郎『日本人の中国観』(勁草書房 1971年1月)
 - ・栗田確也『出版人の遺文 中央公論 社嶋中雄作』(栗田書店 1969年2月)
 - ・栗田確也『出版人の遺文 改造社 山本実彦』(栗田書店 1969年2月)
 - ・外務省編『外交年表並主要文書 下巻』(原書房 1966年1月)
 - ・岡野他家夫『日本出版文化史』(春歩堂 1962年10月)
 - ・『中央公論社七十年史』(中央公論社 1955年1月)
 - ・クリスティ著、矢内原忠雄訳『奉天三十年』(岩波書店 1938年11月)
 - ・那珂通世、和田清訳『支那通史』(岩波書店 1938年)
 - ・山本実彦『支那事変—北支之巻』(改造社 1937年10月)
 - ・村上啓夫訳『社会改造の原理』(『世界大思想全集45』(春秋社 1929年5月)
 - ・Bertrand Arthur William Russell『The Problem of China』(London、Allen & Unwin 1922)
 - ・中沢臨川『嵐の前』(改造社 1921年)
 - ・中沢臨川『新社会の基礎』(改造社 1920年)
- <論文・雑誌・新聞記事等>
- ・許丹青「バートランド・ラッセルの紹介を通して見た『改造』の対中国認識」(『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』 (48) 2019年12月)
 - ・許丹青「1920年代の『改造』における対「中国」言説」(『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』 (45) 2018年3月)

- ・根岸智代「1930年代半ば中国再認識をめぐる日本の論壇—『中央公論』誌を中心にして」(『現代中国研究』) (35・36) 中国現代史研究会 2015年11月)
- ・楊沛「雑誌『旅』に見られる近代日本人の中国観について」(『立教大学ランゲージセンター紀要』) (34) 2015年10月)
- ・王中忱「『改造』雑誌与魯迅的跨語際写作」(『魯迅研究月刊』) 2015第10期)
- ・黄翠娥「佐藤春夫の中国観について:戦時中を中心に」(『日本語日本文学』) 42 2014年11月)
- ・岡本隆司「近代日本がみつめた中国(2)石橋湛山の中国観」(『本』) 39(10) 2014年10月)
- ・玉井裕志「憧れの円本—『現代日本文学全集』と改造社「山本実彦」社長の功績」(『葦牙』) (40) 2014年7月)
- ・張鈴「戦時下のリベラリストの東洋言説:谷川徹三の1930年代末期の〈東洋と西洋〉論をめぐる」(『名古屋大学人文科学研究』) 42 2014年3月)
- ・劉峰「近代日本の「アジア主義」再考—研究史と課題の整理」(『千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』) (264) 2013年2月)
- ・呂慧君「『大陸新報』から見る内山完造の中国観(1)」(『比較文化研究』) 101 2012年3月)
- ・平野幸治「文学とジャーナリズム—小説の観点から」(『上智短期大学紀要』) (31) 2011年)
- ・劉偉「中国現代文学的の日本伝播」(『社会科学家』) 2011年2月)
- ・高栄蘭「出版帝国の戦争—一九三〇年前後の改造社と山本実彦『満・鮮』から」(『文学』) 11(2) 2010年3月)
- ・木村泰枝「西方・日本・中国・日本的「上海梦想」」(復旦大学博士論文) 2008年)
- ・川田敬一「「五箇条の御誓文」再考」(『日本学研究』) (10) 2007年12月)
- ・武継平「「支那趣味」から「大東亜共栄」構想へ—佐藤春夫の中国観」(『立命館言語文化研究』) 19(1) 2007年9月)
- ・西村成雄「日中戦争前夜の中国分析—「再認識論」と「統一化論争」」(『「帝国」日本の学知』) 岩波書店 2006年5月)

- ・大塚桂「五箇条の御誓文・再考」(『駒澤大學法學部研究紀要』 (64) 2006年2月)
- ・銭昕怡「1920年代における長谷川如是閑の中国革命論」(『同志社法学』 56(7) 2005年3月)
- ・和田守「近代日本のアジア認識—連帯論と盟主論について」(『政治思想研究』 (4) 2004年5月)
- ・呉懷中「1920年代後半における大川周明の中国認識—滿蒙問題対策との関連の視角から」(『中国研究月報』 58(1) 2004年1月)
- ・十重田裕一「出版メディアと作家の新時代—改造社と横光利一の1920-30年代」(『文学』 4(2) 2003年3月)
- ・西谷紀子「長野朗の1920年代における中国認識」(『大東法政論集』 11 2003年3月)
- ・川島真「中華民国外交史から見た現代中国:民国前期外交史からの問い」(『北大法学論集』 51(4) 2000年11月)
- ・飯塚浩一、有山輝雄、竹山昭子「メディア史研究の方法をめぐって」(『マス・コミュニケーション研究』 57(0) 2000年)
- ・山本義彦「準戦時・戦時体制下(日中戦争期)の清沢瀏—あるリベラリストの中国認識(その2)」(『近きに在りて』 35 1999年6月)
- ・川島真「中華民国北京政府の対非列強外交」(中央大学人文科学研究所『民国前期中国と東アジア世界の変動』 中央大学出版部 1999年)
- ・唐政「魯迅与日本改造社同人」(『魯迅研究月刊』 1999年第1期)
- ・山本義彦「準戦時・戦時体制下(日中戦争期)の清沢瀏—あるリベラリストの中国認識(1)」(『近きに在りて』 34 1998年11月)
- ・陸艶「1930年代中国社会の風景:内山完造の中国観から」(『龍谷大学仏教文化研究所所報』 21 1997年10月)
- ・袁克勤「吉田茂の中国認識と政策」(『北海道教育大学紀要 第1部 B 社会科学編』 46(1) 1995年8月)
- ・田中浩「長谷川如是閑の中国認識—辛亥革命から満州事変まで」(『経済学論纂』 34 1994年2月)

- ・萩野脩二「関于一个知識分子的生涯—以『改造』雑誌社総経理山本実彦为中心」(『関西大学文学論集』 42(4) 1993年3月)
- ・渋谷香織「横光利一の中国観—「上海」を中心にした一考察」(『東京女子大学紀要論集』 38(2) 1988年3月)
- ・三浦俊彦「バートランド・ラッセルと中国・日本」(『比較文学』 29(0) 1987年)
- ・西村成雄「「中国統一化」論争の一側面—日中戦争前夜の中国と日本」(『歴史学研究』 391号 1972年12月)
- ・小林文男「矢内原忠雄の中国観—「中国再認識」への志向と日中戦争批判の論理」(『アジア経済』 13(2) 1972年2月)
- ・野沢豊「「中国統一化」論争について」(『「中国統一化」論争の研究』 アジア経済研究所 1971年9月)
- ・巖谷大四「明治・大正・昭和、出版文化を開拓した人々—10—山本実彦—「改造」の急進主義と円本革命」(『総合ジャーナリズム研究』 7(1) 1970年1月)
- ・山根幸夫「日本人の中国観—内藤湖南と吉野作造の場合」(『東京女子大学論集』 19(1) 1968年9月)
- ・馬場明「第一次山東出兵と田中外交」(『アジア研究』 10(3) 1963年)
- ・「貴族院質問事項」(1945年3月)(『岩波茂雄文集 3 1942-1946年』(岩波書店 2017年3月))
- ・「日本の出版事業について」(1941年)(『岩波茂雄文集 2 1936-1941年』(岩波書店 2017年2月))
- ・「風樹会設立の趣旨」(1940年10月30日)(『岩波茂雄文集 2 1936-1941年』(岩波書店 2017年2月))
- ・「何を改革すべきか」(『中央公論』 1939年5月号)(『岩波茂雄文集 2 1936-1941年』(岩波書店 2017年2月))
- ・「五箇条の御誓文 この精神を体得せよ」(『新聞之新聞』 1939年5月3日)(『岩波茂雄文集 2 1936-1941年』(岩波書店 2017年2月))
- ・「国民精神総動員の強化に関する意見」(1939年3月)(『岩波茂雄文集 2 1936-1941年』(岩波書店 2017年2月))

- ・「岩波新書を刊行するに際して」(『思想』第198号 1938年11月)(『岩波茂雄文集 2 1936-1941年』(岩波書店 2017年2月))
- ・「時局下の雑誌観」(『新聞之新聞』1938年9月21日)(『岩波茂雄文集 2 1936-1941年』(岩波書店 2017年2月))
- ・「古典の普及 支那をも尊重 新世界観の創造へ」(『国民新聞』1938年)(『岩波茂雄文集 2 1936-1941年』(岩波書店 2017年2月))
- ・「銃後の青年に対して」(1938年8月)(『岩波茂雄文集 2 1936-1941年』(岩波書店 2017年2月))
- ・「安部磯雄推薦状」(1937年4月)(『岩波茂雄文集 2 1936-1941年』(岩波書店 2017年2月))
- ・「三輪寿壮推薦状」(1937年4月)(『岩波茂雄文集 2 1936-1941年』(岩波書店 2017年2月))
- ・「黒色事件を直視して」(『東京朝日新聞』長野版 1937年1月16日)(『岩波茂雄文集 2 1936-1941年』(岩波書店 2017年2月))
- ・「年賀状」(1937年1月1日)(『岩波茂雄文集 2 1936-1941年』(岩波書店 2017年2月))
- ・「時局に際し同業に告ぐ」(1932年10月)(『岩波茂雄文集 1 1898-1935年』(岩波書店 2017年1月))
- ・「特集支那号」(『思想』 岩波書店 1929年7月)
- ・「対支関係の前途と床次氏の立場」(『中央公論』巻頭言 1929年2月号)
- ・山本実彦「興亡の支那を凝視めて」(『改造』「臨時増刊」 1927年12月号)
- ・「日支両国大衆の精神的連繫」(『中央公論』巻頭言 1927年5月号)
- ・「無産政党に代りて支那南方政府代表者に告ぐ」(『中央公論』巻頭言 1927年4月号)
- ・張東蓀「西方文明与中国」(『東方雑誌』 1926年12月)(『五四前后東西文化問題論戦文選』 中国社会科学出版社 1989年3月)
- ・常燕生「東西文化問題質胡適之先生——讀《我們对于西洋近代文明的態度》」(『現代評論』1926年8・9月)(『五四前后東西文化問題論戦文選』 中国社会科学出版社 1989年3月)

- ・希祖「我們对于西洋近代文明的態度」(『政治生活』 1926年7月)(『五四前后東西文化問題論戰文選』 中国社会科学出版社 1989年3月)
- ・「現代支那号」の広告(『改造』 1926年7月号)
- ・小村俊三郎「支那の對外運動とその立体的考察」(『中央公論』 1925年9月号)
- ・松井等「支那問題の重点」(『中央公論』 1925年9月号)
- ・米田実「支那の国権問題と英米の政策」(『中央公論』 1925年9月号)
- ・座談会「対支国策討議」(『改造』 1924年11月号)
- ・「編輯だより」(『改造』 1924年11月号)
- ・吉野作造「日支条約改訂問題」(『中央公論』 卷頭言 1923年4月号)
- ・バートランド・ラッセル「未開国に於ける社会主義」(『改造』 1922年5月号)
- ・バートランド・ラッセル「支那の国際的地位を論ず」(『改造』 1922年4月号)
- ・西田幾多郎「学者としてのラッセル」(『改造』 1921年9月号)
- ・土田杏村「ラッセル氏と露国及日本を語る」(『改造』 1921年9月号)
- ・桑木彥雄「文明は寧ろ一様性」(『改造』 1921年9月号)
- ・北沢新次郎「ラッセル及其の一行」(『改造』 1921年9月号)
- ・大杉栄「苦笑のラッセル」(『改造』 1921年9月号)
- ・桑木巖翼「鋭角的人物」(『改造』 1921年9月号)
- ・バートランド・ラッセル「社会組織の良否の分岐点」(『改造』 1921年4月号)
- ・バートランド・ラッセル「過激派ロシアの前途」(『改造』 1921年2月号)
- ・吉田静致の「ラッセルの愛国心論を読みて」(『東京朝日新聞』 1921年2月13日—1921年2月15日)
- ・中沢臨川「政治の理想」(『改造』 1920年10月)
- ・中沢臨川「社会民主主義是非」(『改造』 1919年12月号)
- ・吉野作造「狂乱せる支那膺懲論」(『中央公論』 卷頭言 1919年7月号)
- ・杉森孝次郎「労働問題の核心」(『中央公論』 1919年7月号)
- ・佐藤鋼次郎「講和条約の基本的考察と将来の世界的変局に対する日本の国是」「四、妄想的軍備縮小案をわらって日支の文化運動を高唱す」(『改造』 1919年6月号)
- ・「支那の排日運動其根柢的原因」(『東京朝日新聞』 1919年12月19日(『日本新聞五四報

道資料集成』 京都大学人文科学研究所 1983年2月)

・「北京学生狂態」(『東京朝日新聞』1919年12月12日)(『日本新聞五四報道資料集成』
京都大学人文科学研究所 1983年2月)

・「支那人の運動」(『時事新報』1919年5月16日)(『日本新聞五四報道資料集成』 京都
大学人文科学研究所 1983年2月)

・「在支米人の妄動」(『大阪朝日新聞』1919年5月15日)(『日本新聞五四報道資料集成』
京都大学人文科学研究所 1983年2月)

・「学生暴動裏面」(『京都日出新聞』1919年5月11日)(『日本新聞五四報道資料集成』
京都大学人文科学研究所 1983年2月)

・「背後を見よ」(『国民新聞』1919年5月9日)(『日本新聞五四報道資料集成』 京都大
学人文科学研究所 1983年2月)

・「排日気勢重大一近因は山東遠因は借款」(『国民新聞』1919年5月7日)(『日本新聞五
四報道資料集成』 京都大学人文科学研究所 1983年2月)

謝辞

本論文の作成にあっては、多くの先生方からのご助力を賜りました。主指導教員を担当してくださった遊佐徹教授には、長期にわたって丁寧なご指導とご鞭撻をいただきました。本論文を提出にあたり、心から御礼申し上げます。また、橘英範先生、西山康一先生には、研究及び講座の演習にて多大なるご指導をいただきました。深く感謝いたします。そして、「第64回中国四国地区中国学会大会」、「第1回浙江工商大－岡大青年研究者国際研究集会」、「中国社会文化学会2020年度大会自由論題研究報告」の学会では、先生方から幅広い視野から様々なご指摘をいただきました。記して感謝申し上げます。なお、6年間研究室のメンバーたちには日々様々な場面で大変お世話になりました。心より感謝いたします。最後に、これまで私をあたたく応援してくれた両親と夫に心から感謝します。本当にありがとうございました。